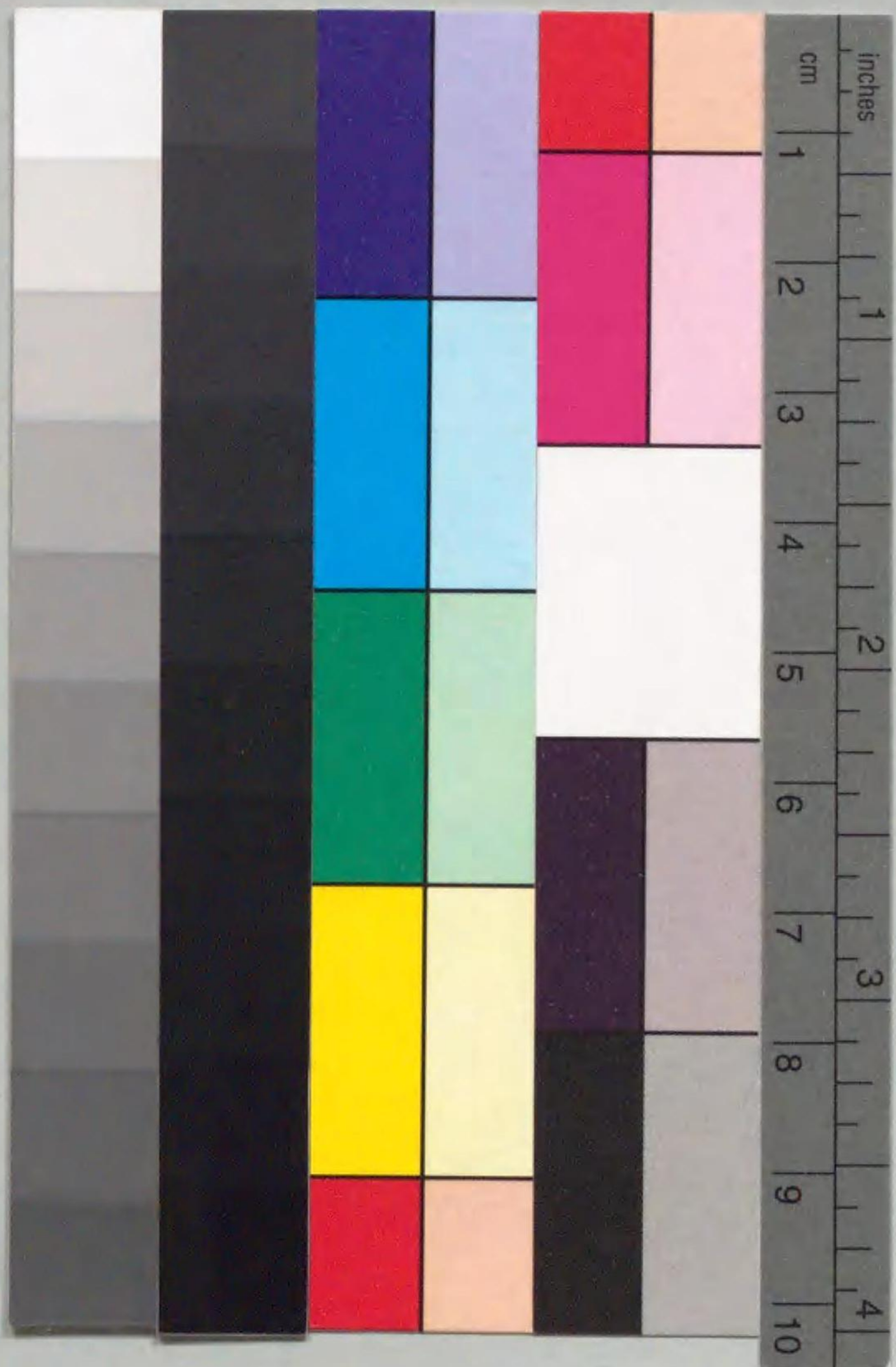


918
G29



00219808



文海學士藤村作譯

榮華物語

現代語譯國文學全集第十一卷

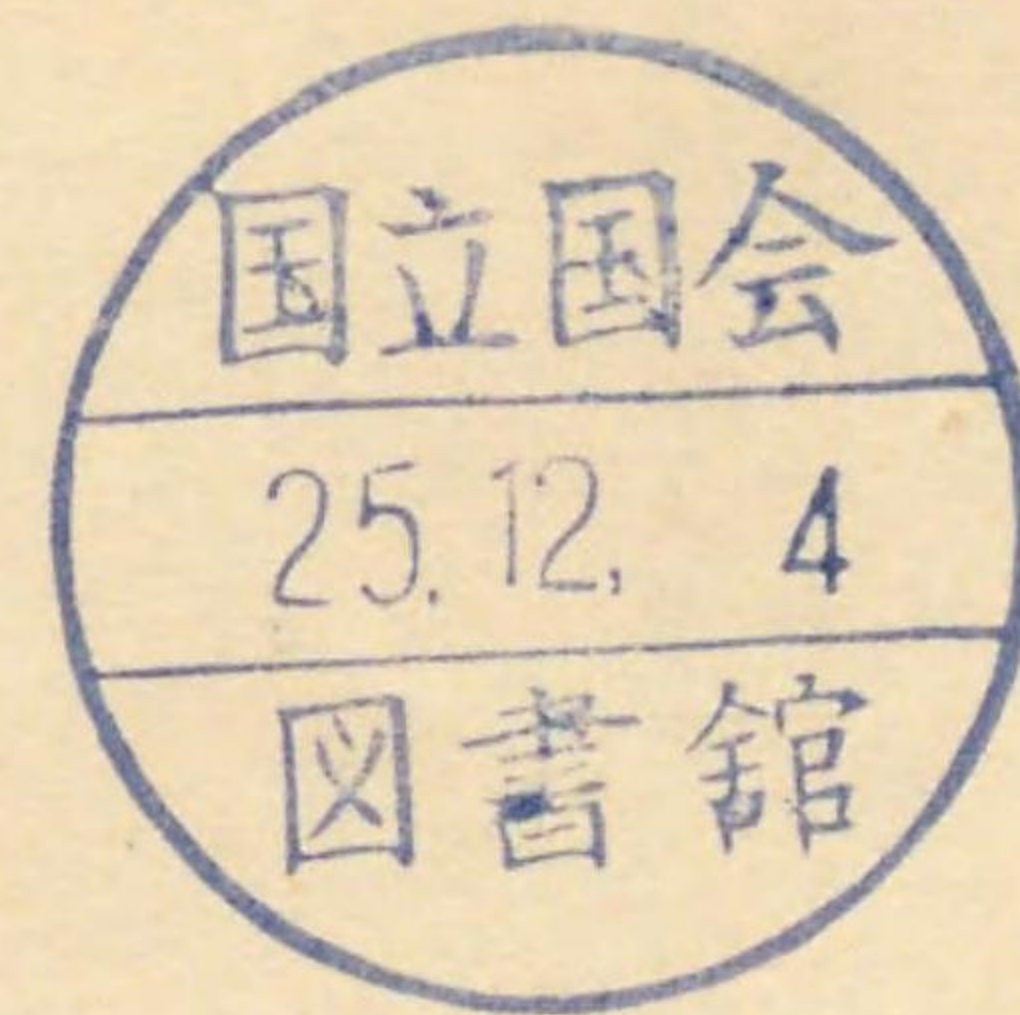
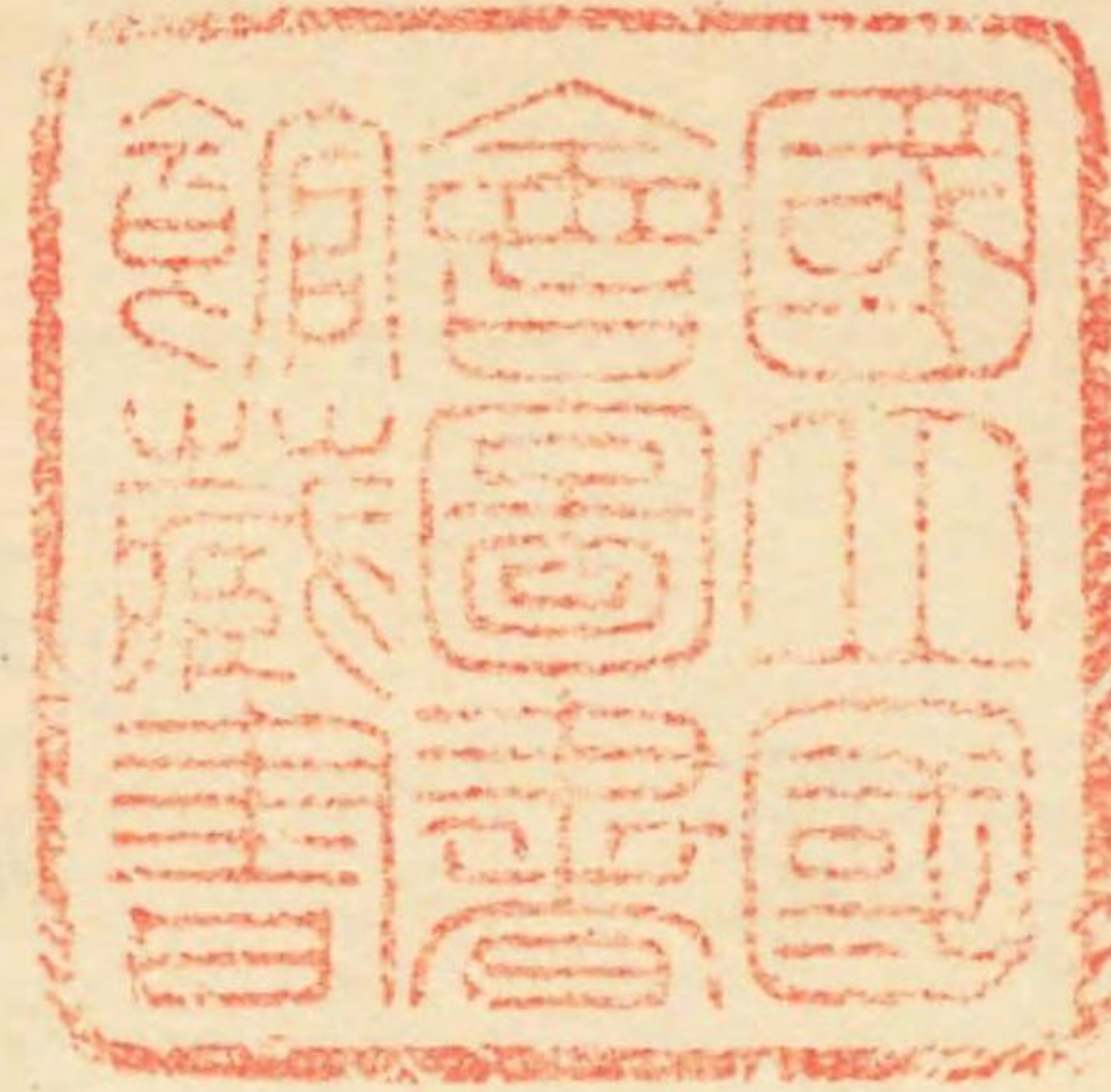
發行 井凡閣

文
博
學
士
藤
村
作
譯

榮
華
物
語

〔現代語譯國文學
全集第十一卷〕

發
兌
非
凡
閣



219808

目次

凡例	一
解説	三

月の宴	一
花山	二二
さまざまのよろこび	五三
見はてぬ夢	七〇
浦々のわかれ	九二
耀く藤壺	一〇九

鳥邊野	一二一
はつ花	一四三
岩蔭	一九五
日かげのかづら	二〇八
つぼみ花	二二六
玉の村菊	二四二
木綿四手	二六三
浅みどり	二八二
疑	二九八
本のしづく	三一五
後悔大將	三三四
若枝	三四八
嶺の月	三六五

楚王の夢	三七九
若木	四〇一
玉の飾	四一六
鶴林	四三四

凡例

一 本書は榮花物語の月の宴より鶴林まで、即ち藤原氏權榮の由來より、道長の榮花生活の終り彼の薨去に至るまでの抄譯であり、現代文譯である。後部を省略したのは一つには、紙面の都合であり、又一つには本書の中心重要部はこゝに盡きると考へるからである。

一 古典の現代文譯は主として、現代に生きる我々の爲にするものであり、古典を我々の中に、生かす爲のものであり、我々の新しい生命の創造に役立たしめる爲のものであるから、この立場から見ても餘り用のないと思はれる箇所はこれを削り、又今の時代に不適當と思はれる表現は、これを適當なものに改めた。

一 敬讓語の使用に於て原本を改めたところがある。これは原本が女房の筆録と思はれるのであるから、攝關等の人臣に對するものに、現代國民一般の精神に一致しないものがあると思ふからである。

一 皇室と藤原氏との關係は重大事であるが、伊周、隆家の一件はこれを省いた。又單なる佛事に關すること、瑣末なる行事に關することの中には、割愛したところが少くない。

解 說

榮花物語は、四十卷より成る、平安時代に綴られた歴史物語の一つである。歴史物語といふのは、我が國文學史中に於ける一種目であつて、國文學の史的展開の中に在つて、特殊な性質を有つ中世文學の一種であり、本書の外に大鏡、増鏡、水鏡、今鏡の所謂四鏡類と共に一群を成すものである。史實の敘述、描寫を主として、その資料の取捨、運筆の上に文學性を有たしめたものであるから、一般史書の敘述の乾燥なものと同一視することは出来ない。乾燥な外面的史實の中に人間生活の如實なものを織り込んで、史書に潤ひを帯びしめ、滋味を與へたものである。故に古來一般の史書と切りはなして、これを文學として取扱ひ、文學史中に歴史物語の種目を立て來つたのである。

榮花物語の作者については、古來異説が多くある。又この四十卷全部を同一人の作とするか否かについても、種々論議されて來たものである。今此處にくはしい考證を書くことは省略したい。

大體に於てこれを正續二編に分つべきであらうと考へる。第一月の宴から第卅鶴の林迄を一人の作とする事は動かす事は出来ない。それ以下道長薨後を敍した十卷は、大凡二人の作になるらしい形跡が窺へるが、はつきりした事は分らない。正篇の方の著者は、古來藤原爲業説と赤染衛門説とがあるが、爲業説は時代の點からも、又著者の如何にも女性らしい點からも、排すべきであらう。赤染衛門説は大體に於て妥當であるから、同女の作としても不都合はあるまいと考へられる。續篇の著者は不明である。何れやはり後宮の女房の手に成るものらしいとは思はれるが、正篇よりも中心がはつきりせず、ごたく／＼してゐて筆致も劣つてゐる。紙數の都合もあるので、この部分は本書には省いた。

榮花物語と題名にあるが如く、本書の中心は御堂關白藤原道長の榮花生活を敍述するにある。さうして一面に於ては源氏物語等の物語文學の系統を引いて彼等の生活を描寫したものである。史書としては事實そのまゝを編年的に書いてあるが、これに文學性を有たしめた點では大鏡以下の記述文學たる歴史物語の先驅をなしてゐる事は頗る注目すべきである。併し史書としては、當時の重大な國家的、社會的事象等に全然脱落してゐるものがある憾みはあるが、當時の宮廷生活貴族生活に浸りきつてゐる著者の女性らしい細かな觀察で、内部から記した文學としては甚だ興

味あるものである。入内、疾病、死、葬送、祈禱、遊宴、裝束調度等を細かく敍寫して、當時の貴族を目に睹るが如く感ぜしめる。類型的な嫌ひがないでもないが、しかし處々に物語文學として光つた描寫が見られるのである。凡例にいふが如き趣旨で、残念ながら省いた箇所も少くないが、「耀く藤壺」の一條天皇と藤原彰子との御仲らひ、「本の雫」の小一條院女御延子を失つた父顯光の悲歎、「玉の村菊」における頼通の病氣、「若枝」の枇杷殿妍子の大饗、「木綿四手」の小一條院道長の御婿となられる事等々は非常に面白いと思ふ。

この物語を通じて、一貫して流れる精神は、著者の現實稱讚、榮花禮讚である。反面には佛教的な無常觀も現れてゐるが、併しこれらは著者にあつては、少しも矛盾してゐない。人生の悲哀といふものを深く突込んでゐないのは物足りぬ點であるが、又此處には平安朝人の物のあはれの精神をよく表してゐることを認め得ることに暫く満足しておきたい。

現代
語譯
榮
華
物
語

月の宴



神武天皇以來、我が國を治め給うた天皇は六十餘代あらせられたが、その御次第を總て書く事は出來ないから、近い御代の事のみを記さうと思ふ。

嘗て宇多天皇と申上げるお方がおいでになつた。この天皇の多くの皇子方の中の第一皇子敦仁親王が皇位をお繼ぎ遊ばした。このお方を醍醐天皇と申上げる。この天皇の御代をば畏れ多くも世に治世の例として引き奉るのである。御在位三十三年に渡らせられ、皇子十六方、皇女も數多おいで遊ばした。藤原基經の女穩子と申す女御のお腹の第十一皇子寛明親王が、その次の御位に御つきになつた。朱雀天皇と申上げるお方である。

1 次
次の天皇はこの朱雀天皇と御同腹の第十四皇子成明親王で、天慶九年四月十三日に御即位遊ばされた。この天皇を村上天皇と申上げる。醍醐天皇と共に引續き英邁の君と仰がれさせられた。

和歌にも秀でさせられ、情心も深くしました。

久しく皇子にお立ちになるべき皇子がお出来にならなかつたので、多くの女御・御息所方は、どなたも氣を揉んでいらせられた、その中に藤原師輔の女安子と申す女御に御懷妊の御様子が見えたとので、おめでたい事と騒いでゐたが、お産れになると皇女で、甚だ不本意であつた。間もなく藤原元方の女であつた御息所が、御懷妊の由を奏上して、お里方へ宮中から御退出になつたので、世人は今度こそ皇子だらうと大騒ぎしてお待ち申上げてゐると、第一皇子廣平親王が御誕生になつた。世人は歡聲を擧げてお慶び申上げた。

宮中からは、御劔の御下賜を始めとして、定例の御儀を執行はせられた。元方大納言は大喜びで「皇太子はまだお定まりになつてゐないのだから、この度御誕生の皇子のお立ちになることは間違あるまい。」と末頼もしう思つてゐられた。

この皇子御誕生の騒ぎの納まらぬ中に、又もや安子女御が御懷妊遊ばされたといふ事が、自然と世に洩れ聞えてきた。元方大納言は、「假令さうでもこの前のこともあるから」などと自分でもいひ、又人にも慰められてゐられた。

太政大臣（師輔の父忠平）や、九條殿（師輔）は大相な喜びであつた。主上は世間はともあれ

第一皇子が既にあらせられるのを、喜ばしくも又頼もしくも思召された。御尤もな事である。

その中に、久しく病んでゐた太政大臣（忠平）が、天曆三年八月十四日、薨去された。卅六年の長い間大臣の位にあり、年齢は已に七十であつた。その子實頼、師輔は左右大臣であり、行末頼もしく主上も御親戚の御間柄でいらせられ、この一門は誠に幸福なことであつた。お孫に當らせられるので御喪に服せられる爲に、安子女御も、芳子女御（宣耀殿）も宮中を退下して、お里方においてになつた。この大臣は寛厚仁慈なる政を執られたので、世人は大相その薨去を惜しんだ。その御諡を貞信公と申した。

かくてその後を實頼左大臣が襲はれる事になつた。弟九條殿（師輔）はその次位につかれた。そこで世人は「一くるしき二」と噂した。兄は弟に學才も劣り、人望も少いので心苦しからうといふのである。

その中に年も變つて、天曆四年となつた。五月廿四日、安子女御は皇子を御出産遊ばされた。宮中からは直ちに御劔の下賜その他の御儀格別立派に執行はせられた。世間の騒ぎも亦一入であつた。元方大納言はこれを聞いて、胸も塞がるばかり心配して、三度の食事も咽喉を通らなくなつた。「大變意外な失敗をした」と心配の餘り、終に病人の様になり、「今は一時も早く死んでしま

ひたい」とばかり考へた。情ない心である。

九條殿(師輔邸)に於ける御産所の種々な御儀は、到底こゝに書き現す事は出来ない。大臣(師輔)の心を思ひやつても、これ程のめでたいことが他にあらうか。小野宮の大臣(實頼)も第一皇子の時よりは、この度の御誕生を喜ばれるであらう。主上も既に第一皇子まします上に、又この安子女御に第二皇子がお生れになつたので、この上の御望みはないやうに至極御満足に拜された。御五十日かの御儀等も瞬く間に過ぎて、御誕生三月目の七月廿三日に皇太子にお立ちになつた。それにつけても、九條殿(師輔)は、父太政大臣(忠平)の薨去を返すべく、殘念に思ひ、かういふめでたい折も憚らず、悲歎の涙にくれられた。

前太政大臣(忠平)の子息達は、兄弟でも各々其の性質を異にしてをられた。小野宮の大臣(實頼)は歌が巧みて、色好みであつたが、陰鬱で、氣のおかれる方であつた。九條の大臣(師輔)は寛容で、知る、知らぬの差別なく誰でも同様に親しくされ、久しく御無沙汰してゐた人が偶たまにお訪ねしても、常に來る人と變らず、心安く、懇ろにもてなされたので、故殿(忠平)に随つてゐた人々も大方はこの殿の處に集つて來た。又小一條の師尹の大臣は、知ると知らぬによつてはつきり差別を立てられる様な、頑なな性質の方であつた。この様な兄弟三人三様の性質は、誠に面白

い事であつた。

皇太子が段々御成長になるにつけて、大相御立派に、御美しくおなりになつたので、九條殿(師輔)に對する君寵は、益々重くなるばかりであつた。皇太子のみならず、第四皇子(爲平親王)、第五皇子(後圓融天皇)も安子女御にお出來になつておいでになるので、益おめでたいことであつた。でとうく天徳二年十月二十七日に、安子女御は皇后にお立ちになり、中宮と申上げる事となつた。中宮大夫のちいぶには、主上の御弟で、今は源姓を賜はつて臣籍にある源高明が任ぜられることになつた。以下の諸役人も格別入念に御選定になつた。九條殿(師輔)の喜びは限りもなく、誠にめでたい事であつた。

その中に皇太子も御四歳におなりになつた。その年の三月、元方大納言が薨去され、その女むすめの女御もうち續いて薨去遊ばされた。その靈のわざであらう、皇太子はともすると、御氣の毒なことがあらせられた。お立派な、美しいお方でいらせられたのに、璧玉の微瑕とも申上げたい様で誠に御いとほしい事であつた。色々壇を設けて御修法のことども御一生お手をお盡しになつたが、何の効果も現れなかつた。

皇太子には御元服の御年頃もお近づきになつたので、御女むすめをお持ちの親王・公卿達は、女御に

差上げたいとその氣ぶりを見せてをられたが、かういふ御様子であるので、さし當つて急にはその思召もなかつた。ところが此處に前の朱雀天皇がまたなきものと大切にお育てになつた皇女(昌子)があらせられた。かく大切に御養育遊ばされたのも、後々は皇后にお据ゑになる御つもりであらせられたであらうからといふので、この宮を參らせられる事に決したので、他の人々は思ひ諦めたのであつた。

第四皇子も次第に御成長になつて、もう御十二三歳にもおなりになつたので、御元服の御準備を始められた。主上も中宮(安子)も大相この皇子を御鍾愛になり、多くの公卿達も御女をその妃に上げたいと望まれたが、中宮大夫の源高明大將がこの上もなく大切にお育てになつた一人娘を差上げたいとほめかされたので、主上も中宮も大相お喜びになり、その御支度を調べさせられて、御元服の夜すぐにお上げになつた。一般には宮達は妃の邸へおいでになつて、御儀を擧げさせられるのであるが、この度は妃が女御・更衣の如く入内遊ばされたので、誠に珍らしくも華やかな事であつた。主上も、中宮も御嫁様あつかひを遊ばされたことが、大相興深い御ことであつた。間もなく式部卿重明親王がおかくれになつたので、その四十九日のお忌など過ぎて、この第四皇子を一品式部卿に任せさせられた。

その中に九條殿(師輔)の健康が勝れないやうになつた。始めは風邪であらうと、湯治をしたり、薬を飲んだりしてをられたが、段々重態におなりになつた。中宮も里邸なる師輔の邸に御退出になつた。師輔の子息達は數人をられたけれど、まだ立派に出世してゐる人はなかつた。中で一番よくいつた人は、中將(伊尹)であつた。

主上も師輔の病氣については大相御心を悩ましておいでになつた。皇太子の御後見なり、又四五の皇子女の御事等も、總てこの大臣を頼みにしていらせられたのに、萬一のことがあつたらどうしたものかと宸襟を悩ませられて、御見舞の御使も絶えず、又宮中でも御修法等行はせられた。誠に畏れ多い光榮と、世間でもお噂申してゐたが、とう／＼天徳四年五月二日出家、同月四日終に薨去された。年五十三歳であつた。未だそれほどの老年でもないのに残念なことで、惜しまぬ者もなかつた。主上も、「輔弼の臣として、誠に優れた者であつたものを」と、返す／＼もお歎き遊ばされた。しかし坤徳優れさせられる中宮がおいでになるのであるから、この上もなくおめでたい事である。天下の臣民、誰かこの皇后に推服し奉らぬ者があらう。

年月もはななく過ぎていつて、多くの皇子達もそれ／＼麗しく御成長になつた。主上は皇子女のことに付けて様々に御考へになつてゐたが、その中でもやはり中宮のお腹の皇子女の御事を

特に御配慮あらせられた。それにつけても、御後見たるべき師輔が世を去つた事を、くれぐれも口惜しく思召されて、「やはり一日も早く讓位して、心安く日を送ることの出来る身になりたい」と思召しながらも亦、「御在位のまゝ崩御になつた天皇の御大葬も大相嚴しく盛んに執行はれる。同じ事ならばその方が榮えある事である。」等と思召して日をお過しになつていらせられた。

式部卿宮(爲平親王)は、今は大相御成人遊ばしたので、御自身は宮中を出て、別の御邸にお住みになりたい御希望であつたが、主上も、中宮も中々お手放しにならなかつた。ところが不思議な事には、この皇子を皇位にお即け遊ばすことを面白くないと思召される事が起つたので、第五皇子(憲平親王)を將來は皇位にと思召したが、この皇子はまだ大相お幼少にいらせられた。それにつけても、師輔がたならばと思召になる事が多からう。

この頃、中宮は御懷妊の御様子なので、主上も御憂慮遊ばしていらせられたが、これまでの時とは違つて御苦しみになるので、中宮御自身も不安に思召して、七壇の御修法、長日の御修法、不斷の御讀經等を、朝廷でも、中宮の御方でも行はせられると、その効験が顯れて、御心地も爽やかにおなり遊ばしたので、一同愁眉を開くと、やがて又元のやうにお苦しみになつた。かくて月日の経過してゆく中に、中宮はお里邸に御退出遊ばさうとなさると、天皇はしきりにお引留め

になつたが、中宮は「それは畏れ多い事でございます」と仰せられて、御退出になり、斷えず御祈を行はせられた。中宮には多くの皇子皇女もおいでになるので、主上の御心づかひも格別であらせられた。誠にお道理なことと伺ひ奉られた。主上は御慰みの面白い御遊び等は一切お止めになつて、中宮のことばかり御心配あそばされるので、小野宮の大臣(實頼)が、「畏れ多いことである。かねてお慰み事に慣れておいでになるのに、今かうして沈んでばかりいらせられるのは、心苦しいことである」と思つて、いろ／＼お祈りなどをしてさし上げた。中宮がこれまで通りに上においでになれば、宮中も萬事よく整ひ、女御・御息所の方々も長閑にお暮しになることが出来る。今若し萬一の事が中宮のお身の上にあつたらば、さぞ見苦しい事が多からうと、世の人々も思ひ、宮中奉仕の方々もさぞかし御歎きになる事であらう。その中に御病氣は益々重くならせられたので、宮中でも、外でもこの御事を歎くばかりであつた。宮中からの御見舞は絶え間もなかつた。式部卿宮はかね／＼宮中をお出ましになりたい御心があつたので、この好機會にと思召して宮中をお出ましになつてしまつた。主上はかれこれで御心淋しく、いろ／＼御心もたなく思召すのであつた。皇女方には今暫く宮中にお留りになるやうお止め遊ばされた。五宮(憲平親王)も、悪靈のわざはひを思召して、御手許にお留めになつた。そして、皇子皇女達がお母さまの御

退出中さぞお淋しいからうと思召しては、いろ／＼お心づかひの折であるのに、皇子方の許へお渡りになつて、様々に御氣遣ひ遊ばされた。そんな時には、若し中宮に萬一の事があつたら、この宮達はどうなる事であらうと思召しては御涙のこぼれ落ちるのを、心強くも耐へ忍ばせられるが、御心の中は千々に亂れさせ給ふのであつた。主上は、中宮御懷妊中の御病氣であるので、何よりも危険な事と思召された。御病氣が長びいて自然衰弱も重らせられ、ともするとそのまゝおかくれになるのではないかと伺はれる御様子であつた。それを、側近の女房達が代る／＼九條邸へ參つては、歸つて奏上するので、主上にはこれほど喧ましい迄に御祈をしても少しもその驗の顯れないのは、一通りのことではないと、御心を悩ましておいで遊ばした。

中宮を悩まし奉る物の怪のわざはひも色々あるが、中でも、かの元方大納言の怨靈が最も怖ろしくお命をも取り奉るべき様子であつた。又その言ふ所によると、皇太子のお命をも取り奉らうとしてゐるのであつた。皇太子も中宮の御容態を大相御案じ遊ばした。宮中からの使者は晝夜を分たずしきりに參つてゐた。御兄弟の方達もおろ／＼してゐられた。

その中に御産の氣さへ拜されて、一層お苦しみになつた。かういふ時の爲に準備をした數多の僧侶の誦經の聲が一緒になつて聞えた時、中宮のお悩みは一入で、もうお息も絶えたやうでいられた。御殿の外内につめかけた人々は、額を下にすりつけて一所懸命に御安産を祈つてゐた。やがて御産聲が聞えたので、一同ほつと一安心して、御後産あごたんの事等騒いでゐると、急に御容態が變らせられて、人々の狼狽の中におかくれになつた。時に應和四年四月廿九日のことであつた。

宮中においでになつた宮様方も、御喪の爲に御退出になつた。此の度お生れになつた方は皇女であらせられた。宮様方は未だ幼くあらせられるので、何事もお分りにならぬ様であつたが、周囲の御様子にお感じになつたのか、大相お泣きになつた。式部卿宮(爲平親王)は伏し轉まわびお泣き遊ばされた。誠に御尤もな事であつた。主上も聞召して、夢心地にお歎き遊ばされ、お聲を惜しまずお泣きになつた。皇太子もこの頃は御正氣でいらせられたので、大變にお悲しみのお様子に拜し、見る人々皆涙を禁めかねた。

さうしてばかりもいらせられないので、御誕生の皇女は、かねての思召によつて、侍従の命婦が御乳母に奉仕した。ああ、若し中宮が御無事でいらせられたら、此の度は中宮としての御産故、御儀式なども定めて華やかな、立派な事であつたらうにと、御兄弟方や女房達はかきくどいて歎かれた。道理千萬のことであつた。

御遺骸なまがらを何時迄もかうして置き奉るわけにもゆかないので、二日経てから御葬送といふことにお定めになつた。その御儀式の有様など大相哀れにも悲しいことであつた。靈柩は、御生前内々にお召しになつた緑毛の車にお乗せ申した。然るべき公卿・殿上人は皆御葬列についてお送り申上げた。何よりも、式部卿宮が御靈柩車のすぐ後に御徒歩でお附きになつた御姿が、一番悲しく拜せられた。その御喪服等誠に御痛ましいことであつた。香の輿、火の輿等も見えた。これらは必ず用ゐられる事である。御供の男女は總て、端正な装束の上に白布で作つた狩衣のやうな物を着けてゐた。總ての御儀式の有様も言はず様なく嚴肅に行はれ、主上も、皇太子も御喪服を召さるべきであるので、まるで諒闇の様であつた。殿上人等も薄鈍色うすにじりの喪服を着た。

短い夏の夜ははかなく明けたので、御兄弟の方々は、僧俗共に皆打揃うて、木幡の中宮の御陵に詣でられた。途中の人々も、「生ある者は、遅かれ早かれ、一度は死んでしまふものではあるが、中宮がかく早くおかくれにならうとは思はなかつた。」と惜しみ奉り、又主上の御愛情が深く御歎きも一通りでないと洩れ承るにつけても、「やはり九條卿の御所縁ゆかりの方は違つたものと思はれる。」と申し、又繰返して、「主上の御在位中に薨御遊ばされた事も、又御光榮を添へて結構な事であつた。」と申上げるものも多かつた。第五皇子には未だ五六歳の御幼少でいらせられるの

で御喪服は召させられなかつた。平常の通りにしていらせられるのは、哀れな御ことであつた。月日は過ぎていつたが、御亡き後の御法事等は驚くばかり盛大に行はせられた。主上も御精進を續けさせられて、ひたすら中宮の御菩提を弔はせられた。

四十九日の御法事は、六月十七日に行はれた。人々は五月雨に濡れるが如く、又田夫の田植の時の袂にも劣らず、涙に袖を濡らしつゝ、事を執行つた。此の御儀はそれぐの役所の役人達が、然るべき朝廷の儀式に準じて定めたのである。

かくて御法事も済んだので、中宮の御病氣以來伺候してゐた、數多の僧侶も皆退出し、殿中の裝飾もすつかり改められた。しかしまだ、中宮の御腹の宮様方がおいでになるので、御機嫌伺ひにまゐる殿上人、公卿は相變らず絶えなかつた。又御叔父の殿方も、やはり宮様方の側近についてゐられるのも哀れに悲しく、又物心のつかせられた宮達は、色濃い御喪服をお召しになつていらせられるのも、誠に哀れに拜せられた。侍従の命婦を始めとして、少貳の命婦、佐の命婦等二三人集つて、宮様方の御傳育に當られた。この人々は、皆中宮御邸の女房で、宮中の女房も兼ねてゐる人々である。

宮様方は御忌も明けさせられて參内遊ばされた。この度御誕生の皇女もお忍びでお上りになつ

た。主上は御覽遊ばして大相哀れに思召された。皇女は大相お美しくあらせられた。御五十日の儀はお里の邸に於て執り行はれたが、御召物の色は總て墨染であつた。

年月もはかなく過ぎて康保四年となつた。此の頃、主上は御氣分が勝れさせられないので、御物忌等度々行はせられた。御自身にも御不安な御様子に拜せられた。御讀經、御修法等多くの壇を設けて行はれたが、その効驗は少しも見えなかつた。例の元方の靈も顯はれてやかましく言ふのであつた。天皇の御代の齡の盡きる時で、かく怨靈共が災するものであらうと、心ぼそく思召された。御讓位の御志もかねてあらせられたが、今となつては御在位のまゝにと思召す事であらう。御惱みが重らせられたので、小野宮の大臣(實賴)が祕かに、「もし萬一の事がございましたら、次の皇太子のみ位にはどなた様を。」と、御機嫌を伺ふと、「以前は式部卿宮をと思つてゐたが、今となつてはさうは行くまいから、五宮(後の圓融天皇)を立てようと思ふ。」と仰せられたので、承つて下られた。五月二十五日、終に崩御あらせられた。皇太子(冷泉天皇)が直ちに踐祚遊ばされた。主上の崩御は、恰も立派に光り輝いてゐる日月の表に俄に叢雲が掩ひかゝつた様な、又宮中の燈火を一時に消してしまつた様な有様であつた。その哀れさは何に譬へようもなかつた。多くの公卿・殿上人は手足のやり場もない様に惑ひ、「この様な君に再びお逢ひする事が出来ようか。自分も御後を追ひ奉らう。」と、足摺りをしつゝ泣くのであつた。

皇太子の御事はまだ何の御沙汰もないのに、世人は色々に豫想し奉つたのはよくある事で、をかした事であつた。小野宮の大臣(實賴)だけは存じてゐたが、別に何ともお洩らしになる事もなく、御葬送の御準備等にお忙がしかつた。

御葬送の當夜、葬儀官の補任が行はれた。平常の補任には喜ばかりがあつたが、この度には涙を流すことであつた。誠に悲しい事であつた。公卿・殿上人でこの選に洩れた者は一人もなく、皆補任されたので、殿上にはほんの少しの人が留まつたばかりであつた。御遺骸は村上といふ處に葬り奉つた。その御儀は譬へ様もなく立派であつた。世間では、「太上天皇の御葬儀は假令御立派でも大臣等のとあまり御違ひにならぬが、この度のは誠に珍らしい見物でございました。」とお噂申した。一七日以下の御法養も前の中宮の御時と同様に盛大な御有様であつた。かうして次第に月日も経た。宮々様・女御方の墨染の御喪服のお姿も哀れに見奉られた。同じく諒闇といつても、これは御在世中の崩御なので、天下中悉く烏の様であつた。墨染の染料に用ひる椎柴も、四方の山にはもう残り少なであらうと思はれた。

中陰等も終つて、人心も少し落着いたので、立太子の事も執行はせられる事となつた。九月一

日に、愈々五宮が皇太子にお立ちになつた。時に御年九歳であらせられた。冷泉天皇は御年十八歳であらせられた。御即位と同日に、女御も皇后に冊立せられ給うた。中宮と申上げる事になつた。この方は昌子内親王と申上げた方で、御父朱雀天皇の御希望通りにならせられたのはおめでたい事である。東宮大夫には中納言師氏、大傅には小一條の大臣(師尹)が任せられた。兩人共に九條殿(師輔)の兄弟の子息達である。九條殿の子息達はまだ位が低いので任命にはならなかつたのであらう。主上は御物怪のない時は、父天皇に大變よく似ていらせられた、それよりは少し御立派であらせられる様であつた。眞に御物怪だけが口惜しいことであらせられた。今年は諒闇の事として、御禊・大嘗會も行はれなかつた。

十二月十三日には、小野宮大臣(實頼)が太政大臣に、源氏の右大臣(高明)は左大臣に、右大臣には小一條の大臣(師尹)が任せられた。

その中に年も改まつて、安和元年となつた。正月の補任には様々のおめでたい事があつたが、中でも九條殿(師輔)の長男伊尹卿が大納言に昇進され、大相華やかな上達部になられた。

伊尹卿には御女が幾人もあつたが、長女をば女御に奉りたいと、種々支度を急いで居られた。入内は二月の豫定であつた。この事をお聞きになつて御遠慮の爲か中宮はお里邸に御退出遊ばさ

れた。平常も主上の御物怪が重いのでお里邸においでの方が多かつたのである。

二月一日に、女御が入内遊ばされた。その時の華やかな御有様は言ふまでもない。折角その甲斐あつて、主上の御寵愛も大相厚く、間もなく御懷妊になつた。この上もない事であつた。御父大納言は喜びやら心配やらで、胸もつぶれるばかりであつた。御祈りを限りなく行はせられた。主上も大相お喜びであつた。三月目になつたので、奏上して宮中を御退出になることになつた。その時の御有様も誠にめでたい事であつた。これにつけても、御祖父九條殿は誠に珍しい果報な方と、世間では噂した。

主上からは御見舞の御使が屢々あつた。女御と入れ代りに、中宮は宮中にお還りになつた。中宮は、皇女でいらせられた時も、今も變らず、誠に奥床しい、格別に尊くいらせられる方であつた。

昨年は諒闇として、人々の墨染の喪服の中に暮れたので、今年は御禊・大嘗會等で賑はしい事であらうと、世人は騒ぎ合つてゐた。この一年は、めでたい事、悲しい事、様々に事多い年であらうやうである。

伊尹の大納言は一條に住んで居られたので、一條殿と申してゐた。御女の女御は、御禊大嘗會

等果てて、世の中が少し長閑になつた頃、御出産遊ばされた。皇子であらせられたので、世間では壽ぎ合つた。鳴弦・御湯殿其他御産屋の儀のめでたさはいふまでもない。

太政大臣(實頼)を始め多くの顯官達がこの御殿に参り集つた。御七夜には、勸學院の學生達(がくしやう)・式部・民部の役人達も皆参つて、「一天下を知ろしめすべき方が生れ給ふ。」と賀詞を言上した。御祖父大納言の御満悦は申すまでもない。しかし、それにつけて父君が御存命ならば、丁度六十を越された頃である等とお考へになるにつけても、この世においてにならぬのを口惜しく思召すのであつた。御五十い日の儀も大相立派に行はれた。

はかなく年月は過ぎて、安和二年になつた。八月十三日主上御讓位遊ばされた。それにつけて皇太子が皇位をお繼ぎになつたが、御年十一であらせられた。次の皇太子には太上天皇の皇子のまだ嬰兒でいらせられる方がお立ちになつた。外祖父伊尹大納言の幸福はこの上もない。太上天皇は冷泉院にいらせられるので、冷泉天皇と申上げる事になつた。皇太子は御年二歳であらせられる。太政大臣が攝政たるべき宣旨を頂かれた。御禊・大嘗會も近づいたので、世の中は騒ぎ立つてゐた。

小一條の左大臣(師尹)は日頃氣分が勝れなかつたが、十月十五日に年五十六で薨去せられた。

御女宣耀殿の女御、公達方を始めとして大相お歎きになつた。代りには、在衡の大臣が任せられた。年改まつて、天祿元年正月二十七日には、この大臣が薨去せられた。年七十八。年の始めに大臣薨去の事があつたので、怪しく、怖ろしく思はれて、然るべき殿方は何れも謹慎してゐられた。右大臣には伊尹大納言が任せられた。

攝政殿(實頼)も妙に風邪がちで、内裏にあがられる事も稀であつた。もしこの殿が薨去されたならば、この一條の大臣(伊尹)の天下になるであらうと豫想して、或方々はこつそり御機嫌伺ひに参つてゐた。攝政殿の次男は、現在の左大將頼忠といふ方である。殿の容態は益々悪く、大相苦しげな様子なので、年齢も年齢とて人々は憂慮してゐた。この攝政殿は、兄弟達が薨去された後もかく久しく世を保たせられた事は、誠にえらい事である。世を擧げて心配したが、人の命は思ひのまゝにならぬもので、終に五月十八日、薨去された。御諡は清慎公と贈られた。子息左大將に攝政を譲られる事もなく、現職のまゝで亡くなられた志は、珍らしく尊い事である。年は七十一であつた。同年七月十四日、師氏大納言も薨去された。年五十五。この人を最後として、貞信公の子息中、男子四人全部亡くなつてしまはれた。

五月二十日、一條の大臣(伊尹)が攝政の宣旨を受けられた。皇太子の御祖父、主上の御叔父で、

誠にこの上もなき寵遇といふべきであらう。それにつけてもやはり九條殿の系統の運のめでたさは限りもない事である。左大臣には源氏の兼明が任ぜられた。この人は醍醐天皇の皇子で臣籍に降下された人である。非常な能書家であられた。道風等を世にめでたい書家といふが、この方も大相優美な趣深い字を書かれた。右大臣には小野宮の大臣の子息頼忠がなされた。

やがて天祿二年となつた。主上は御年十三にならせられたので、御元服の儀が行はれた。女御には九條殿の次男、今の攝政殿の次弟に當られる、宮内卿兼通の姫君が上つてゐられた。攝政殿の姫君達はまだ大相幼くてゐられるので、さぞかし残念に思はれた事であらう。宮内卿は堀河に誠に立派な邸宅を造つて住んでゐられた。女御は大相お美しいので、主上はまだごくお若くいらせられたが、深く御寵愛の御様子であつた。

九條殿の三男兼家中納言には大切に養育なさられた姫君が二人あつた。しかし皇太子は未だ稚兒でいらせられるし、主上には堀河の女御がいらせられるので遠慮されて、上の姫を冷泉院に參らせられた。世人は、「事をし損じた。」といふ様な事を言つてゐた。

攝政殿の女御と申上げるのは、皇太子の御母女御である。その御腹に女宮が二人がお出来になつた。女一宮は間もなくおなくなりになり、今は二宮だけがおいでになつた。この姫宮は冷泉天

皇が御位を下り給うてからお産れになつた方であるが、輝くばかりにお美しい方であつた。皇太子は内裏においでになるので、女御は時々こそ參内遊ばされて御覽になつたが、常はこの姫宮に何事も慰められておいでになつた。

花
山

一條攝政殿(伊尹)はこの頃常になく気分が勝れず、水ばかり飲んでゐられた。しかし未だ年齢も若く、政治を執られてから僅か三年なので、人々は大丈夫だらうと樂觀してゐたが、その中に月を越す様になつてしまひ、今は參内されることも絶えて、世の中の歎きとなつた。

九月頃の事であつた。子息の義孝少將の許に、或人が、「殿の御容態は如何。」と見舞を寄越したので、少將の返事にはかうあつた。

夕まぐれこしげき庭を眺めつゝ、木の葉とともにおつるなみだか

かやうに一家を擧げて歎き悲しんでゐられる中に、天祿三年十一月一日、終に薨去せられた。女御(懷子)を始め奉り、御女達、前少將(舉賢)、後少將(義孝)方の哀れにも、思ひ亂れてゐられることも、一通りでなかつた。攝政殿は今年四十九であつた。太政大臣で薨去せられたので、謙徳

公と諡を贈られた。攝政の後任には、次弟、九條殿(師輔)の二男、内大臣兼通卿がなられた。

その中に年號が變つて、天延元年になつた。宮中の御有様は萬事めでたくおはしました。女御(媼子)の立皇后の御支度を急いでいらせられた。前の攝政殿(伊尹)が御外孫に當らせられる皇太子の御即位を見ずして歿ななられた事を、世人も哀れな事と申してゐた。かくてその年七月一日に、攝政殿(兼通)の姫君の女御(媼子)が皇后にお立ちになり、中宮と申上げる事になつた。前の冷泉天皇の中宮(昌子)は、皇太后宮と申上げる事になつた。中宮の御有様は、この上もなくめでたくて、世の中の事はかくありたいと思はれるばかりであつた。天皇(圓融)は、一品宮(資子)の御方、中宮の御方等にお通ひになつていらせられた。宮中の御有様は、總て當世風に、華やかな事であつた。攝政殿(兼通)は堀河殿と申してゐたが、今は關白殿と申すやうである。この關白には御子息達が四五人あつて、世に時めいて、華やかな御有様であつた。

九條殿(師輔)の三男(兼家)は、この頃東三條の右大將大納言などと申してゐたが、姫君(超子)が冷泉天皇の女御として大相時めいておいでになるのを、喜ばしく思つてゐられた。中姫君(詮子)をもどうか入内させたいと考へてゐられたが、主上にも同じ思召があつて、勅命もあつたので、どうかさうしたいと思つてゐられた。しかし兄關白殿(兼通)との仲がよくない上に、中宮(媼子)

さへおいでになるので遠慮して、實行することを憚つてをられたやうである。

その中に天延二年となり、關白殿(兼通)は太政大臣になられ、世に並ぶ人もない有様であるにつけても、世人は九條殿(師輔)の血統の幸運を評判し合つた。小野宮殿(實頼)の二男頼忠大臣はこの關白殿との仲が大相良かつたので、政事萬般この二人で計らはれた。

此の年世の中にもがさ(疱瘡)が流行し、上下共に猖獗を極め、朝野ひどくこれを憂へてゐた。

尊い身分の男女で、死なれた方も多かつたが、その中でも、前攝政殿(伊尹)の子の前少將(舉賢)後少將(義孝)の兄弟が、同日に續いてなくなられたので母北の方の一方ならぬ悲しみ歎きの有様は、世の中の哀れの例として噂した程であつた。拙い筆では到底くはしく叙述する事は出来な

い。
東三條殿(兼家)と、關白殿(兼通)の仲の格別に悪い事を、世人も奇異な事に思つてゐた。關白殿はどうかしてこの大將(兼家)を亡きものにしてしまひたいと、常に心にかけてゐられたが、そんな事が中々行はれよう筈はない。一方東三條殿は、どうかして中姫君(詮子)を入内させたいと考へて、兄兼通の勢力も畢竟怖ろしい事はないと思ひになつて、人知れずこの計畫をお進めになつてゐられた。

堀河殿(兼通邸)と東三條殿(兼家邸)とは、唯閑院の邸を中にしてゐるばかりで、間近であつたから、東三條邸に行く馬車を見て、堀川邸の者共が、誰が東三條邸に行つた、某が行つた等と喋るのを聞いて、大殿(兼通)は「誰彼は東三條へ追従してゐる者だ」と、僻まれるので、人々は怖れて、夜陰などを選んでこつそり忍んで行く人もあつた。その中に、東三條殿が今日明日にも姫君を入内させられようと思ひ立つてゐられるといふ事が、自然大殿の耳にも入つたので、「意外千萬のことだ。中宮がかうしていらせられるのに、大納言(兼家)がさういふ事を思ひ立つとはあさましい、呆れ果てた事だ。さては何につけても、自分を呪つてゐることであらう。」等といふ事を、始終言はれた。大納言殿も、わづらはしくて堪へきれなくなつて、いつか又自然に好い時も来ようかと、思ひとまられたのであつた。

かくてはかなく年も變つて、貞元元年丙子の年になつた。

かの冷泉院の女御(超子)と申上げる方は、東三條大將(兼家)の姫君である。去年の夏から御懐妊の御様子であつたが、二三月の頃が丁度御分娩期に當らせられるので、御祈など盛んに行はせられた。大殿はこれを聞いて、「東三條の大將は、院の女御に皇子をお産み遊ばせ、さうすると天下は我手に歸するといつてゐる」などと、聞き苦しい事をさへいはれたので、面倒くさいと思

ひ遠慮しながらも、打棄て置くべきことでもないから、しきりとお祈りを執行はさせられた。さて三月頃に、大變立派な皇子が御誕生になった。上皇は、御心の落着遊ばされた時には、大相お喜びになつて、何くれとお世話遊ばされた。太政大臣(兼通)はこれを聞かれて、「東三條の大將(兼家)はお孫に上皇の第二皇子を得たので、その得意、思へばめでたいことだ」などと、如何にも馬鹿にした様にいはれるのが、自然に大將にも聞えたので、大將は、「妙に意地の悪い人だ」と、不満に思はれた。

その中に内裏炎上の不幸が起つたから、主上の御座所を堀河の邸(兼通邸)に移し奉らうといふので、堀河殿を美々しく、内裏の様に造營して、新内裏御造營まで御いでを願はうと工事を急いだ。貞元二年三月二十六日、堀河院(元堀河邸)に行幸遊ばされるといふので、天下その支度に大童であつた。いよ／＼その日になつて、天皇行幸あり、中宮も續いて、その夜に行啓になつた。この院は今内裏と申上げて、世間でも華やかに言ひはやした。それにつけても大殿は、人生ははかなくいつを終りとはかり難いものである。この右大臣(頼忠)も官位をもう少し昇らせ、自分の代りの職も譲つてやりたいと思ひ立たれた。當時、左大臣は兼明といつて醍醐天皇の第十六皇子に當らせられる方であつた。この方が御病氣といふことであつたので、この方を元の親王になし

奉り、その後任に小野宮右大臣を推し、右大臣には雅信大納言を任命した。

その中に堀河殿(兼通)の病氣が重くなつたので、殿は心の中に、「自分の命ももう計り難くなつてしまつたが、どうか存命中に、東三條の大將を世に出られぬ様にし、左大臣頼忠を自分の代りに攝政關白にしよう。」と考へ、天皇に常に、「この右大將兼家は、冷泉院の皇子(後の三條天皇)を奉じて、ともすれば皇位に即かせ奉らうと思つて、祈禱をさせたりして居ります」と讒奏された。主上は今内裏堀河の院にいらせられたのに、氣分が悪いといつて私邸の閑院の邸に移つてゐるが、ぢつとしてゐられなくなつては參内し、この大將(兼家)の不能について奏上し、「かやうな人間が朝廷に出てをりますと、朝廷の御爲にならず、大事を引起すことになりませう。早速禁誡あらせらるべく存じます。」と奏上した。その爲に貞元二年十月十一日、大納言大將の官を奪つて、治部卿に左遷された。兼通は悉く官を奪はれることを望んだのであるが、兼家には取立ていふべき罪はないので、主上もいたく困じ給うて、かやうに御取計らひ遊ばされたのである。殿の心のままになつたら、遠い筑紫、九州迄の流罪を望まれたが、實際の罪過がなかつた爲にかくなつたのである。大將の後任には、小一條の大臣(師尹)の子の濟時中納言がなされた。

東三條の治部卿(兼家)は門を閉ぢて、あさましい世の中を怨んでゐられた。子息達も、世間に

出て交際もせられず、思ひ諦めてゐられた。その中に堀河殿(兼通)は病氣が大相重くなつて、もはや絶望だと世間で噂した。先頃は参内して東三條の大將(兼家)を失脚させられた。其の後今一度奏上しようと参内され、いろ／＼と奏上して退出された。どういふことを奏上されたものかと世間では知りたがつたけれど、何の御沙汰もない中に、十一月四日に、准三宮の位になられ、同月八日に薨去された。年五十三であつた。諡は忠義公と申す。

かやうに御在職の間もほんの僅かの間であつたのに、東三條の大納言(兼家)にあれ迄にひどい目を見せられたのは、誠に不快な事であつた。同月十一日、生前に奏上しておかれた通り、小野宮大臣頼忠に、關白の宣旨が下され、それに隨つて天下一變した。世人は呆れ果てた、意外な事と思つた。中宮はさまざまに御歎きの御様子であつた。父を失つて朝光權大納言、顯光中納言等も、悲しみ且つ惑つてをられた。一方東三條殿(兼家)の姫君で冷泉上皇の女御に上つてゐられる方は去年皇子をお産みになつて、今年又引續いてこの方に皇子が御誕生遊ばされた。それについても、この一族の行末は頼もしく思はれるのであつた。堀河殿の葬送の事等例の通りに行はれた。

かくてその年も改つた。關白頼忠公は誠にめでたく、華やかなことであつた。大姫君(遵子)を

是非入内させたいと、願つてゐられたが、その事なくて、いつしか冬となつた。年號が變つて、天元元年となつた。十月二日に除目ぢよもくがあつて、關白殿が太政大臣に任ぜられ、左大臣には、雅信の大臣が任ぜられた。東三條殿(兼家)が罪もないのに、左遷されて蟄居してゐられるのは、不都合なことであるから、太政大臣は屢々奏上して、遂に今度右大臣に任ぜられた。佛神のお蔭と思はれる事であらう。

宮中には中宮(兼通の姫君)がおいでになるので、誰もく遠慮をしてをられたが、故堀河殿(兼通)のなされ方があまりに淺ましかつたので、東三條の大臣(兼家)は中宮をも怖れず、中姫君(詮子)を入内させられた。大殿(頼忠)は先づ自分の姫君(遵子)を入内させようと思つてをられたが故堀河殿の心を考へて遠慮してをられる中に、右大臣は誰にも遠慮される事なく、その姫君を入内させられたのであつた。さてかやうにして入内されたかひあつて、今のところ大變御寵遇を受けてゐられる。かく中宮を憚らずに、ないがしろに扱はれるのも、兄君の昔の無情な取扱ひを思出されて、あらうと、もつともな事とも思はれるのであつた。

東三條の女御(詮子)は、梅壺に住まはせられた。御愛敬があり、親しみ易い、美しい御方であつた。御兄弟達(道隆、道兼、道長等)は、この頃誰憚らず諸方に行かれた。一方院の女御(超子)は

皇子が御三人もお出来になり、大相お頼もしげな御様子に拜せられた。

かくする中に、天元二年になつた。梅壺(詮子)は天寵甚だ深く、華やいでいらせられた。中宮(嬪子)は、月頃御健康すぐれさせられず、中宮職でも、朝廷でも御祈禱様々行はれたけれども、六月二日終に崩御遊ばされた。御年三十三。誠に張合のない、悲しい事になつたと悼み奉つたのである。世間の口はさがないものであるから、東三條殿(兼家)は益々幸運に恵まれ給ひ、梅壺の女御(詮子)は皇后にお立ちになるぞ。などと、お噂申上げたのである。

かくして、七月の相撲の節の儀も行はれぬことになり、世の中はもの淋しい有様であつた。關白殿(頼忠)は中宮御葬儀の事共を指圖された。關白としては今上天皇御後見の重任にゐられるし、故堀河殿(兼通)とは懇意の間柄で、その意中もよく知つてゐられたので、御葬儀の事なども指圖されたものであらう。中宮の御兄弟、權大納言(朝光)、中納言(顯光)等の歎きは一通りでなかつた。

かうしてその年も冬となり、關白殿の姫君(遵子)が入内遊ばされた。御父は關白でいらせられるから、大相華やかな御様子であつたが、御局は奥深いところに設けられ、趣深いものであつた。梅壺(詮子)の大かた御氣持、御容姿等お親しみ易くて、美くいらせられるのに較べて、今度の女

御は少し御寵愛も如何かと思はれるが、但し御父が今を時めく關白であるから、おろそかには思召さぬであらう。

その頃梅壺(詮子)には御氣分が常ならぬ様に拜されたので、父大臣(兼家)もどうした事かと御心配なされたが、それは御懷妊なのであつた。世間もうるさいので、一二ヶ月は隠して置かれたが、さりとしてそのまゝに隠さるべき事でもないので、三月になつてから奏上された。主上も大いにお喜びの御模様を拜された。一品宮(資子)も、梅壺(詮子)に好意を持つてゐられたので、女御になられたかひのある、嬉しい事とお喜びであつた。里邸に御退りになる事を、主上は大相御不安に且つ御名残惜しく思召されたが、そのまゝ宮中にお留りになるべき事でもないで、いよいよ御退りになつた時は、主上の御名残をお惜しみ遊ばした事は申上げるもおろかな事である。然るべき公卿・殿上人達は、皆御供に奉仕された。これでは天下は東三條殿(兼家)の手に歸するかと思はれたのであつた。

主上も御在位既に長年に渡らせられたので、今は御讓位遊ばしたい御志であらせられたが、皇子のいらせられぬ事を大いにお歎きになつていらせられたので、この度の御懷妊を、皇子皇女のいづれかはわからぬが、大相お喜び遊ばして、然るべき御祈禱を數知らず行はせられた。日限を

定めぬ御修法、御讀經等、宮中でまでも始めさせられたので、これでは御安産疑なしと思はれたのであつた。

關白殿(頼忠)は、この有様を、鬱々として、不快に思はれるであらう。しかし、とにかく自分が關白職にをれば、きつと女御(遵子)を皇后に立ててあげたいと思召すであらう。

かくて天元三年庚辰の年になつた。三四月頃に、梅壺(詮子)のお産があるので、その御用意の上もなく立派になされた。内藏寮に於て、御帳を始めとして、白い御調度、御服等を調進し、父の兼家殿の方でも用意された。總て此等の事は、めでたい事の先例ともなるであらう。宮中からは晝夜引つきりなしに、お使が參つた。それも誠に道理と思はれた。早くあればよいと思召してゐる中に、五月の晦日からお産氣づき、月を越えて、六月一日の寅の時に、誠に御立派な皇子を御安産遊ばされた。まづ宮中に奏上されると、早速御劔を賜はつた。これらの有様は、誠に申上げやうもないおめでたさであつた。御七夜までのお賑かさおめでたさは想像して見るがよい。

東三條邸の御内のあたりには、年來たやすくは人も行けなかつたのに、冷泉上皇の三皇子の御孫様がいらせられる上に、又今上天皇の第一皇子のお孫様が御誕生になつたのであるから、人々

がこの邸に集つて来て、大騒ぎしたのも道理千萬である。子息達も、年來父の蟄居に心も塞ぎがちであられたが、今はすっかり晴れくしくなられた。

その中に又内裏に炎上の災があつた。主上は閑院邸に移らせられた。閑院邸は故堀河殿の邸で、朝光大納言が住んでゐられたが、その爲に大納言は他に移ることになつた。

關白殿(頼忠)の女御(遵子)は一向御懷妊の御様子が見えなかつた。殿はそれを大相遺憾に思つてゐられる事であらう。

主上は早く皇子に御對面あらせられたく思召されて、「こつそりと參内させよ。」と仰せられたが、世の評判も恐ろしく思召されて、快く思召立たれなかつた。今年はどうした事か、大風が吹き、地震さへあり、恐しげな事ばかりあるので、主上は皇子の御里邸にいらせられる事を、一層不安に思召していらせられたが、さりとて狭い内裏に一緒に住まはせられる事も出来ないの、唯御見舞の御使が、夜晝をわかず往復してゐた。御五十日^かや百日を過させられて、皇子は大相御美しく御成長になつた。主上は東三條邸に行幸遊ばしたくは思召したが、太政大臣に御遠慮になつて思ひとまらせられたであらう。

33 主上は御容姿いと端麗なお方であらせられたが、剛強な方面は少くていらせられた様に、世人

はお噂申上げてゐた。東三條の大臣(兼家)は天下の事は既にしおほせたと思つてゐられた様であるが、なほ用心をしてゐられる様に見えた。それは主上の御心がお強くないことを知つてゐられた爲であらう。

その中に天元四年になつた。主上は御心の中に御願があらせられたのであらう、二月の賀茂の社、平野の社等に行幸あらせられた。皇子御安泰の御願であらうと、お道理なことに拜察された。主上は、今は皇子も御誕生になつた、早く御讓位遊ばされたいとばかり、お急ぎになつていらせられた。一方には又梅壺の女御(詮子)が里邸にばかりおいでになり、めつたに入内遊ばされぬのを、御心平かならず思召していらせられた。大臣(兼家)は、それ程に思召すなら、自分を攝關に遊ばせばよいなどと、不平に思つてゐたのである。

主上は、太政大臣(頼忠)の希望のまゝにしてやりたいと思召して、女御(遵子)を皇后に立てようと仰せられたが、大臣は何となく気がねをなさつて、既に第一皇子をお産み申上げられた梅壺(詮子)をさしおいて、皇后にお立ちになつたならば、世人はどう考へるであらう、敵は作らぬ方がよいなどと思つて、躊躇して居られた。主上は、「その様な心配はいるまい。梅壺(詮子)は今はどうあらうとも、一度は必ず后位に上る人である。有爲轉變の世の中だ。今のうちにこの女御の

立後の事を急いだがよい」と常に仰せられたので、大臣(兼家)も喜んで、人知れずその準備を急いでゐられた。その中に、年も過ぎてしまつたので、口惜しく思つて居られた。この事がいつしか世間に漏れて、右大臣(兼家)は参内する事も稀になつた。梅壺(詮子)の兄弟達は、固より出仕もされなかつた。女御(詮子)も御心の解けない御様子であつたもので、一品宮(資子)は、世間で立後の事をお噂申すのをお聞きになつて、それで不平に思つていらせられるのだらうと、心よからぬ世の中を嘆息しておいでになつた。

かくてその年もはかなく暮れて、翌年となつた。正月に庚申の日があつたので、東三條邸では若い女房達が、「年の始めの庚申の事でございます。庚申待をなさいます。」といふので、院の女御(超子)の御方でも、梅壺の女御(詮子)の御方でも、行はれる事になつた。この方々の御兄弟三人(道隆、道兼、道長)は、「面白い事だ。あちらこちらと兩方かけてゐる中に、夜も明けるだらう。」など仰せられて、歌や何かと風雅に興ずる人々や、碁雙六の勝負を競ふ女房達の様まで面白いことであつた。「この君達がおいでにならなかつたら、今夜の眠氣を覺すものはなかつたでせう。」といつてゐる中に、鶏が度々鳴いた。曉方に、院の女御(超子)は御脇息に倚りかゝつたまゝお寢みになつてしまつた。「もう夜も明けたのに、今更」等と、人々は話し合つたが、「もう夜も明け、鶏も

鳴いた事であるから、そのまゝにお起しするな。」ともいつてゐた。やがて男達が、「つまらぬ歌をお聞かせしよう」と、「もし〜。もう夜が明けましたのに、どうしておやすみになつていらせられます。もうお起き遊ばしませ。」と申上げたが、何の御返事もなく、お起きになる御様子も見えなかつた。お側に寄つて「もし〜。」とお呼びした。どうも御様子が變なもので、揺り起して上げると、冷たくなつていらせられるので、あはて、燈火を取りよせて見ると、もはやお隠れになつてゐた。途方にくれて、とりあへず右大臣殿(兼家)にこの事を知らせられると、殿(兼家)は氣も顛倒して驅けつけて參られ、この御様子を見られると、かうした意外の御有様であるので、女御の御體を抱きかゝへて、伏轉んで泣かれるのであつた。御殿中上を下への大騒動であつた。高僧達を召し集め、様々と御誦經を行はせ、又所々の寺へ御使を走らせられたが、何の甲斐もなく、終に御蘇生遊ばさないで、御遺骸は抱いて臥せ參らせ、白綾の御衣四枚、それに紅梅の御衣だけをお着せ申し、長い美しい御髪を、御身にかきそへて置いた。その御様は御寢みになつてゐる様であつた。殿(兼家)の歎きのほどは思ひやられる。皇子女方のまだ稚くていらせられる事等、種々思ひ續け、心配されるのであつた。

冷泉上皇もこの事を聞召して、御意外な事とお悲しみ遊ばした。そしてこれもやはり、例の

物怪の災であらうと思召された。御後のいろ／＼な御弔ひのこと共につけても、殿(兼家)は測り難き人生について思ひ惑はれた。御遺骸はまだお眠り遊ばすやうに見えさせられるのも、悲しい事に思召されるが、しかしいつまでもそのまゝにお置きする事も出来ないで、御葬送の事等例の如くに執行はせられた。殿(兼家)は唯涙に溺れてばかり日を送つてゐられた。誠に無常なる世の中である。御忌の間も哀れに、悲しく過ぎていつたが、今は梅壺の女御(詮子)にもしや物怪が乗移られてはと御心配になつて、女御と皇子を他所へお移しになつた。はかない世の中とはいひながら、この様な悲しいことは未だ見聞きした事もあるまい。後にお残しになつた若宮様方がまだ何事もお分りにならぬのを、一入悲しく思はれた。

三月十一日、皇后册立の事が行はれるといふので、太政大臣(頼忠)はその準備を急ぎ忙しくしてゐられた。それにつけても右大臣(兼家)は萬事不快に思うてゐられる中に、愈々立後の御儀が行はれた。そのめでたさはいふもおろかな事である。太政大臣のし方は尤もな事であるが、世人は主上の御指圖を、意外な際立つた御振舞の様にお噂してゐた。さうして、第一皇子がおいでになる女御をさしおいて、皇子のおいでにならぬ女御の皇后にお立ちになつた事を不當に思ひ、この皇后を素腹すはらの后とお呼び申してゐた。とまれ、かうして皇后の御位におつきになつた事は、何

いつてもめでたい事である。

東三條の大臣(兼家)は、命があらばと梅壺(詮子)立后のことを考へてゐる中に、今度の事があつたのでやはり不満に思つてをられた。院の女御(超子)薨去の悲歎に加へ、又この事に就いて、世人が何と思ふであらうと、世間をさへ憚られた。嘗て堀河殿(兼通)からひどい目に逢はされた時でさへまだ良かったと思はれて、「かの堀河の大臣の仕業は何でもなかつた。今度の御叡慮こそ誠に心憂き事である。これ程世人の物笑の種となつては、出家でもしたい。」と思はれた。しかし一方では、「このまゝ不運に終る様な事もあるまい。時めく人の將來を見とゞけてやらう。」と、強く決心されて、院の女御(超子)薨去の後には、一層門を閉ざし、子息達も然るべき儀式等にも出られず、主上からは女御(詮子)の許に毎日御使を参らせられたが、御返事は二三度の中一度位しか遊ばさなかつた。一品宮(資子)もこれを大變心憂きことに思召された。皇子は大相お可愛くて、今年は三つにおなりになつたので、秋頃、御袴着の御祝を行はせられる事になつて、宮中では作物所つくもところに調度を調製せしめられた。右大臣家(兼家)の方でも、何かと御支度に忙しい様であつた。院の女御(超子)お葬式の事が終つて淋しく、退屈なので、唯この女御の皇子方の御世話をしてゐられた。

この殿(兼家)には北の方がゐられないので、院の女御(超子)の許に仕へてゐた、大輔といふ女を始終側に召使ひなれて、寵愛し、假の北の方としてゐられた。女御の皇子方の乳母めのととして、大貳の乳母、少輔の乳母、民部の乳母、衛門の乳母、その外多數あつたのに、此等には目もかけられず、唯此の大輔をのみ寵愛された。

主上は梅壺の女御(詮子)に對して、さすがに氣兼ね遊ばされて、特に皇子御袴着の事に御心を入れて、お急ぎになつた。元來この女御(詮子)をおろそかに思召されたのではなく、太政大臣を憚られて、その御女を中宮に立てられたのである。

さて、この冬の御袴着の御儀は、東三條邸(兼家邸)で行はせられる様に、右大臣(兼家)は思つてをられたが、主上が「どうして私邸でしょう。宮中で行はう。」と仰せられたので、十二月頃になつて、皇子も、女御(詮子)も三日ばかり宮中においてになる事となつた。

さてその日になつて、皇子は急ぎ立たせて、宮中においてになつた。その時の儀式の華やかさは思ひやられる。主上はこの皇子を御覽になると、非常にお美しいので、「かういふ美しい、朕が後嗣ぐべき、立派な皇子を産んだ女御をおろそかにしては冥罰を得るであらう。」と仰せられ、皇子を抱きなど遊ばし、女御にも色々と仰せられたが、女御には一向御うちとけにならぬのを、大

變殘念に思召された。皇子の御袴をお着けになつた様は、譬へ様もなく可愛かつた。年老つた女房達は、「主上おかみのお小さい時にそつくりでいらせられる。」などとお噂申上げた。

一品の宮(資子)の御方に、主上が皇子をお抱きになつておいでになると、宮も大變お喜びになつて、「梅壺の女御(詮子)をおろそかに遊ばしては、この皇子の御爲によくございますまい。」などと仰せられた。主上も、「どうしておろそかにしませう。それも自然のなりゆきで。」と仰せられた。

主上より、皇子には様々の御贈物を遊ばされた。公卿、殿上人、女房達にまで細々と御心を用ゐさせられて、種々賜はり物があつた。四日目の曉に、女御(詮子)の皇子も御退出になつた。主上は切にお引留になつたが、女御は、「もう少し時節を待ちまして、心長閑かになりまして参りませう。」と申させられて、御退出になつた。主上は甚だ本意に思召された事であらう。常に皇子の御事を御心につけさせられ、戀ひしく思召していらせられた。

その中に年號も變つて、永觀元年となつた。かうしてはかなく月日の過ぎてゆくにつれても、主上は、右大臣が皇子の立太子を覺束なく思つてゐられるのを、大相御心苦しく思召していらせられたが、今はどうか御讓位遊ばしたいとばかりお考へになつた。御物怪が屢々起らせられるに

つけても、御兄冷泉上皇の年來物怪にお悩みになつてゐる事を、怖ろしく思召された。

かくて翌二年となつた。主上は今年こそと、人知れず御讓位の御決心を固めていらせられた。それにつけても、右大臣が中々参内されない事を不快に思召してゐられた。梅壺の女御(詮子)の御許では、皇子立太子の御祈を盛に行はれた。

時折の行事などはかなく過ぎ去つて、七月の相撲も近づいてきた。主上は皇子にこの御儀をお見せになりたい由を仰せ出されたが、右大臣(兼家)は氣が進まない様子であつた。大臣にも度々参内せよとの御召があつたが、風邪等と種々の故障を申上げ参内されなかつた。愈々相撲が近づくと、頻りにお召があつたので、とう／＼参内された。主上からは懇な仰せごとがあつて、「位に即いてから今年で十六年となつた。こんなにも長く位にあらうとは思ひもかけなかつたが、いつまでも、月日に限りはないから、今は讓位の決心をした。併し今月は相撲の事で騒がしいから、來月に實行しよう」と考へてゐる。そこで皇太子が御即位になつたら、次の皇太子にはお前の方の皇子を立てようと思ふが、この事の叶ふ様に、所々の祈りをもさせよ。女御(詮子)皇子に對しては決しておろそかには思つてゐるないが、朕わがが心知らずに、不快に思ふもののあるのが誠に殘念である。幾人も有つてさへ、我が子可愛いのに、ましてたつた一人の皇子をどうして

おろそかに思ふ事があらう。等と、色々御尤もな事を仰せられた。大臣(兼家)はすつかり恐懼して承つた。宮中を退下するや、すぐに女御(詮子)に私かにこの事を申し上げられ、燈火を召し寄せ曆を見られ、所々に御祈の使を立てられた。邸内の人々も、様子を察して、喜び合つた。子息達もえらい御機嫌であつた。さて、相撲の御儀の際にも、子息達も出仕された。大臣(兼家)も晴とした心持で世に出て交りをされるやうになつた。

八月になつた。廿七日御讓位といふので騒がしかつた。愈々その日になつて主上は御讓位、皇太子は御踐祚遊ばされ、皇太子には梅壺の皇子がおなりになつた。誠に世はかうこそありたいと思はれるのであつた。御讓位遊ばされた主上は、堀河院においでになつた。

今度の主上(花山)は御年も大分たけていらせられるので然るべき人々の姫君達を、早く入内させよとお待ちかねの御様子であつた。太政大臣(頼忠)はこの御代にも引續いて關白職にゐられた。この大臣の中姫君(謁子)が十月に入内された。他を排して先づ我が姫を入内せしめられた事はあまりとはいへ、關白の事であるからさういふ事も出来たと見える。御即位、大嘗會、御禊等の御儀式も事なく過ぎて、少し心長閑になつたと思ふ頃に、太政大臣(頼忠)は急いで入内のことを行はせられた。女御の御容貌、御性質等は、宮仕へする人でも長年御奉公しなければならぬ

事であるから、とかくの事も申し難い。しかし悪いことのあらう筈はない。大相御寵愛の御様子もないけれど、自分がゐる限りは、必ず皇后にと、大臣(頼忠)は思はれるであらう。

かくする中に、主上は式部卿の宮(爲平親王)の姫君(婉子)が大變お美しいといふことを聞召し、毎日御文を送らせられたので、これ程の美人を引籠めおくべきでもない、急いで入内させられた。この姫君は故村上天皇御寵愛の四の宮(爲平親王)と源師(源高明)の御女との間にお出来になつた方である。御親族も誠に貴くいらせられるし、姫君も非常にお美しく、その上十分御支度をして入内になつたので、今は君寵も甚だ厚かつた。誠におめでたい事である。

さて又、朝光の大將の姫君(姚子)の許へも入内させよとの勅命があつた。大將は躊躇してゐられたが、しかし皇太子は未だ御幼少なので、女御・御息所を望むなら、この機會が好からうと思召されて、入内させられた。この大將殿は故堀河殿(兼通)の三男で、多くの兄弟の中でも特に愛せられた人であり、今でも世に重んぜられてゐた。母君は九條殿(師輔)の女の登花殿の尙侍ないしのがみで、その父君は醍醐天皇の皇子重明式部卿である。世に評判の麗しい姫君であるから、おろそかな事もあるまいと思はれて、十二月に入内させられたのであつた。この大將殿(朝光)は故父殿の財産を受継いでゐられた上に、御姉の故中宮(嬪子)もこの人を愛せられて、御調度類も皆、この人へ

お譲りになつてゐるので、姫君の御支度も大相立派であつた。

この女御が入内になると、主上の御寵愛甚だ深く、前に入内の女御(姚子)はそれに押されて御機嫌が悪かつた。かうしてその年も暮れた。

翌年正月元日の御儀を始めとして、總て當世風に、晴々しく行はれた。太政大臣はこれを腑に落ちないことと思はれた様であつたが、これも時勢と諦めた心で見過してをられた。

この頃、閑院の大將殿(朝光)の女御(姚子)の御寵愛は一時とはひきかへて、衰へてしまつた。戯れの御手紙さへ參らなくなり、そのまゝに一二月も経過してしまつたので、一體どうした事であらうと、大將も色々心配されたが、そのかひもなかつた。かうした世の物笑ひとなる様なじめさで、とても他の女御と同じ様には見られないやうになつてしまはれたので、暫くの間は我慢してゐられたが、終に、人目恥づかしくなつて御退出になつてしまつた。その上に邸の御出入をも人に知られないやうになさるやうになつた。今の世にこれ程情ない、悲しい事はあるまい。大將殿(朝光)も宮中へ參内すれば胸が痛むといつて、ずつと引籠つてゐられた。誠に世の中に又とない事であらう。これに就いて、御繼母の北の方(敦忠女延光妻)が何かお邪魔でもなさつたのではなかないなど世人はお噂した。これは主上のおいでになる道の打橋に、誰か、何かしたので

あるまいか。女御もこれを渡つてお上りにならず、主上もおいでにならず、かうして不思議に御退出になつてしまつたのである。その後はそんな事等は夢にもなかつた事である。御兄弟のなにか君などもちつとも參内されなくなつてしまつた。世の例あしともなるべき事である。

かくて又、小一條の大將(濟時)の御女(娥子)、一條大納言(爲光)の御女(恠子)などに、日夜主上からお手紙が參つたが、小一條の大將は、閑院の大將(朝光)の女御(姚子)のあれほどの御仲でありますが、直ぐに御退出になつた事をお考へになつて、お召に應ぜられなかつたので、主上もとうとう御斷念になつてしまつた。村上天皇には、十人二十人の女御、御息所がいらせられたが、御寵愛のある方もない方も、一樣にお情をおかけになつたので、誠に御圓滿であつたが、今はその時とは大變違つてゐるので、大將(濟時)も御女の入内を諦められたのであらう。

一條大納言(爲光)は、御母のない姫君(恠子)を、御自分の懐でお育てになつたので、萬事にお控へ目であつたので、入内の勅命があつても御遠慮申しておいでになつた。然るに、主上の御叔父に當られる義懐中納言は、この大納言の聲であつたので、それを便りにして、主上はしきりに中納言をお責めになつたので、大納言もとうとう決心して、入内させられる事となつた。その頃は、式部卿宮の女御(婉子)の御寵愛が甚だ深かつた時分であり、太政大臣の女御(諛子)は入内の

時からずつと相變らずの有様であらせられた。

その中に、一條大納言(爲光)の姫君(恆子)が入内なされた。この姫君は、小野宮の大臣清愼公(實頼)の長子、敦敏少將の御女の腹であるから、御母は能書家の佐理兵部卿の御妹に當られる。御父大納言は九條殿(師輔)の第九子で、爲光と申した。女御達何れも勝り劣りのあらう筈はない、誰がその等差をつける事が出来よう。この女御は弘徽殿にお住みになつて、總ての點に於いてこの方は他の方々以上に、御寵愛が深かつたので、大納言も大變嬉しく思はれた、この御寵愛の續く様にといろ／＼祈をされた。又一方には、この前の閑院の女御の事もあるので、御心配でもあつた。かくて多くの月日を過してゆかれたが、他の女御達は、こんな事は、今も昔も嘗てなかつた事である、長續きは出来ないことであるなどと、聞き苦しい、忌まはしい事を私語ささやかれた。

その中に此の女御に御懷妊の徴候が見えた。主上は一寸した御菓物でも、御自分は召上らるゝに、「先づ弘徽殿に。」と仰せられるほどに、御寵愛になるので、三月になつて奏上して里邸に御退出にならうとしたが、色々お引留めになつたので、五月になつてから、お歸りになつた。御養生萬端お里邸で心安くなさらうと思召して居られたが、こんな延びてしまつたので、あはてて御祈禱様々に行はせられた。始めは御惡阻といふ事で、少しも食物を召上らなかつたが、一月程経て

もやはり少しも召上れず、ひどくお瘦せになつてしまつた。父大納言は大相狼狽なされて、あらん限りの御祈をも行はせられたが、橋一つ召上つてもお吐きになり、心細い御容態なので、胸も塞がるばかりにお歎きになりつゝ御介抱なさるのであつた。

宮中でも御修法しゆほを種々執行はせられた。内藏寮からは其の御道具を色々運ばせられた。夜夜中の區別なく、御見舞の御使が繁く通ふので、殿上人、藏人も困るばかりであつた。少しでも御使が暇になると、殿上から除籍せられた。この御咎めの嚴しさは、六位の藏人等の身分の低い者はともかく、公卿になるべき家柄の人達はその煩務に堪へかねる様子であつた。御菓物等も、女御は少しも召上らないのに、「先づ／＼。」とばかり賜はるので、大納言も、歎聲を洩らしてゐた。主上はしきりに不安に、又戀ひしく思召されて、宵の間だけでも參内する様にと仰せられるのを、大納言(爲光)はためらつてゐられたが、女御はさすがに主上の御心を御察し申上げられて、御心配の御様子であつたので、ほんの一日か二日だけといふことで參内させられることになつた。

弘徽殿では、女御が入内になるといふので、御局の修理等をなされたが、口悪い女房達はひどく腹立たしく思つて居られた。かうして女御が參内なされると、主上は大相な御喜びで、夜も晝も御側を離れずおいでになつた。女御は始めて入内なされた時とはお違ひになつていらせられた。

御妊娠なされてからは、宮中においでの時からすつかり瘦せられたが、況して、今度は同じお方とも思はれぬ位に變つていらせられた。もとは御戲言も仰せられたが、今はすつかり陰氣にならせられて、心細げに歎き言ばかり仰せられるので、主上もお喜びになつたり、お泣きになつたり遊ばされた。誠に哀れにも、悲しい事であつた。

さて三日経つたので、御迎への人々、御車が参つたが、主上は御退出をお許しにならず、今一夜く〜とお留めになつて、遂に七日八日にもなつてしまつた。大納言（爲光）が、「御養生なども、宮中では氣が置かれて、十分に御出来になりませんからと、眞實こめて奏上されたので、主上も終に泣く〜御暇を賜はつた。女御が御輦で御退出になるまで、お見送遊ばされた。大納言は主上の御心情の哀れにも、畏れ多くも亦わが家の光榮とも思はれて、様々な思ひに涙の自然に出て來るのを、不吉な事と我慢してゐられた。女御ばかりか、主上さへも不快の御様子に拜せられるので、女房達も心を惱ましてゐた。女御はこの日頃は安靜でいらせられたが、御退出後は御髪も上げさせられず、大相御氣分が勝れさせられず、今はもう御最期を待つばかりの御有様であつた。唯父大納言（爲光）も唯おろ〜して泣かれるばかりであつた。萬の御手當などのかひもなく、御妊娠八ヶ月でお隠れ遊ばされた。大納言の歎きは、書き記さずとも、思ひやられるであらう。

う。

主上もすつとお引籠り遊ばして、御聲も惜しませられず、お歎きになつた。御乳母達が御慰め申上げて、お耳にも入れさせ給はず、誠に哀れな御事であつた。一條殿（爲光邸）では、お歎きになつてばかりもゐられないので、御葬式の事等を御準備になる様も、誠にお氣の毒な事であつた。大納言（爲光）は、「御退出の際には、今度は皇后として、御輿で宮門を御出入なさる御様子を拜見したいと思つてゐたのに、かうした事になつてしまつた。」と、伏し轉んで泣かれた。主上は、御氣に入りの殿上人、公卿の總てを、この御葬送の供奉に付けさせられた。そして御自身女御臨終の場に臨御遊ばすことの出来ないことの御悲しさを、返す〜お歎き遊ばし、御葬送の夜は少しも御寢みにならないで、女御の事のみ思はしやらせ給うた。

大納言殿（爲光）は靈柩車の後に徒歩でつかれ、踏跟として倒れはされぬかと思はれる御様子であつた。かくして女御は、火葬の烟となつて、雲霧の如く消えさせられた。宮中でも、世間でも、歎き悲しみの中に、はかなく月日も過ぎていつた。御追福の佛經書寫の事につけても、御涙の乾く間もなかつた。

かうした中に寛和三年になつた。正月から世の中の靜かならぬ氣はひが見えて、一大異變の前

兆とおもはれることが屢々あつた。主上も御物忌がちにお過し遊ばされた。又この頃、世の人達が道心を起して、尼になつたといふ評判がよくあつた。この事を主上が聞召して、はかない世を歎かせられ、「あゝ、弘徽殿(氏子)は深い罪障の爲に未來で苦しんでゐるであらう。懐妊のまゝ死ぬものは、罪障が深いと聞いてゐる。どうかして、その罪障を消滅させてやりたい。」と思召し亂るる御様子であつた。かうしたお思ひで御心の落着かせ給はぬ御様を、太政大臣(頼忠)は御心配になり、御叔父の中納言(義懷)も人知れず憂慮してゐられる様であつた。常に花山の嚴久阿闍梨を召して、説經を聞召された。主上の御道心は非常に強くて、常に「妻子珍寶及王位」といふ事を口誦さんでいらせられたが、惟成の辨を大相御寵愛になつて、召仕はせられるので、太政大臣も中納言も、「この御道心は心もとない。出家入道も數多例のある事であるが、主上のはいかゞであらうか。御道心の折々お起りになるのは、別の事ではない、

のであ

らう。」などと、心配してゐられた。その中に主上は物もよくお分りにならぬ様におなりになつたので、中納言殿(義懷)も御宿直がちでゐられたが、寛和二年六月二十二日の夜、主上は突然何處かへお姿をお隠しになつてしまはれたといふ、大事件が起つた。宮中の數多の殿上人、公卿を始め、卑しい衛士仕丁に至る迄、全部炬火をともし、残る處なくお探し申上げたが、何處にもお見

えにならなかつた。大政大臣を始めとして、諸卿、殿上人残らず參内し集つて、内庭まで探させられたが、それでも分らなかつた。終に天下を擧げての大騒動となり、夜の中に關所々々を固め申納言は守宮神、賢所の御前に伏し轉んで、「陛下には、何處に突然幸せさせ給うたのでございませうか。」と、泣きながら祈られた。山々、寺々を手を分けて御探し申上げたが、一向わからなかつた。女御達も涙を流して心配してゐられた。

さうしてゐる中に夏の夜も明けたので、中納言(義懷)や、惟成の辨等は、花山へと尋ねてゆかれた。其處に着いてみられると、主上は御目もつぶらな小法師の御姿になつて、うづくまつていらせられた。中納言(義懷)は伏し轉んで歎かれ、直ぐに自分も刺髪してしまはれた。惟成の辨も續いて出家された。これ程に淺ましい、悲しい事は、他にはない様に思はれた。あの御口癖に仰せられた、「妻子珍寶及王位」も、かうした思召があつて仰せられたのであつたかと思はれた。それにしても、御出家遊ばされたのは誠に結構な事であるが、どうして花山迄の道をお存じになつて、御徒歩でいらせられたかと推量申上げれば、これは並々ならぬ大事件であると思はれた。

かくて廿三日に、皇太子が御位に即かせられた。次の皇太子には冷泉天皇の第二皇子がお立ちになつた。この度の主上は御年七つにおなりになり、皇太子は十一でいらせられた。皇太子も、

この東三條の大臣(兼家)の御孫に當らせられて、誠にこの上もなくめでたい事である。さても花山上皇は、此の無常迅速の現世をお出になり、涅槃に至る四衢道の露地を歩ませられるのであらう。その御足の裏には、千幅輪の文があり、御足の跡には、色々の蓮花が開き、終には極樂淨土に於て、最高の位にもお昇りになる事であらう。されどそれは凡夫の知る事ではない。この世に於ては、恰も宮中の燈火の消えた如くに、上皇をお頼み申上げてゐた男女の人達は、眞暗になつた世の中に惑ふ、哀れな事であつた。中納言はそのまま、上皇にお付き申上げずに、やがて飯室といふ處に籠られた。惟成入道は高僧よりも優つた精進ぶりであつた。花山上皇の御受戒は、その冬行はせられる模様である。

さまぎまのよろこび

かくして主上、皇太子がお立ちになつたので、東三條の大臣(兼家)は、六月二十三日に、攝政の宣旨を蒙り、准三后になられ、内舍人・隨身二人、左右近衛の隨身を賜はつた。右大臣には御兄弟の一條大納言(爲光)がなられた。七月五日には、梅壺の女御(詮子)が皇后に立たせられ、皇太后宮と申上げる事になつた。(兼家の)子息達は、皇后御同腹の方が三人居られた。三人共に位は未だ低いが公卿にはなつてゐられた。長男(道隆)は三位の中將であつたが、中納言になられ、やがて皇太后宮大夫になられた。次男(道兼)は藏人頭であつたが参議になられ、三男(道長)は四位の少將であつたが三位中將になられた。閑院の左大將(朝光)は東宮大夫に昇進せられたが、かく引立てられるにつけても、嘗てその父堀河大臣(兼道)が東三條殿(兼家)につれなくせられた事を格別に思ひ出された事であらう。世の中にいふ譬への様に、徳を以て怨に報いられたのであらう

と何となく恥入られた。

東宮は今年御十一にならせられたので、この十月に御元服の御儀が行はれる筈であつた。それで大殿(兼家)は三の君(綏子)を尙侍(なかしつかみ)にして、奉仕させようとおぼされてその準備に夜晝大騒ぎをして居られた。

中納言殿(道隆)の北の方は、才學深く、人から氣をおかれた程であつた、成忠といふ人の女である。この成忠は國々も多く治めたが、子も男女共に多勢もつてをられた。その女達の中でも特にこの方を可愛がつて居られたが、良人を持たせても人の心は變り易く、危いからと、宮仕へをさせようと思はれた。それで先帝(圓融)の御代に、宮中奉仕に出されたが、女ながら漢字等を達者に書かれたので、内侍に任命されて、高内侍と申してゐた。中納言殿(道隆)は特にこの方を深く愛されたので、北の方になされた。この方に女子が三四人、子が三人あつたが、好色の癖があつて、子達も方々にあつたが、やはり正妻腹の子達を最も大切にされた。母君の才學が優れてゐた爲か、子女達皆年齢よりはずつと利發であつた。

中納言殿(道隆)は、容貌も心も極めて上品で、性質も勝れて優美な方であつた。この殿の庶腹の長男を大千代君(道頼)と申してゐたが、攝政殿(兼家)がこの方を養子になされて、今は中將に

つてゐられた。嫡流の長子は小千代君(伊周)と申してゐた。

攝政殿(兼家)の次男宰相殿(道兼)は、顔の色が悪く、毛深く、格別に醜くかつたが、性質は非常に老巧で男らしく、恐ろしい程煩はしい方で、兄君中納言(道隆)を常に教へるといふやうな態度であつた。北の方は、宮内卿(遠量)の女達の中の一人であつた。宮内卿は九條殿(師輔)の子である。宰相殿(道兼)は浮氣心の少い人で、北の方の腹に、子息達大勢をられたが、姫君が一人もなかつたことを、遺憾に思つてをられた。

五男(道長)は三位中將で、容貌性質も兄君達とは引違へて老練で、男らしく、宗教心もあり、自分に心をよせられる人には、特別に恩顧をかけられ、總て尋常一様の方でなく、世に類あるまゝと思はれるばかりであつた。後の宮(皇太后詮子)も取りわけ御寵愛あつて、御自分の御子と仰せられて、何事につけても特別にお目をかけさせられた。年の頃は二十位にもなされたが、浮氣なところはなかつた。それといふのも心が眞摯であつたのではなく、つまらぬ事から人に恨まれたり、又女からつれない人と思はれる様な事があるのを厭はれて、何でもない人に、ひそかに人目を忍んで、物などいはれるのであつた。かうした非凡な御性質も自然に世間に洩れ聞えて、我もくんと聳にしたいと申込む人があつたが、「今暫くは娶らぬ。思ふところがある。」といつて、

一向耳を傾けなかつたので、大殿(兼家)も、「何を考へてゐるのだらう。」といつて居られた。

大殿(兼家)は院の女御(超子)の皇子御三方をお手許で御養育申上げて居られたが、第二皇子は皇太子にお立ちになつたので、今は第三第四皇子だけを大切に御育て申上げてをられ、來年は四の宮の御元服を舉行して上げたいと思つてをられた。

かくする中に十月になれば、御禊・大嘗會等で世の中は騒がしかつた。主上は未だ御七歳であらせられるので、御輿には宮(皇太后)も御同乗になるといふので、宮の御方の女房達も大騒ぎであつた。女御代の事等は、世の一大事である。いよく御禊になつたので、東三條殿では北の築地をくづして、御棧敷を造り、皇子達も其處で御覽遊ばした。御儀の華やかさは譬へ様もなかつた。主上と御同輿で宮(皇太后)はおいでになり、宮の女房達の車が二十、又宮中の女房の車が十、女御代の車等がその後についた光景は、到底筆の及ぶところではない。

行幸の果てる頃に、攝政殿(兼家)の車が現れた。よく調和を得た服装をした隨身達が行列に立ち、前驅の人々も皆身分の高い、華美な人だけが選ばれてゐた。「あゝ、見事な事だ」と、歎稱するばかりである。棧敷の御簾の片端を押し上げて、種々の色の御衣を重ね召した上に織物の御直衣を召させられた、四宮(敦道親王)がお立出でになり、「やあ、大臣殿。」とお呼びかけになつた。

攝政殿(兼家)は、「いけません。」とおたしなめ申されたが、その可愛い御様子には微笑まれたので、見てゐた人達も何となく微笑んだのであつた。

さてその日も暮れたので、大嘗會の御準備が始められた。東宮の御元服は十月といふ事であつたが、かう準備がからあつたので、十二月頃に行はれる事となつた。十一月になると、大嘗會の支度を急いで、世間の中も大相心あわたしうなつて、とばりあげの御儀、其の他何やかやの儀式と騒がしく、五節の御儀も、今年は例年よりも一層華やかな事であらう。

かうして月日が経過していつた。十二月の一日頃には、東宮が御元服遊ばされ、直ぐに尙侍(綏子)が入内せられて、麗景殿にお住まひになつた。東宮はまだ幼くあらせられるが、尙侍の殿(綏子)は十五ばかりにおなりであつた。大殿(兼家)の御女の事であるから、間もなく輦車も許さるべき女御とおなりになるであらうと、御調度なども出來得る限り丁重になされたのも、御母たいの御方の幸運とめでたく思はれるのであつた。この頃、九條殿(師輔)の第十一子、みやをぎみ(公季)と申した方は、中納言となつて、東宮の權大夫に任ぜられた。

かくてこの年も暮れた。後の宮(詮子)は東三條邸にいらせられたので、正月二日こゝに行幸があつた。誠にめでたき限りであつた。宮の司、攝政家の家司等も昇進して喜び騒いでゐた。この

月晦日の司召つかさめしで、中納言殿(道隆)は大納言に、宰相殿(道兼)は中納言になられた。

今年、年號が變つて永延元年となつた。二月は、例の如く神事がしきりに行はれ、所々方々への御使が立つたりしてゐる中に、過ぎてしまつた。三月は石清水の行幸があるので、準備で忙しかつた。行幸についての指揮は、權中納言殿(道兼)がされた。その功によつて位が昇進されるであらうと思はれた。宮(詮子)は又主上と御同輿でいらせられた。その御有様は、窮屈と思はれる迄に立派に裝つてをられた。

土御門の源氏の左大臣殿(雅信)には、その正室の腹なる二人の姫君があつて、大切に養育してをられ、將來は后にも望みをかけてゐられた。その一人(倫子)を、三位中將殿(道長)が深く思はれるやうになつた。しかし大臣(雅信)は、「まあ呆れた事だ。誰が今、あんな贅の黄色い青二才を我が邸に出入させようぞ。」といつて夢にも承諾される様子はなかつたが、北の方(穆子)は賢明な才氣ある方なので、「何故反對なさいますの。時々の見物などの時お見かけしますと、平凡ならぬ方とお見受けします。どうか私にお任せ下さいませ。きつと悪い事はございません。」と申されたが、殿(雅信)は全く問題にもされない様子であつた。この大臣(雅信)には、多くの腹の子息達、姫君達がをられたが、北の方の腹のは、姫君二人、子息三人をられた。辨や少將で居られた

二人は出家されたが、後一人の方も、世の無常を觀じてともすれば出家の志があつたので、親御達は不安な事に思つて居られた。

かくて、この北の方は三位殿(道長)の事をしきりに急がれたが、殿(雅信)は一向氣が進まねなかつた。しかし、現に主上はまだ幼くいらせられ、東宮も亦お若くいらせられるので、どちらにも女御の心あてはなく、又相當な、然るべき有望な人のあてもなかつた。閑院の大將(朝光)は、北の方が年老けてあるかなきかの様であるが、かの枇杷の北の方の面倒があるので、母北の方は問題にされなかつた。それで急に三位殿(道長)を聳にとられる事になつた。その儀式が大相仰々しく行はれたので、攝政殿(兼家)は、「道長はまだ官位は低いのに、かくては世間の物笑ひになりはしないか。」と、反つて心配された。その後三位殿(道長)は始終この方の許へ通つて居られた。やがて左京大夫になられた。この官は若い方に向く華やかなものではないが、大殿(兼家)が自分も嘗て任ぜられたからといつて、任ぜられたのだといふ事である。二人の兄君達の北の方は別に變つたこともおはせぬが、この殿(道長)に限つては特別に華やかになされたのはどうしたことであらうと、世人も邸内の人も思ひ且つ噂したのである。

かの花山上皇は、去年の冬、比叡山で受戒させられ、その後熊野にも御參詣遊ばされたまま、

まだ還御遊ばさない。どうしてかういふ困難な旅の行幸を遊ばしならはせ給うたであらうと、誠に驚き呆れるばかり、畏れ多くも、哀れな前世の御縁と思はれた。御叔父の入道中納言(義懷)はこの御旅にはお供せず、飯室といふ處に住まれて、出家の本意はかくこそありたいと思はれるほど、清らかな生活ぶりであられた。この三月に坊の前の櫻の花の盛りを見て、獨り言に詠まれた歌が、久しく月日が経つて、自然世間に洩れて來た。それは、

見し人もわすれのみゆくやまざとに心長くも來る春かな

といふのであつた。惟成の辨も大相悟りすまして、今の世の活菩薩いほぼさつと思はれる位であつた。

大納言殿(道隆)の大姫君(定子)、小姫君(淑景舍)は大相大事にされて居られたが、いづれは主上、東宮の御許に參らせたいと思つて居られた。又大千代君(道頼)は、諸國の受領をしてきて、今山の井といふ處に住んでゐる人の多くの娘の中の一人の姫になられた。大殿(兼家)は冷泉上皇の第三四の皇子を大事にして上げられることは勿論であるが、又この大千代君を非常に愛せられた。父大納言殿(道隆)は反つてこの君をよそ／＼しくされて、小千代君(伊周)を早く出世させたといと考へてをられた。

かの土御門殿(雅信)では、又もや、少將でゐられた方(時方)が此頃出家されたので、殿は、「何

といふ呆れた事だ。家の男の子達は、この姫君(倫子)の御後見をもしないで、皆出家してしまふ。」と、歎かれ、探し出し、「歸れ／＼。」と責められたのも、尤もな事である。庶腹の君達(時中、扶義)は、反つてそれ／＼出世してゐられた。その中に、左京大夫(道長)の北の方(倫子)が懷妊の御様子になられ、月のものもなかつたので、大殿(兼家)も、三位殿(道長)も大相喜ばれ、安産の御祈禱も盛に行はせられた。北の方の母君や、祖母君も、心の及ぶ限りの事は總てしつくされた。誠に光榮な事であつた。

かくて永延二年にもなつた。正月三日主上は院(圓融)へ行幸遊ばされ、皇太后も御同列のこととて一層華やかな御儀であつた。主上の御様子の大變お美しくいらせられるのを、院も御満足に御覽遊ばされた。主上は御笛が大相好きでいらせられたので、院の御前でお吹かせになつて嬉々としてお喜びになつた。院の御手許には主上や皇太后の御賜物が數多あつた。當日の公卿、殿上人への引出物も、目もあやに美しい物であつた。御乳母の典侍達を始め、一般の命婦達、藏人、皇太后の宮の女房や、それからものの數にも入らぬ衛土、仕丁達に迄、物を賜はつた。又院の司、公卿、其他相當の人々には位階の増進があり、御禮を言上したのであつた。

圓融上皇の御幸福につけても、冷泉上皇の御様子を先づ世間でお噂申上げた。さうした痛々し

い御様子とはいへ、その御恩の蔭に生きてゐる人達は、院(冷泉)をば觀世音の衆生濟度の爲にこの世に出現されたのだと思つてゐた。その慈悲の御心の深さは、召した御衣や、御夜具は、直ぐに下々にお下しになるのを、我もくと奪合ふやうに戴くので、冬など院はお寒さうな御様子でいらせられるのである。この院の第三第四皇子などたまさかにおいて遊ばすと、大變珍しがり、お可愛がりになつたが、御物怪が怖ろしいので、度々はおいで遊ばさなかつた。この院はかうしたお氣の毒な御有様ではあるが、その御所有の莊園が所々に多くあり、その上に御寶物も澤山お持ちになつて居られたので、それ等は東宮や其他の皇子方にお譲り遊ばされた。

その頃、左京大夫殿(道長)の北の方が産氣づかれたので、その邸では御讀經・御修法の僧達は勿論、效驗ありと評判の僧侶達は皆召集められて、大騒ぎであつた。大殿(兼家)よりも、皇太后(詮子)よりも、絶え間なく御見舞のお使が行つた。しかし大した御苦しみもなく、めでたく女兒がお生れになつた。この一家には始めての姫君であつたが、かねて姫君ならば、將來必ず后にならせらるべき方と、大相希望してをられたので、大殿(兼家)からも御慶びの御使が度々参つた。誠に萬事に幸福な御夫婦である。御七夜までの御儀の有様は、書くも却てくだなれば省いておく。三日の夜は左大臣(雅信)家、五日の夜は攝政(兼家)家、七日の夜は皇太后宮(詮子)から、

御立派に御産養を行はせられた。

その後三位殿(道長)はこの北の方に一入心を傾けられ、水も洩らさぬ、濃やかな仲であつた。其頃皇太后宮が村上先皇の御兄弟十五の宮(盛明)の末の姫宮(明子)を御手許で御養育あらせられ、宮の御方とて尊んでおいでになつた。この宮は嘗て源師(高明)が養女になさつて、大切にお育てになつた方である。多くの殿原が我もくとこの姫宮を競争して居られた。大納言殿(道隆)が煩はしいまでにしつこく申込まれたが、皇太后宮は、とんでもない事とお拒み遊ばされた。それなのに、この左京大夫殿(道長)は宮の御方の女房達に懇意になられて、遂に姫宮とお睦まじい仲になつてしまはれた。これは前世の因縁であつたらう。皇太后宮も、この殿(道長)は浮氣な人ではないから、爲方なからうとお許しになり、深切にもてなし給うた。殿(道長)もこの御厚意に感ぜられて、元々深く愛してゐられたが、一入心にかけて通はれた。土御門殿の北の方(倫子)は今迄の様であればと御不満ではあつたが、御性質が大體大様な、無邪氣なお方なので、殊更には何とも思召さない様であつた。

正暦元年二月には、内大臣殿(道隆)の大姫君(定子)が入内なされるといふので、大變な騒ぎであつた。御母北の方(貴子)は早く宮仕へをなされた方なので、姫君を奥深く引籠らせられること

をお嫌ひになり、當世風に、華やかにおしつけになる御家風であつた。姫君は御年齢十六位であられた。入内の夜直ぐに女御におなりになつた。御南親は、今は又中姫君がまだ幼いので、年頃になられるのを待遠く思つて居られた。

かうした事につけても、大納言殿(道兼)は姫君のない事をひどく残念に思はれるであらう。この殿は、粟田といふ所に大相立派な御殿を造營せられ、御障子には名所々々の繪をかゝせ、然るべき人達に歌を書かせられ、世の中の繪物語は總て書き集めさせられた。又女房を數知らず集められて、女の子の産まれる豫想の下に爲されたが、誠に面白い事である。この殿の子息達の中の總領ふくたり君は、一昨年八月にはかなく亡くなられた。この君は大相意地の悪い方で、人々にも憎まれなされたので、かう早逝されたのであらうと、世人はお噂申してゐた。

内大臣殿(道隆)の正腹の三男(隆家)は、現在は四位少將であつた。この方も意地の悪い方であつたが、さすがにふくたり君程ではなかつた。四男(隆圓)は幼かつたが出家させて、小松の僧都といふ人に預けて置かれた。他の腹々の子息達は、大千代君(道頼)の他はまだ任官等もなかつた。大殿(兼家)は長年の間、鰥夫で居られたので、召使の典侍の寵愛は年々に深くなり、今は權の北の方として世人は名薄を上げたり、又司召の際等にはその局に集つて御機嫌を伺ふのであつた。

この方は元、院の女御(超子)の御許に仕へて、大輔といつた人である。大殿の威勢が世に出始めた頃の事であつたが、獨身では具合が悪いといふので、按察の御息所の御腹の女三宮の許へ通つて居られた。愛も深かつたが、どうした事か、後心變りをされて、遂に離縁してしまはれた。宮はこの事を大相恥づかしく思召されて、とう／＼お亡くなりになつた。それといふのも、この典侍の幸運が餘程強いのであらう。又圓融天皇の御代の、故のぶ方式部卿の孫で、中將の御息所といふ方があつたが、この典侍より他には人もない様な有様なので、遂に不縁になつて歸られた。冷泉上皇第三四の宮の御乳母達も器量別に劣りはしなかつたが、殿は戯言一つ仰せられる事もなかつた。

その中に、大殿(兼家)が病氣になられたので、若殿方も、宮(詮子)も大相心配されて、御祈等残す所なく行はれた。この二條院には元來物怪の祟があつたが、この外に大殿にも、又女三宮の物怪のあらはれたのは哀れな事であつた。若殿方は、「やはり御住居をお變へになつた方がいい。」と勧められたが、殿はこの院を大相お氣に入つてゐたので、中にお聞入れにならなかつた。しかし益々御病氣が重くなるので、遂に東三條院にお遷りになつた。后・女御の御方々も大相お歎きになつた。攝政辭任の奏上をなさつたが、もう暫く／＼とお留め遊ばされてゐる中に病氣が進んで

來た。折しも五月五日の節會の菖蒲の根をかける頃であつたが、そのねに泣く涙は人々の袂を濡らした。遂に太政大臣も、攝政も辭しておしまひになつた。關白の詔がお下りになりさうな御様子であつた。やはり御重態が続いたので、五月八日に出家なされた。その日に、攝政の宣旨が内大臣殿(道隆)に下つた。しかしかうした際なので、喜ばしいとも思はれず、愈々御最期かと思はれ、色々の御願をかけられ、二條院を寺にしてみました。若し平癒なされたら、其處を住ひになさる思召であらう。殿内舉つて歎き悲しまれたが、病氣は更に回復に向ふ様子が見えなかつた。

攝政殿(道隆)の御有様は誠にめでたい事であつた。北の方には明順、道順、信順等の御兄弟があつたが、攝政の宣旨にはやはり北の方の御妹の攝津守爲基の妻がなされた。北の方の御父も未だ御存命であつた。

大殿(兼家)の御病氣のかく重く、誰も／＼心配してゐた。この頃、攝政殿(道隆)は主上の御機嫌を伺つて、女御(定子)立後の準備を急いで居られた。攝政關白になられた上は總て思ひのまゝになるのを、傍の人々がそのかし申したのであつた。六月一日立後の事があつた。世人は、「父殿の御重態なのに、何故お延ばしにならぬのだらう。」と非難するのであつた。中宮大夫には右衛門督殿(道長)を任命せられたが、殿は、「立后等とは何事か。誠に面白くない事だ。」と言はれて、

中宮の御方へは參られなかつたのは、その強い御氣性の程が伺へるのである。

かくする中に、大殿(兼家)の御容態も悪化せられ、七月二日に薨去せられた。御年六十二。どなたも、「七八十迄も生き永らへる人もあるのに」と口惜しがられた。出家されたので御諡はなかつた。彈正宮(爲尊)、師宮(敦道)の大相お歎きになるのも御尤もな事であつた。大千代君はこの頃藏人頭であられたが、庇護して下さつた御祖父がお亡くなりになつたので、今後は小千代君に劣る様になるであらうなどと、色々考へ續けてお歎きになるのも誠に哀れな事であつた。

東三條院では、例の如く廓・渡殿を土間とし、其處に宮・殿原がお着席になつた。東宮は殊にお歎きになつて居られた。御葬送以下の御儀は出來得る限りの盛大さであつた。後々の御法事、御供養等も總てこの上なく立派に執り行はれた。

二條院はお寺となつて、法興院と名づけられたが、御忌の間に多くの佛像を造らしめられて、寢殿に安置された。八月の十日頃に、此の寺で四十九日の御法事が行はれた。この春の大饗の折、東の對屋の廂の紅梅があでやかに咲き盛つてゐたが、この頃は葉が繁つて何の見所もなかつた。主上、東宮を始め奉り、皆御誦經を遊ばされた。總領道綱殿(實は道隆が兄)は唯今三位中將で居られたが、宰相にさへならぬうちに父殿がお亡くなりになつた事を、さぞかし残念に思はれる

事であらう。

はかなく年月も暮れて、正暦二年となつた。今年は皇太后も、其他の兄弟方も喪に服してゐられたので行幸の事はなかつた。

攝政殿(道隆)の御政は、今は別にとかくの悪評もなく、御態度も大相優美に御見受けした。北の方(貴子)の御父君を二位になされたので、世人はこの人を高二位といつた。年老いた、才學に富んだ方であるが、御性質が並ならずひねくれて居られるので、人々に推重されてゐられた。北の方の御同腹のお兄弟達は、それぐ揃つて相當な國守に任ぜられた。それにつけても世人は、此の人達の出世を、別にさう身分も尊くもない方達であるのにと不満に思つてゐた。北の方は元道心ある方で、常に御經を讀まれた。そして山々、寺々の僧達を訪ねられることを、この上もない喜びとして居られた。

その中に又もや圓融上皇が御病氣に罹らせられたので、世を擧げての大騒ぎとなつた。今年院への行幸なく、主上も大相待遠しく思召されて居た時なので、今日か明日かと行幸を急がせられた。いよく吉日を選んで行幸遊ばされると、上皇の御容態は大相御苦しげであつた。主上の御元服遊ばされて、大人びさせられた御姿を、上皇は幾度もく頼もしげに御覽になつた、そして御領の

莊園、其の他の御寶物等を一々目録に書かせられて、主上に差上げられた。主上は未だお若いからせられるが、上皇の御容態を大相御心配の様に拜された。常の行幸とは違つた御有様をお氣の毒に思召されて、上皇はかへすく主上を眺めさせられて、「物怪が怖ろしければ、早く歸らせ給へ。」と仰せられた。

その後もはかばかしからぬ御容態に、主上もどうかと叡慮にかけさせられたが、終に正暦二年二月十二日、崩御あらせられた。長年の間お仕へしてゐた、僧侶、俗人、殿上人、判官代等、皆涙を流して歎き悲しんだ。殊に土御門の源氏の大員(雅信)の御兄弟の仁和寺皇子の御子に當られる、仁和寺の僧正は大相な歎きであつた。かの釋尊の入滅を見て、「大師入滅我隨入滅」と、佛弟子の橋梵波堤がいつた様に、後を追つて死なうと思つた人も多かつた。誠に哀れとも悲しともいひ様のない事であつた。主上も一日行幸遊ばされた日の事を思ひ起され、お慕ひ遊ばされた。

見はてぬ夢

東宮は年十五六でいらせられた。大相よく經を讀む或僧をば、毎夜御殿に侍せしめ給うて、世間話を聞かせられた序に、小一條殿(濟時)の姫君(娥子)の事をお話し申上げたところが、東宮はそれに大相御耳を傾けさせられた。そして夜毎にこの僧を召させられては、この小一條の姫君の事をお話の種に遊ばされ、「この事をきつと骨を折つてくれ。」と、熱心に仰せられたので、僧がこの仰せを大將(濟時)に傳へると、大將は、「姫を何時迄もかうしておくわけにはゆくまい。先皇の御時は逃れられたが、主上はまだ幼くいらせられる上に、中宮さへおいでになるから面倒である。東宮には麗景殿がおいでになるけれどもかまふまい。」と思召になつて、その準備を急がせられた。姫君は十九位におなりであつた。

御調度の類は、村上天皇の御代に、この大將の御妹の宣耀殿の女御(芳子)の爲に、大相立派な

御支度をなされたので、御櫛の箱、屏風等を始めとして、總て新たにこしらへさせられる必要はないのであつた。唯御装束の類の御準備を急がせられた。この姫君の母上は、枇杷の大納言延光の御女であつたし、御夫婦の仲も極めて麗しかつた。先皇の御時の事であつたが、先皇が女御に御筆を教へられるのを、この大將も見習はれて、大相上手に弾かれた。それでこの姫君にも筆をお教へになつたが、殿よりも却て巧みに、且つ當世風にさへ弾かれた。この頃ではかうしたことは流行らないが、この姫君は大相上手であつた。

かくて支度を調へさせられ、十二月一日に東宮に上がられた。そして村上天皇の昔を思ひ出されて、宣耀殿にお入れになつた。甲斐あつて、御寵愛も大相深くあらせられた。それで大將殿(濟時)は、「この姫君をおろそかに思ふ者とはあるまい。」と仰せられた。麗景殿(綏子)は大して御寵愛も深くはなかつたが、大體が朗かな、心のおけないお方でいらせられたので、殿上人等は氣のおけない話し所として、よく此の細殿に集まられた。しかし宣耀殿の女御(娥子)の方は奥深くて、氣がねのされるやうに人々は申してゐられた。この女御の御兄(通任)は、此の頃内藏頭でをられた。父大臣(濟時)とは違つて、大人しい方の様に、世間で噂してゐた。同じく御兄弟の長命君(相任)といはれた方は、侍従で居られたが、出家なされたので、父殿は、「今長男だけゐて、あれが

るないのは残念だ。かうした時にどんなに頼もしい事であらう。」と常に思ひ出された。大将の甥の實方の中将は、世間から風流人として尊敬された方である。それで女御もこの君を頼みに思つて居られた。今限りない勢でゐられるので、誠に甲斐あることと見える。

攝政殿(道院)の御長子(道綱)は、宰相でをられた。粟田殿(道兼)は内大臣に、中宮大夫(道長)は大納言に、大千代君(道頼)は大納言に、小千代君も三位中将から中納言になられた。いつもの事ながら、方々は縁故によつて、官位が昇られる様である。新中納言(道頼)の北の方は山の井にお住みであつたので、山の井の中納言と申した。小千代君の北の方、かの大納言殿(重光)の姫君が、大相可愛らしい若君をお産みになつたので、伯母なる大納言殿の北の方や、攝政殿等が非常にお可愛がりになつた。松君と申したが、攝政殿が御手許にお呼びになつては、乳母や若君に様様の物を持たせてお歸しになつた。女房達もこの君の御成長を待ちわびてゐた。

中宮大夫殿(道長)の方では、土御門の上(倫子)も、宮の御方(明子)も、共に去年から御懐妊の様子であつた。左大臣(雅信)はこの前の様に御安産を祈つて居られ、宮の方でも、宮(盛明)がおいでになつて、御安産の御祈について指圖してをられた。

この頃、皇太后宮の御惱重く、世の中の一大事であつた。従來の物怪は常の事、其他様々の物

怪の災はげしく、このまゝではとても濟むまいと思はれる御様子であらせられた。主上も行幸せさせ給ひ、種々歡慮を惱ましめておいでになつた。ともすれば、物怪が晝夜の別無く引入れ奉らうとするので、宮は、「今はもう出家しよう」と仰せられるのを、御兄弟方も暫くと御留め申してをられたが、御病氣は益々重らせられるので、「何はとまれ御命あつての上。」と思はれて、尼になり奉られた。誠に淺ましい事であつたが、これも御平癒を願ふ心より出たものであらう。

さて、世に在るかぎりの御手はお盡しになつた上に、又御出家までも遊ばした爲か、御惱も段々薄らいでいつた。御存命中は毎年必ず石山寺や、又長谷寺、住吉等に御參詣遊ばすといふ御立願の爲か、今は全く御平癒遊ばされた。主上も大相お喜びの御模様を拜せられるのも畏れ多い事であつた。皇太后御年もまだ三十位におなりになつたばかりで御出家は、誠に淺ましくも残念な事であつたが、致し方もないので御讓位の天皇になぞらへて、女院(にょいん)と申上げる事になつた。年官年爵を得させ給ふ事であらう。今迄の様に年毎の祭の御使を差立てさせられる事もなくなり、陣屋に警固の衛士のつめる事もなくなつて、御氣樂でいらせられるれば、却て誠にめでたい事であつた。女院の判官代の役にも、器量の優れた者のみを選ばせられた。

さて、その年の中に長谷寺にお詣りになつた。御供には、公卿・殿上人の年若く、美しい者は

狩衣姿で、年とつた殿ばらは直衣で隨いた。攝政殿は御車で御供をなさつた。女院は唐の御車にお乗りになり、女房の車の前には尼の車を立てさせられ、誠に壯麗な御行列であつた。長年伺候してゐた者、又さうでない者、合せて十人の尼が御供した。みゆきといふ童も尼になつて行列に加はつたので、羅漢の名の離婆多はたと名をつけられた。其他年來お仕へしなかつた童等も多く集つたので、これらには、ほめき、するき、はなこ、しきみなど様々の名をつけさせられた。お寺へお着きになつてからは、佛へのお勤めもめでたく濟ませられ、僧へも祿等賜はつて還啓遊ばされた。今年は又二三月頃に住吉へ御參詣の御豫定であつた。かやうに結構な御有様でお暮しになつた。

攝政殿の妾腹の公達(道頼)は山の井の中納言と申したが、攝政殿(道隆)は嫡腹の小千代君(伊周)がやはり中納言でゐられるのを不満に思召して、小千代君を大納言に任ぜられた。山の井の中納言はこれを大相不快に思はれた。一方閑院の大將(朝光)は重い病氣にかゝられて、大將を辭職されたので、栗田殿がその後任につかれた。小一條大將(濟時)が左大將で、この殿(道兼)は右大將に任ぜられた。

攝政殿(道隆)は、主上が御成人遊ばされたので、關白殿と申す事になつた。この殿の中姫君(原

子)がもう十四五歳ばかりになられたので、東宮にお上りになる事になつた。誠に華やかな事であつた。入れ違ひに宣耀殿(斌子)は御退りになつた。今度の方は淑景舎にお住まひになつた。總て輝く様な御立派さであつた。年來東宮は宣耀殿の女御の御許を御覽遊ばし馴れていらせられたので、この女御の御方を當世風に華やかに思召された。此の女御はわざと遊ばすのではないが、御衣の重なつた御裾つき、御袖口など、誠に立派であらせられた。女房の服装なども、この殿に出入る人々の進上したもので見事なことは申すばかりもない。

殿(道隆)の第三の姫君に帥宮(敦道)をお婿に取られ、第四の姫君はまだ大相お小さかつたが、主上の御許で御匣殿と申してゐた。又正妻腹の季の子息(隆家)は三位中將に任ぜられた。この君は六條の右大臣(重信)鍾愛の姫君に婿取せられた。大臣はこの婿君を大相大事にして、もう随分老齡であるのに、この人の來られる夜は、御寢にもならないで、萬端御指圖をなさられるのであつた。この並々ならぬ御志を中將の君は少しも心に留められず、一方景齊かひまき大進の女を愛せられて、この姫君を疎略になされた。御父關白殿も見かねて、色々お誠めになつたが、一向利目がなかつた。

大納言殿(道長)では、土御門の上(倫子)も、宮の御方(明子)も皆御男子をお産みになつた。土

御門の上の若君はたづきみ(頼通)、宮の御方のはいは君(頼宗)と申した。關白殿では、橘三位徳子(子)の腹に男女の御子があつた。其他山の井の中納言にも御子があつた。

この月頃、宣耀殿の女御(娥子)に御懷妊の氣が見えたので、御父大將殿(濟時)は心を籠めて御安産を祈らせられた。東宮も御寵愛の甲斐があつたと思召された。この頃は淑景舎(原子)もおいでになるので、好い折だとも思召されるのであつた。麗景殿の女御(綏子)は御里にのみおいでになつた。東宮が人知れず、眞實にお愛しになつておいでになつたのは、宣耀殿の女御であつたので、御氣の毒にも淑景舎の御方はむしろ煩はしく思召されていらせられた。麗景殿の事等は勿論わざとも思召出しにはならなかつた。

その中に、小千代君(伊周)が内大臣になられた。御年二十ばかりである。中宮大夫殿(道長)はこれをもつての外のことと淺ましく思はれて、この後は特に世間に出て交もされなくなつた。

かくてはかなく此の年も暮れて、正暦五年となつた。どうした事か、今年は世の中が騒がしくて、春から病氣が流行し、都大路にも死骸が澤山轉がつてゐるといふ有様であつた。宣耀殿(娥子)の御産は、こんな年に當つて居られたのである。土御門の上(倫子)も同様であつたので、どうかと危ぶまれてゐるが、三月頃に御平産、女君が産れられた。「こんな怖ろしい時によくも」と、大

相お喜びであつた。

宣耀殿(娥子)は、五月十日頃に御産氣づかれたので、東宮からはしきりに御見舞の使者が往復した。大將殿(濟時)もどうなる事かと心配してゐられたが、御無事に玉の様な皇子が御誕生になつた。大將殿は嬉し泣きに泣かれた。御七夜までの御産養も世にもめでたく執行はせられた。御乳母達も参り集つた。東宮は早く御對面ありたいと待遠しく思召していらせられた。御祖父大臣(濟時)は、「誠に御尤もな事で、どうか早くして上げたい。しかし、昔の皇子方はお五歳かお七歳で御對面遊ばした。」と、昔氣質に、ゆつくり思つて居られた。東宮は唯早くくと急^せぎ立てになつた。

疫病の流行は益々激しくて、關白殿(道隆)も、女院(詮子)も何事よりも怖ろしく思召していらせられた。來年は今年よりも一層甚だしからうといふ噂があつたので、一入御心配であつた。

村上先皇の第九皇子は出家せさせられて、石藏山においでになつた。又御同腹の第三皇子、兵部卿の宮もやはり出家遊ばされて、同じ所においでになつた。この兵部卿の宮が、左大臣(雅信)の庶腹の女との間に、男君を二人持つてゐられたが、その一人は大納言(道長)の養子になつて、少將と申してゐる。もう一人の方は、幼い時から出家され、宮と御一緒に住んで居られた。第九

皇子は、九條殿(師輔)の御子の入道少將(高光)、多武峰の君とも申し、又幼名をまぢをさといつた方の御女の許へ通うてゐられた。大相美しい姫君で、絶ち難い執着を持つてゐられたが、世の無常を悟られたあまりに、とう／＼捨てておしまひになつたのである。その後この姫君の美しい事を聞かれて、粟田殿(道兼)は、北の方と従姉妹の關係によつてか、この方を迎へられて、養女になされ、大切にしていらせられた。その後然るべき人々から、度々御懇望があつたけれども、姫君はお聞入れにならなかつた。その中、故三條の大殿(頼忠)の御子權中將(公任)が特に熱心で、御文なども優れて趣深かつたので、遂にこの方に御縁を定められた。それから、二條殿の東の對を美しく飾り、才色優れた女房十人、女童二人、下仕の女二人を使はれて、ふさはしく、華やかな御生活をしておいでになつた。中將も、姫宮が非常にお美しいので、甲斐あることと思はれた。

かうして暫く通つて居られたが、やはり外聞悪く思はれて、御妹の四條の宮(遼子)の西の對を美しく造り直して、この姫をお迎へになつた。宮も、御妹の女御殿(禊子)も大相お喜びで、御對面などがあつた。粟田殿は、姫君のかうしたためたい御様子を大相お喜びであつた。又一條の太政大臣の御子の中將(道信)を養子になされて、北の方の御妹を妻はせ、大切に御世話をして居

られた。

その年の冬、關白殿(道隆)が水ばかり飲みたがられる御病氣にかゝられ、大相衰弱なまつて、宮中の出仕も少しもなされなかつた。この頃新らたに出家した高階成忠が色々心配して、祈禱等を行つてゐた。北の方もあらん限りの手をお盡しになつた。疫病の流行も冬になつて少し下火になつてきたので、世人もほつと一息してゐた時に、又もや殿の御重態といふので大騒ぎとなつた。

内大臣殿(伊周)では、まつ君(道雅)が可愛くてゐられる上に、姫君達も大相美しいので、行末は后にもおなりになるであらうと、大切にしていゐられた。この殿は御容貌も、學才も公卿達に勝つた方であると言はれてゐたが、自らも甚だしくそれを自負してをられる様であつた。しかしそれも尤もな事と思はれた。御弟三男の方(陸圓)は出家されて、この頃僧都になられた。その御弟(隆家)は中納言でおいでになる。山の井(道頼)は故殿(兼家)の御志を思ひ出されて、大納言になされた。

關白殿は、相變らず水ばかり飲んでゐられた。かうした憂への中に、この年も暮れていつた。東宮には、宣耀殿の女御(臧子)が若宮を御同道でお入りになつた。東宮は他にはお目も向けさ

せられず、この若宮をお抱き遊ばして、お可愛がりになつた。

新らしい年が来た。宮中では、中宮(定子)の御寵愛並びない御有様であつた。東宮の方では、淑景舎(原子)の御寵愛はどうかといぶかしまれた。

この年長徳元年と改元になつたが、その正月から疫病の流行甚だしく、人々は生きた心地もない有様であつた。女院(詮子)は關白殿の御容態を御案じになるのは言ふまでもなく、御自身も後々の世の中を心長閑かにお指圖遊ばすことは到底出来まいと、色々御心を悩ましていらせられた。今年には下人等皆死に絶えてしまふかと思はれた。四位五位の人達は勿論、その上の公卿達に迄及ぶであらうといふ事であつた。かうした恐怖の中に三月頃になつたが、愈々關白殿の御容態も頼りなげになつた。ところが或夜、俄かに参内せられて、「私の病も大相悪うございますので、病中の政事は内大臣が行ふべき宣旨をお下し給はります様。」と奏上した。主上も、「それ程に容態が悪いなら、それも差支へなからう。」と思召して、三月八日に、「關白の病中は天下百官の政を執行せよ。」といふ宣旨が内大臣に下された。

その中に閑院の大納言(朝光)は疫病に罹られたが、三月二十日に亡くなられた。悲しい事である。「明日知らぬ」と歌にもあるやうに、人々今日の無事を喜び、人の上を歎かれるのであつた。

關白殿の御容態は益々芳しからず、四月六日には出家せられた。皆悲しみ感ふのであつた。北の方も引續いて尼になられた。昨日は内大臣殿に隨身兵仗を賜はつたのに、今日はこの有様で、殿の人々は悲哀こもるゝなる中に、四月十日終に薨去せられた。

さて、内大臣殿(伊周)の御政は、殿(道隆)の病中だけとの宣旨であつたのに、かく薨去されたので、どうなる事かと、世人は故殿を哀悼するよりも、この事に心を惹かれてゐた。内大臣殿は、己が才を頼んで、天下の政事は我のみこそと思はれる様であつたが、世間では却てその政事に首を傾げるものが多かつた。大殿(道隆)の御葬送は、賀茂の祭の後に行はれる筈であつた。この間の執政は、内大臣が行はれるのも變であるし、さりとて他に任せられるのも不都合で、中途半端なことであつた。しかし内大臣殿は、この間に、總ての事を處理せられ、着物の長短迄改められたので、「御喪の間は、かうした事は知らず顔で居られたらよいのに。」と、非難めいた事を言ふ人もあつた。北の方の御兄弟、何某の國守(明順・道順)はどうなる事かとあはてふためいて居られた。二位の新發意(伊周の外祖父成忠)はこの御喪にも加はらずに、高僧達を集めて内大臣の引續いての執政を祈らせ、自分も夜晝額に手をあて、祈り續けられた。

かうした騒ぎの中に、小一條大將が四月二十三日に亡くなられた。御女宣耀殿の女御の一宮の、

幼くいらせられるのを、置いて逝かれた事は、お察しするも悲しい事である。左右の大將が暫くでも缺けてゐる事は不都合なので直ぐに中宮大夫殿（道長）が左大將に任ぜられた。

大殿の御葬送は、賀茂祭の後、四月下旬に行はれる事であらう。小一條の大將も同じ頃行はれるであらう。悲しい事どもであつた。

内大臣殿（伊周）は、何となく世の中が人の手に渡りさうに思はれたので、二位（成忠）に祈禱の事を怠るなと責められたので、二位は極秘の御修法等を、自分も行はれ、人にも行はせて、「危くとも、平氣でいらせられる様に、何事も人の力ではありません。すべて天命です。」と、頼もしげに言はれた。御叔父の殿ばら（明順・道順）が、天下の事を不安に思つて、色々耳語して歎いてゐられるのは、粟田殿（道兼）の事を怖れてゐられるからである。又女院の御心も、粟田殿の方に傾いていらせられる御氣配が見えたのであらうか、世人は皆粟田殿の方へ参り集るので、内大臣殿は種々心配の御様子であつた。この頃、粟田殿は御夢見が悪くて、何かの兆でもあらうかと、御心も落着かれなかつた。陰陽師等に判断させてみると、凶兆であるから、すぐ御居所を替へさせられる様にとの事であつた。それで然るべき場所を求めてゐられると、又一方では、これは吉兆であるなどといつて、種々な占が出てくるので、途方にくれて居られた。この殿の内に、

かうした不祥の事があつて、謹慎していらせられる事を、内大臣殿が聞かれて、いよ／＼盛んに祈禱を行はせられ、かやうにたゆむ時なく行はるゝ御祈の効驗かと頼もしくも思つてゐられる中に、四月下旬、粟田殿が他所に引越された。その先は出雲の前國守相如といふ人の家であるが、この人は長年關白殿にも参らず、唯この殿大事に仕へて来た人である。この家は中河といふ所にあつて、左大相殿（重信）の近所である。父の内藏頭相信の朝臣といふ人が造つて住んでゐられた、池、遣水、假山等ある大層美しい邸宅で、かねて殿の御方違かたがへの家と思つてゐられた所であつた。相如は位も低く、不遇の地にをられたが、時平公の御子、敦忠中納言の御孫に當られるので、御引越になつたのであらう。さて引越して見られると、相如自ら障子に繪をかけたなりなどして、頗る趣ある様にしつらへてあつたので、殿も大に興ぜられた。かくて自然、この家に人々も多く参り集るやうになつたが、殿の御氣分はやはり勝れられなかつた。五月三日に、勅使が此處に關白の宣旨を持つて参られた。主人の相如も非常に光榮に思ひ、人々も大相喜ばれた。百官皆此處に集まつて、世の中の馬車他には一輛もあるまいと思はれる壯觀であつた。

内大臣殿（伊周）は、すっかり呆然とした御様子であつた。殿中の者總て、主人がかく意外にも物笑ひの種となられた事を歎き悲しんでゐた。片膝を抱く様なさまをしながら、「とんでもない

事ぢや、かうなつては内大臣のまゝでいらせられた方がどんなに結構であつたらう。何の爲に暫く攝政を遊ばされた事か。思へば拙い事だつたなあ。一寸の間關白になられて人の物笑ひになられた事を、今は子供でも知らない者はあるまい。」と歎くのも、誠に道理と思はれた。

關白殿（通兼）はやはり御氣分が勝れられず、御風邪でもあらうかと、ほゝ（風邪薬）等召上つたが、一向利目が現れなかつた。はては起臥おきふしも不自由を感じられるやうになつた。しかし世人はこの關白を喜んで、「これこそ當然なことである。若輩者に政を執らせられる筈はない。」と言つてゐた。大將殿（道長）も御満足の様子であつた。内大臣殿が御喪中も慎しまれず、己が才を誇つて、天下の大政を指圖され、袴の丈、狩衣の裾の長短迄も改められた事を不服に思つてゐた者は、「榮枯盛衰の轉ずることの早い事。」と申してゐた。

五月四五日の頃には、關白殿の御容態もまことに御苦しげになられ、お熱も出て來たので、今は何ともせん方がなくなつた。しかし關白となられたばかりに、御讀經、御祈禱などを行はせらるべくもないと思召され、強いて平氣を装はれて、起き臥しを獨りで苦しんでゐられた。御殿の内には、侍の詰所にまで、四位五位の人まで、晝夜の別なく入り込んでをられた。隨身の詰所、小舎人の詰所では、酒を飲み、歌ひ騒いで、主人のかう苦しんでをられることなど、意にもか

ない有様であつた。左大將殿（道長）が毎日來られて、種々の御指圖なされた。殿の御容態は一向芳ばしくないので、たゞ事でないと思ふ者はあつたが、萬一の事などは誰も思ひかけなかつた。少し御氣分がよくなつたので、今はともかくと思つて、五月六日參内して御禮言上をし、その夜、三條殿に歸られた。

關白殿の御病氣の事も世に洩れ聞えて來たので、内大臣殿（伊周）が將來に望みをかけてゐられるのも誠に道理である。關白殿でもはや包み隠す事も出来なくなつたので大騒ぎとなつた。昨年より世の中が何かと不穩なところに、又かうした事になつたので、宮中でも、然るべき侍臣が伺候し、警固の瀧口・帶刀の武士は當番を缺かさなかつた。

二條殿では、北の方が御懷妊の様子であつたが、今度は夢でも、卜でも、女君の誕生と思はれてゐた。殿は待遠く思つて居られたが、かく關白の宣旨等のめでたい事さへあつたので、必ず今度こそは女君と楽しみにしてゐられた。そこにかう御病氣が重らせられたので、殿の内は上を下への大騒動となつた。女院からも、御使の絶え間もなかつた。大將殿（道長）も御心配になり、寺々の御誦經の料として、色々の物を運び出された。御厩の馬も悉く、又御車牛の類迄も總てお使ひになつて、御誦經等を指圖なされた。こんな御様子では今後どうなりゆく事かと、殿の内の

人々はあはてまどうてゐた。

五月八日の早朝には、六條の左大臣（重信）、桃園の源中納言（保光）、清胤僧都等の薨去の知らせがあつたので、殿の内は一際どよめいたが、「しつ、しつ、こんな事は縁起が悪いから殿のお耳には入れるな」と皆賢げに制し合つた。しかし同日未の時（午後二時）頃に、終にお亡くなりになつた。哀れにも忌はしい事であつた。殿の内の有様も想像されよう。

左大將殿（道長）は總てがまるで夢の様な氣がしていらせられた。單衣の御袖で御顔を覆ひながら、夢見心地で御退出なされた。この兄の殿とは特に氣の合つた御仲で、御病中も忌まはしいとも思はず色々お世話なされたが、その甲斐もなかつたのである。同じ御兄弟でありながら、故關白殿（道隆）薨去の時は御訪ねもなかつたのに、この殿には頼もしくも萬事お世話なされた甲斐のなかつた事を、殿の内の人々は返すくも残念に思つた事であつた。けれどかうなつてみると、長年殿に仕へてゐた人は格別、この頃お仕へ申した人々は早速他所へ行つてしまつた。關白の宣旨を蒙らせられてから、今日で七日目である。以前の攝政關白で、兄弟續いてならなかつた例はあるけれど、こんなに短くして世を去られた例は今迄にはなかつた事である。誠に悲しい事であつた。

例の内大臣殿（伊周）は權勢が瞬く間に去つてしまつて、淺ましくも、馬鹿げた事と、人の物笑ひとなり、大相嫉まじげな御様子であつたが、將來の事は分らぬながら、かくも早く嬉しい時節が到來した事と喜ばれて、又二位の新發意（成忠）に御祈りを熱心に行はせて居られた。前よりも一層、今度こそはと思つて居られたのであらう。かうなる事が當然と思つてゐられるらしいのには、他人事ながら憤りを感じずにはゐられなかつた。

粟田殿（道兼）の子息達には、大人びて、しつかりした方もなかつた。まだ甚だ年若で、髪の毛のそ、け立つた方が二人ゐられたのもおかあいさうであつた。その夜、お遺骸を粟田の邸に運び、十一月御葬送を行つた。かへすくもはかなく、心憂き事であつた。

御葬送が濟んでから、五月十一日に左大將（道長）に、「天下及び百官執行」といふ宣旨が下つた。今は關白殿と申して、天下に並ぶ者なき御威勢である。女院も以前から特に御目をかけさせられたので、年來の御本意が叶つたと思召された。内大臣殿（伊周）は粟田殿の時になつて、この度も呪咀等しようと思はれるのをこがましい限りである。しかしそれでも頼もしく思はれて、二位（成忠）の御祈りは引續きなされる御様子であつた。この間に世の中の勢は滔々とおし移つていつた。内大臣殿（伊周）はすつかり悲觀して居られたが、御叔父達や、二位などが、「何

も御悲觀なさることはありません。關白となられてもたつた七八日で終つた方もあるのですからお命さへあれば、又何か新しい事が起らない事はありません。此の老法師が世にある限りは大丈夫でございます。」と、頼もしげにいられるので、もしやと將來の希望をかけてゐられるのであらう。

大將殿（道長）は六月十九日に右大臣に任ぜられた。又何よりも哀れな事は、山の井の大納言（道頼）が御病中であつたが、六月十一日に薨去された事である。御齡二十五であつた。世の評判も良い、優れた方であつたので、關白殿（道長）も、「故殿（兼家）が養子になさつた御志を思つて、特に目をかけてやらうと思つてゐたのに」と、残念がられた。今年は何事につけても淺ましくも憂きことの多い年であつた。それにつけても、内大臣殿（伊周）は世を怖ろしと思ひ歎いて居られた。女院も年來行はせられた法華經の御讀經を又始められた。世の騒がしさを怖れていらせられたのである。粟田殿（道兼）の御法事は、六月二十日頃に行はれた。北の方も尼になられた。たゞならぬ御體からだであるのにと人々がお留め申したが、お聞入れにならなかつたのも道理である。

中宮（定子）は世の中を哀れに思し歎かれて、里邸にばかりいらせられた。しかしさうしては

かりもいかゞと、此頃參内させられた。主上も深く御同情遊ばされた。東宮は、宣耀殿（娥子）も淑景舍（原子）も共に父殿を失はれた御境涯であらせられるのを、み心苦しきことに思しやられた。淑景舍の大相誇りかの御様子も、懐かしく思召出される事であらう。宣耀殿の一宮も戀ひしくお思ひ出し遊ばされて、參内遊ばす様にとの御沙汰を給はつたが、世の中が騒がしいので、み心安くもお思ひ立ちにならなかつた。

この頃、攝津守爲頼朝臣といふ人が、世の哀れにはかない事を、

世の中にあらましかばと思ふ人なきがおほくもなりにけるかな

と詠まれた。これを聞いて、東宮の女藏人小大君が、

あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいつまであらむとすらむ

と返歌した。

廣幡の中納言（顯光）と申す方は、堀河殿（兼道）の長男であられる。その長年運れ添つてをられた北の方は、村上天皇の廣幡の御息所（計子）の御腹の女五宮でいらせられるが、その御腹に女君二人、男君一人あつた。その女君を年來、主上、東宮にも差上げた希望であつたが、色々煩はしい事を慮られて、主上には斷念してをられた。東宮にも、淑景舍（原子）がおいでになるので

遠慮して居られたが、丁度この隙にと思ひ立たれて、この姫君（元子）を宮中に差上げられた。

中納言（顯光）が、今日明日と思ひ立つてゐられる時であつた。現在の侍従の中納言といふ方は九條殿の十一男公季といふ方で、この方も宮腹の御女を北の方とし、姫君一人、男君二人、を持つて居られた。世の人々が誰も遠慮をしてゐる時に、今の關白殿は御女も多いが、まだお小さく、そちこち走り廻つて居られる頃であるから、これには遠慮する事もないと思召され、是非宮中へと思つて居られた。東宮の方は、淑景舎、尙侍がいらせられる上、宣耀殿が又、第一皇子の御母女御として、この上もない御寵愛なので、同じならば宮中にと思はれるのも道理であつた。

さて、廣幡の姫君が宮中へ参り給ひ、承香殿にお住みになつた、世評は、「君の御寵愛もよくはあるまいに、さても古風な事を考へられたものだ。」といふのであつたが、そんな風でもなくて、主上も中々御寵愛遊ばされた、誠に甲斐ある事といつてよからう。

公季中納言も我劣らじと續いて御女（義子）を入内させられた、弘徽殿にお住みになつた。この女御は、勿論承香殿（元子）より一際當世風に、さらびやかにしたてられた。しかし主上の御寵愛は、承香殿よりは少し劣つてゐる様であつた。「承香殿こそ意外な御寵愛である。」と、世間もお噂申してゐた。

こんな風で、宮中も一段ときらびやかになつてきた。女院（詮子）は「どなたも、皇子のお出来になる方が大切なのだ。」と仰せられた。女御の中でも、承香殿の御寵愛が一番深い様で、はかなく月日も過ぎていつた。

浦々のわかれ

かねて御懷妊中の中宮(定子)はお産の事を御心にかけてさせられたが、十二月二十日過ぎに、格別のお苦しみもなく、皇女が御誕生遊ばされた。同じ事なら皇子であつたら、どんなに頼もしく嬉しい事であらうと思召すものゝ、かうして無事にお産れになつた事を、返すくも嬉しく思召され、面倒な世の中であるから、却て皇女であらせられた方が御安心であるとも思召された。主上には別にはつきりとは奏上しなかつたが、自然女院がお聞き遊ばされたから、同じ様に聞召された事と思はれた。主上は大相御同情遊ばして、お世話する人もないが、どうしていらせられるかと思召して居られた。女院からも、色々細かに御様子を察し給うて、御見舞遊ばされた。女院は格別この御産に就いて御心配していらせられ、かう御深切になされるのも、神佛の加護によるものかと思はれた。御湯殿の儀には、主上の御仰せで、右近の内侍が参つた。憚り多く、怖ろし

い世の中ではあるが、勅命のかしこさ故参つたのである。御儀式は定まつた事であるから、總てその通りに行はれたが、故殿の華やかな御時世にかうした事が行はれたならば、どんなにかめでたい事であつたらう。中宮はそんな事を思ひ出されるにつけて、悲しくおなりになるのであつた。中宮のを始めとして、誰もく厭はしい喪服を着けてゐられるのに、皇女は、大相御色白で美しくいらせられた。右近の内侍はそれを拜して、「あゝ、早くお上の御覽にお入れしたいものでございます。」といはれた。御七夜までの事も、總て作法通りに行はれた。

右近の内侍は、御七夜も過ぎたので、宮中に歸つていつた。中宮は様々祿など賜はつた。内侍は、「私をなぜ疎く思召してかく御面倒な事を遊ばしますか。お上も右近ならばかねて親しい、遠慮のない仲であるからと思召されたればこそ、私をお遣はし給うた甲斐もございません。これではお尋ねを蒙つた場合に、奏上のしやうもございません。」と啓して、返すくも恐懼して、宮中へ引取つた。主上は密かにお召しになつて、日頃の御様子を細かに御下問遊ばされた。右近は拜見した所よりも一層哀れに奏上すると、主上は御目に涙を浮ばせられて、誠にさもあらうと思召された。若宮の御可愛さなどを奏上すると、「是非見たいものだ。昔は皇子達は、五つや七つになられるまで對面しない事があつた。又宮中に嬰兒のは入る事もなかつたが、當世はそんな風でも

様だ。現に東宮の宣耀殿の宮(敦明親王)などは、東宮が抱いて歩いてゐるではないか。それに又懐妊されたとか、誠に羨ましい事であるのに、まろ朕は若宮に何時會へるかも分らない。などとしみじくと語らせられた。又右近は、「大相御丁寧な御祿など賜はりました、誠に畏れ多い事でございます。何とも申し上げられぬ美しい装束もお下し給はりましたが、正月元日に又参つて戴きませうと申し上げまして、御手許にお返し申上げておきました。」と奏すると、「中宮の様に、氣質の大人めいた方は外にはない。大勢の人を見てゐないからでもあらうか。」と、深くお心にかけていらせられる御様子であつた。それにつけても、尼におなり遊ばした事を残念に思召され、宮中においてならうにも、世間の口が煩はしい事であらうと、人知れずお歎き遊ばされた。

かくて年も改まつて、元日の朝賀より始めて、萬めでたく過ぎていつた。中宮は、かく花の都の華やかなにつけて、かの遠い旅路にさすらうてゐる人の身の上を思ひ出されて、「春や昔の」と古歌の心持が遊ばされるのであつた。年さへも隔たつた事をたよりなく思召され、まるで幾枚も霞を隔てた様な遠いお心地がしていらせられた。かの二條殿は北南に増築されたが、曩にその片方は焼けたので他の方に住んで居られたが、この方も又間もなく焼けてしまつたのであつた。然るに御出産の事も遠からずある筈であつたから、平中納言惟仲の領した家にお移なされ、其處

を女院と申してゐた。

主上は、若宮のお美しさがいかばかりかと早く御覽遊ばしたいものと思召され、女院も同じ御心であつたが、世間を憚らせられて躊躇していらせられるのであらう。關白殿(道長)等がどう考へるかと思召になるのも道理である。且つ中宮(定子)は御姿を變へていらせられるから、公然の御参内も御遠慮遊ばしていらせられたのであらう。主上が御口癖の様に若宮を戀ひしく思召される御様子をお覽になつて、女院も心苦しい事に思召したが、さすがに若宮だけ御参内といふ事もお出来にならなかつた。若宮の御乳母には、北野三位といふ方の御女等が参つて居た。これも九條殿の御子といはれた人である。又辨の乳母や、少輔の命婦等といふ人がゐた。

夏が来る頃には、若宮は大相お可愛くおなりになつた。或夜、御祖父二位(成忠)が來られた。中宮は御覽になるや、しやくりあげてお泣きになつた。若宮の大相お可愛いので、二位は豫期した通りと大相喜ばれた。そして、「故母上の代りに、今はお前様を頼みにして居るのですから、朝晩にも必ずお目にかゝりたいと思ひながらも、さうも出来ないのが残念です。さて世間では、主上がこの若宮を御覽になりたく思召して、参内する様にと仰せられていらせられるといふ事です、一體どうお考へになつていらせられるのですか。年老いた私には、誰も何も聞かせてくれ

ません。」と仰せられた。中宮は、「私も母上の亡くなられた後は、あなたをその代りにと思つて居りましたが、これといふ事もなくあはたしい中に、この宮の御哺育の事に日を暮して居ります。主上も、この宮を御覽になりたくていらせられる御様子でございますし、女院も主上の御心に従つていらせられる様で、お連れ申して参内する様にと仰せられますが、いかゞなものでござませうか。何事にも遠慮されて、どう致したらよいかと躊躇されます。」と仰せられると、二位は「やはり然るべく御決心あつて、宮中においでになつた方が宜しからうと存じます。御祈を熱心に致して寢んだ晩に、私は皇子御誕生の夢を見ました。それでやはり早く参内遊ばされた方がよいとお勧め申上げようと思つて、かうして参つたのでございます。御手紙では、申上げ落す事もあるかと存じたのでございます。」としきりにお勧めなされ、その夜一晚、お話し続けられて、明け方にお歸りになつた。

中宮は御参内の事をこの御祖父のお勧めによつて思ひ立ちになつた。御叔父、明順、道順が急いでお支度を整へ始めた。國々の中宮の食封より、貢物を召されたが、速かに上納する者もなかつた。丁度、成莊園から絹を献上する由を申出た者があつたので、それをお取寄せになつて準備を急がせられた。此度は皇女の参内なので、いつもと御様子が變つてゐた。御輿に召させられるのも

あまり古風なので、御車といふ事になつた。中宮は参内と定められても、さすがにまだお恥づかしく思召されたが、「今になつて何故御躊躇遊ばされますか。やはり御一緒に。」と、傍からしきりにお勧め申したので、かの二位の御勧めも思ひ出されて、御一緒に参内遊ばすことになつた。人の口はさぞうるさい事であらうと思はれた。

御参内の夜は、大殿(道長)が前驅をなさる由を申上られたので、公卿達も皆御供に加はられた。この殿の御志は、誠に御奇特な事であつた。宮中にお着きになると、女院がお待ちかねで先づ若宮をお抱き上げになると、大相お美しいので、微笑まれて、可愛ゆげに御覽遊ばされた。可愛く、圓々と肥えておいでになつた。若宮が何となく華やかな御聲で物を仰せられるので、「まづしるもの」と思召したであらう。中宮は萬事に御遠慮遊ばされたが、院と御對面あつて、盡きせぬ御物語を遊ばしてゐる中に、主上がおいでになつて、若宮を御覽になつた。若宮は何ともいへずお可愛くて、始終にこゝして、物を仰せられていらせられた。主上はかくも可愛いのに何故今迄對面させなかつたであらうと思召されると、先づ御涙も浮かぶのであつた。「これが皇子であつたら、どんなによかつたらう」と、人知れず思召された。

さて主上は中宮に御對面あらせられた。中宮は始め御几帳を引寄せて、よそ／＼しくもてなさ

せられたのも仰道理であつたが、御燈火を遠ざけて、近くよらせられ、泣いたり笑つたり遊ばす頃には、主上は「いにしへに猶立ちかへる」御心地にならせられた。その夜は、色々な御物語に明かさせられて、明方に中宮が退出遊ばさうとなさるのを、主上は、「もう暫く。若宮が慣れるまで、今四五日は留る様に。」と仰せられたので、中宮職の部屋に明方においでになつて、暫く其處に御滞在になる、御用意を遊ばされた。主上も、色々周囲にお氣がね遊ばす事も多かつたが、ひとすぢに中宮を戀ひしく思召していらせられた時なので、人の誹りもわざと知らぬお顔を遊ばしていらせられた。中宮は世間の誹りを、日頃の御歎きに添へて御心を痛めていらせられた。宮中の女房達は昔の事を思ひ出して、感を深うしてゐた。そのまゝ、數日おいでになつたが、おはします所があまり遠いので、近い御殿にお移し申して、主上の方からお通ひになり、夜中頃までおいでになつて、お歸りになつた。御愛は以前より一入濃やかでいらせられたやうであつた。その爲に、この頃お上りになつた女御達の御寵愛はどうかと思はれた。

直ぐにも御退出になる筈であつたのを、主上が、「もう暫く、く。」とお引留めになつてゐる中に、二月ばかり経つてしまつた。その中に御氣分勝れさせられず、又御懷妊かと疑ふべき徵も見えたので、お胸もつぶれるばかりにお心苦しく思召された。主上もこのことを聞召され、深い御

契りをしみじみ感じになつた。この度の御參内については、世間で悪しざまに評判致し、中宮も總て夢路をおたどりになつてゐるお心であつた。

中宮は御心地がお苦しいので、切に願ひ申上げて御退出遊ばされた。近く入内された弘徽殿承香殿、いづれも御寵愛中宮に及ばれなかつた。主上は、中宮の色々とたよりない事を思召やられて、御手紙の絶え間もなかつた。他の方々には、隔日位の御使であつた。右近の内侍が中宮との間の、それとなきおとりつぎをしてゐた。二位はこんな事を聞いて一層喜び、夢の效驗しよしが見えてきたと思つて、益々お祈を怠らなかつた。

冬になつて、承香殿(元子)が御懷妊の御様子に見えたので、父大臣(頼光)は大相なお喜びであつた。主上も嬉しく思召した事であらう。院も唯どなたかに皇子がお産まれになつたらばとかねて思召していらせられた。三月位で奏上して里邸に退出された。その時の儀式は、大相立派であつた。女御は輦車に召され、女房達は徒歩でその後を随つた。弘徽殿の細殿の前を通らせられた時、細殿の御簾を押し出して女房達が外にこぼれ出でて見てゐた。承香殿の女御の御供の童女の物慣れた者が、明るい火にこの細殿を見て、「御簾だけがお腹が大きくなつたのか。」と悪口をいつてゆくのを見て、弘徽殿の女房は、「あゝ嫉ましい。なんでこんなものを見たらう。」と口惜しがつ

た。承香殿の女房は、淺ましくも得意さうな様子であつた。ともかくにも、かうして御退出になることは、非常に美しい事であつた。その後、御父右大臣(顯光)は様々御祈りをなさられた。粟田殿(道兼)の北の方は、今この殿の北の方であつた。この右大臣は粟田殿の官位も、北の方も共々その後を襲つて居られたのは、不思議な縁であつた。堀川殿を立派に造營して、今はそこにお住みになつてゐる。又此の女御(元子)と同腹の御兄弟(重家)は少將で、世間の褒め者になつてゐられる。

はかなく月日も過ぎて、長徳四年になつた。若宮は今年三つにおなりになつた。主上は、どんなに可愛くなられたであらうと思召しやられるにつけても、中宮を眞實戀ひしく思召される折も多い事であらう。中宮(定子)は三月頃御出産の御豫定なので、色々お氣をつけて御養生をなさつていらせられたが、食封からは定まつた貢物を滞りなく納める者はなかつた。内藏寮からいつもの御産の御道具を持参し、女院からも色々お心づけ給はつたので、何事も御支度が出来た。御兄弟の僧都の君も種々頼もしくお世話をし、どういふ事になるのかと焦慮してゐられる中に、御産氣が見え始めた。一同ざわ／＼と騒ぎ立つたが、頼み甲斐のある様でなかつた。唯この但馬守(生昌)だけが萬事に頼もしくお世話をしてゐた。二位もこの事を知つて、額を地につけて御安産

を祈つてゐた。さて、その御願の効驗(くしん)であらうか、大相安らかに皇子(敦康親王)御誕生あらせられた。中宮は皇子でもあらせられたので一通りならぬお喜びであつた。先づ女院にお知らせ申し、女院から主上に奏せられて、御使が御劔を奉じて來られた。皆誰も／＼嬉しい事に思はれた。「世の中の事はかうしたものだ。幸福といふものは、望んだとて來るものでなく、遁げようとしても遁げる事が出来ない。」と、聽き苦しいまで世間にお噂申してゐた。御湯殿の儀には、例の右近の内侍が遣はされた。此の度は宮中で御養産の御儀を行はせられる筈であるが、やはり御遠慮遊ばしておいでになつたが、大殿(道長)は主上の御心を御推量申上げられたのか、七日の御産養を行はれた。主上も、院も、嬉しく思召していらせられた。院からは絹綾等、その他の事につけても、細かにお世話遊ばされた。

御七夜には、皇子を拜見に、藤三位を始めとして、然るべき命婦、藏人達が參られた。二位は夢が正夢になつたので、「御丈夫にさへお育ちになれば、必ず天下の主とおなりになるべき方である。よく／＼氣をつけて御養育申上げなさいませ。」と、常に中宮に申上げてゐられた。

中宮の女房達は、「他家に御奉公しなくてよかつた。この若宮様の御位に即かせ給ふ時に逢ふ事も出來るといふもの」と、有頂天になつた事であらう。

御湯殿の鳴弦、讀書の博士達は、皆大殿(道長)が任命された。大殿は、「さて、めでたくも皇子をお産みになつた事である。中宮も我が同じ系統にてあらせられるし、皇統の上でも我が藤原氏の系統は絶えない事と思はれる。九條殿(師輔)の流以外から天皇の御出でになる事はないと思ふものの、その中でもこの東三條家の一流は皇統と御縁が深いのであらう。」などと申された。

主上は、皇子をいとほしく思召されるにつけて、中宮を大切に思召されて、「何とかして、この皇子誕生の功により、流罪の者共を御赦免になりたい。」と思召された。女院ともかねて御相談になり、その由を殿(道長)にも仰せられると、殿は、「誠に皇子誕生の功につて、御赦免あるのは宜しうございませう。直ぐにもその御使をお遣はし下さいませ。」と奏した。主上は大相お喜びになりながらも、「然らば、適當に計らへ。」と、わざとのどやかに仰せられた。

四月になつて、前帥(伊周)、出雲權守(隆家)赦免の宣旨が下つた。丁度この頃、例の瘡瘡とは違つた、細かな赤い瘡(麻疹)が流行し、老人も若い者も、上下共にこれに罹つて苦しみ、命とられる者もあつた。これを朝廷、民間共に憂慮して、人心が落着かなかつた。かゝる際ではあつたが、此の召還の宣旨を中宮は世にも嬉しい事に思召した事であらう。晝夜兼行で、朝廷の御使の下る前に、中宮の御使が下つていつた。これにつけても中宮の御蔭と世間ではほめ稱へてゐた。

京では賀茂の祭、其他のことも過ぎて、四月下旬となつた。

筑紫(伊周の許)にはまだ中宮の御使も、宣旨の御使もとどかぬ中に、但馬(隆家の許)は近いので、御迎への人々が、多數出かけた。名譽な事ではないが、中納言は大相喜ばれた。かくてこゝを立つて、五月三四日に京に着き、早速兼資朝臣の許に行かれたが、この家には大殿(道長)の子息源中將(成信)が聳になつてゐられるので、兼資夫婦は、この事を、大相隠しておかれた。

大殿の源中將といふ方は、村上帝の三宮で、出家して石藏にゐられた兵部卿宮の二人の男子の一人で、大殿の北の方の養子になられた方である。中納言は以前もう一人の姫君の許に、親達にも内密で通うてをられた。五月五日に、中納言がこの姫君に次の歌を贈られた。

思ひきや別れし程のそのころよ都の今日にあはんものとは
姫君の返歌は、

うきねのみ袂にかけしあやめ草ひきたがへたる今日ぞうれしき

中納言殿は中宮の御殿に参られたが、先づ喜びの涙がせきとめ難く流れるのであつた。哀れに悲しい中に、姫宮(脩子)、若宮(敦康)がとりくにお可愛いので、まるで夢が實になつた様な気がなされた。宮は筑紫からの上京を、待遠しく思召してゐられた。迎へに明順朝臣が行かれた。

淑景舎、宮の上 敦道室道隆第三女等集られた。四の御方は若宮を特に御世話申してゐられたので、中納言をも懇にもてなされた。中納言は、夜だけ、兼資の姫君の許に行かれたが、その外は中宮の御許にのみをられた。二位はこの頃赤瘡にかゝり、不覺の状態であり、命も危い容態で、「唯一目帥殿に會つて死にたい。」と願つてゐられるが、それも覺束なく思はれた。

この頃、赤瘡蔓延して、これにかゝらぬ者もないといふ有様であつた。承香殿の女御は、すでに臨月が過ぎても、不思議に御産氣を催させられないので、色々と御祈りなどなされたが、その験がないので、思ひあまらせられて、六月頃太秦の廣隆寺にお参りになり、御祈禱、藥師經の不斷經等を行はせられた。かうする中に七日も過ぎたので、又日延べしてお祈りになつた爲か、御産氣づかれて、お苦しみになつた。殿(顯光)はそは／＼として、先づ宮中の右近の内侍の許へ御知らせになつた。内侍が御前に奏したので、御見舞の御使が参り、女院からも、「どうかと、待遠しくて」等お見舞があつた。「この寺の中では不都合であらうし、又里邸にお歸りになることも、不安心な事」などと、この寺の別當なども困惑してゐる中に、もうお産のありさうな御様子なので、「まよよ。罪はお産の後にお詫びしよう。」と思つて、そのまよにさし置いた。その中に水だけがさつと下りた。人々は不思議に思ひながらも、御産はあるのであらうと騒いでゐると、水だけ

が後から／＼下りて、御腹は小さくなり、普通の人の腹よりも小さくなつておしまひになつた。長い間滯つた血のけさへなくて、水だけですんだので、寺の僧達も呆れ果ててしまつた。

父大臣(顯光)は「七日病む」といふ諺の様に、茫然としてゐられた。膝をかゝへて、空を眺め長い夢の覺めた様な心持でをられた。しかしどなたよりも、女御自身の御心持はお恥づかしい事であらう。あの弘徽殿の細殿での事など思出されて、今は再び宮中にお歸りになる事は思ひも寄せられなかつた。宮中より頻りにお尋ねの御使が來られたが、何とも奏上のしやうがなかつた。産れた孩兒の死ぬ事はよくある事であるが、かうした事は意外といふ位の事ではない。御寺の僧共も、「かういふ事は恥づかしい事であるが、しかし御無事でいらせられるのも、佛のお蔭でございます。」と、已むなく申してゐた。

主上もこの事を聞召されて、何とも仰せられなかつたが、「右近が物騒がしくいひ立てたので、幾度も使を出したり、仰山な事をした。これでは、寧ろ妊娠しない方がよかつた。」と氣の毒に思召された。院にも、大相聞き苦しく思召された。世間では、この事を歌に詠んだりした。あの「靡ばかり」といつた童女は、それに恥ぢて、女御の御許へも参らなくなつてしまつた。しかし他の女御方よりも、弘徽殿の女御の御懷妊なき事を馬鹿らしいことの様に噂申してゐた。あの承香殿

の女御の御退出になつた夜の有様は、あれ程まで面目ある事はないと思はれたのであつた。實に世の中の哀れに定めぬ事を、この事につけても思ひ知らされたのである。

筑紫では、帥殿は上京を急がれたが、此處にも赤瘡が流行してゐたので、大貳は、「少し下火になつてからお上りなさいませ。途も危うございますし、御送りする下人達も怖れて、不便でございますから。」とめられた。殿も成程と、待遠しく思ひながらも、病氣の下火になるまで待つて出で立たれた。この頃二位は、この瘡で亡くなられた。お氣の毒な事である。帥殿はかく召還されるのも、唯若宮の御蔭としみじく嬉しく思はれつゝ上られた。京でももうお着きになる頃かと、そればかりを待遠しく思つてをられた。

十一月になつて着かれた。致仕の大納言殿（重光）の邸に入られた。北の方を始めとして、殿の内に出入する人達は唯喜の涙を流すばかりであつた。御殿の内も、昔と變つて、哀れに荒れはててゐた。北の方も唯涙に溺れて、何事もよう申される事も出来なかつた。殿は松君が大相大さくなつてゐられるのを御覽になつて、愛撫しながらしきりに泣かれた。松君も何と思はれたか目をこすつてゐられた。

殿は、

浅茅生とあれにけれどもふるさとの松は小高くなりにはけるかな

と詠まれ、又

來し方のいきの松原いきてきて古き都を見るぞ悲しき

といはれると、北の方は、

そのかみのいきの松原いきてきてみながらあらぬ心地せしかな

と詠まれた。

先づ中宮の御方へと急いで出でさせられる時も、北の方は唯涙に溺れてゐられた。中宮は單の御衣の袖も絞るばかりに、涙を流し給うた。そして、「お話ししたい事は澤山ありますが、いづれゆつくりお話しませう。」などと仰せられた。宮達はとりづくに皆お可愛くいらせられた。先づ一宮（敦康）をお抱き申上げうと思はれたが、御母の喪中なので、「忌まはしい氣がする。」と御遠慮なされた。これにつけても世の無常が思はれる。誰も無事に生き長らへてゐられるのが、何より、めでたい事であると、故母上の事を返す／＼お話し申して、誰も／＼大相泣かれた。誠に、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、涙だけは變らぬものと、盡きせず哀れに思はれた。

その頃吉日を選んで、故北の方の御墓詣りに、帥殿、中納言殿一緒に、櫻本に行かれた。御在

世であつたら、どんなにかお喜びであらうと思はれるにつけて、涙に溺れさせられた。折しも、雪が降りしきつてゐたので、中納言は、かゝる歌を詠まれた。

露ばかりにほひとどめて散りにける櫻がもとを見るぞかなしき

帥殿は、

櫻本降るあわ雪を花と見てをるにも袖ぞぬれまさりける

色々哀れな事を申されて、泣く／＼歸られた。そして今は、どうかして其處に御堂を建立して、亡き方の菩提を弔ひたいと考へられた。

耀く藤壺

大殿（道長）の姫君（彰子）は、今年十二になられるので、年内に裳着の儀を済ませて、直ぐに入内せられるやうにと、準備を急いでをられた。總て缺ける所もなく、立派に御支度は整うた。女房の有様は、かの初雪の物語の女御の御殿に参り集つた人達よりも華やかであつた。御几帳・御屏風を始め、總て並々ならぬ様に御準備をなされたが、殊に御屏風等の繪の面白い所には、然るべき人々が歌を詠んで書きつけられた。「和歌は詠人の品位よびとによつて、面白さが優る。」といはれてゐるが、大殿も詠まれ、又花山上皇も詠ませられた。四條公仕の宰相等も詠まれた。それは、藤の咲いた處に

むらさきの雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらん

又人家に、小さい鶴を澤山畫いてある繪に花山上皇、

ひな鶴を養ひたて、松が枝の蔭にすませんことをしぞ思ふ

とお詠み遊ばされた。其他にも澤山あつたが、此處にはその一端を擧げてみたのである。

かくて入内せられたのは、長保元年十一月一日の事である。御供には、女房四十人、童六人、下仕六人であつた。大相選び調べさせられたので、身分の卑い者は勿論、四位五位の女といへども、他の女房に交つて見劣りがしたり、衣裳の美しくない者は除いてしまはれた。耀くばかり華やかに装つた、おし出しの立派な者ばかりをお採りになつた。然るべき童などは、女院からなどお遣はしになつた者の中から選ばれ、その名も内人、院人、官人、殿人等とつけられた。

姫君（彰子）の御有様の御立派な事は勿論であるが、御髪は丈に五六寸も餘らせられ、御容貌は譬へ様もなくお美しかつた。まだ大相御年幼くいらせられるのに、少しも幼稚な所がおありにならないで、いふもおろかに、めでたい御有様であつた。お仕へする人々も、あんまりお若いので、女御として見榮えなくいらせられるであらうなどと思つてゐるが、意外にも大人びていらせられた。總て珍らしく思はれる程に結構をこらして入内遊ばされた。

この御方（彰子）は藤壺の上の局においてなることになつた。その御局のしつらひの立派さ、玉も少しばかり磨いたのは光のどかに思はれるがこのみ局は照り耀く玉のやうで、女房達、なま

なかの人は御前の方に參られるとは思へないやうであつた。かくも見事にしつらはせられた。御几帳、御屏風には皆蒔繪、螺鈿であつた。女房の衣裳の大海の摺裳、織物の唐衣などは昔の通りであるが、といつてこれはまたどうしたものであらうと思はれた。女御（彰子）の假りそめに召した御衣の色香でさへ、世の例となるべきものであつた。

吉日を選んで、御乳母を始めとし、命婦、藏人、陣の吉上、衛士、仕丁迄に贈物を賜はつたが、年老いた女官、刀自に至る迄、皆立后又は皇子降誕等の御祈を熱心に致した。御乳母達にさへ、絹・綾・織物の装束など多くの重ねを衣箱に入れた物に、様々の物を添へて下された。此の御方に召使はれぬ者は肩身の狭い思ひをし、世間でも馬鹿にしてゐた。たま／＼新らしく召使はれる者があると、世間の美望の的となり、仕合せ者と言はれてゐた。

この頃、宮中は大相華やかな御有様であつたが、三條の太后の宮（冷泉天皇后）が、この日に薨御遊ばされたので、かの御所ではさぞ悲しんでいらせられるであらう。何かにつけてこの世の無常が思ひ知られるのであつた。

主上が藤壺に渡らせられると、御局のしつらひはいかにも御立派であつたが、帝は女御の御容子、御もてなしをばまことに、お立派と御覽遊ばされもし又思召されもした。それで中宮の姫宮

(脩子)をもこの様に御養育遊ばしたいと思召された事であらう。他の后・女御の方々は皆年たけとよのはせられて、年よりめいてもいらせられるので、主上はこの藤壺に對しては、皇女を大切に護り育てていらせられる様なお氣持がせさせられるのであつた。年來多くの御方々を御覽になつていらせられたが、この御方程にかはゆく思召された事はなからう。藤壺に渡り給ふ打橋にかゝらせられる時から、何ともいへぬよい香が其處いらに染み薫つて、この藤壺の移り香は、他の方の處のとは違つてゐるやうに思召された。一寸した御櫛の箱や硯の箱に入つてゐる物を始めとし、主上は大相珍らしく思召され、夜が明けると、先づお渡りになつて、御厨子等御覽になつたが、何れも御目の留らぬ物はなかつた。弘高が繪を畫いた雙紙に、行成の君が歌を書かれたのなどは、殊更に趣深く御覽になつた。そして、「あまり面白がつて遊んでゐたら、一向政治を顧みぬ馬鹿者となつてしまふだらう。」などと、仰せられては還御遊ばすのであつた。主上は御容貌といひ、總てに驚くばかり御麗しい方であらせられた。御酒も少し召上つたが、御笛をえもいはぬ程見事にお吹き遊ばされたので、お仕へしてゐる女房達も感に堪へて拜聴するのであつた。女御があまりお打解けにならない御様子なので、主上が「こちら向いて御覽。」と仰せられると、「笛は音だけ聞いているば宜しうございます。見る必要はございません。」と、お聞入れにならないので、主上は、「これ

幼い人よ。それでは七十の翁のいふ事をお聴きなさらぬな。おゝ、恥づかしい。」と、御戯談を仰せられた。御側の女房達は、「あゝ、おめでたい事よ。かゝるおめでたいことを見聞き致すことの出来る私共の宮仕へは誠に仕合せなことでございます。」といつてゐた。何事も並ぶもののないこの女御の御有様ではある。

かくて年が改まると、世間では今年立后の事がある等とお噂申してゐた。それはこの女御の御事であらう。

中宮(定子)は皇子皇女の御世話に追はれさせられて、參内遊ばす事もなかつた。主上には、未だ皇子と御對面の機會のないのを、大相お歎きになつていらせられた。帥殿は都に着かれるや一千日の御齋いはいを續けられ、法師も恥づかしいばかりに行ひ澄ましてをられた。第一皇子をば世界の燈火とばかりに頼み奉つてゐられるであらう。誠にそれも道理な事である。中宮は御參内はなくても、かく第一皇子がおいでになることであるから、安心であると思召すであらう。女院は、藤壺の女御の御事を大殿(道長)からお頼まれになつたので、大切に遊ばして居られた。しかし中宮の御身の上をお心苦しく、お氣の毒に思召して居られた。

この頃藤壺の御方は、八重紅梅を織り出した上着、お召しであつた。それは總て綾であつた。

殿上人達も美しく着飾らぬ者はなく、當世風に華やかな御有様であつた。來月には、この女御が里邸に御退出になるといふので、土御門殿では大掃除をし、又修理など加へてゐた。一日頃には御退出になつたが、主上は大相御淋しげであつた。世間では立后の事でもあるのであらうとお噂申してゐた。御見送りの公卿・殿上人には様々の祿を賜はつた。

主上は御退屈に思召され、この際にどうかして皇子（敦康）に御對面遊ばしたいと思召されたが、萬事にお氣がね遊ばされて、中々仰せ出されなかつた。ところに殿（道長）が、「この頃に一の皇子に御對面遊ばしては。」と奏上したので、主上は大變お喜びになつた。そして女院にこの由を仰せられ、院から度々中宮に御參内ある様にとお勧めがあつたが、御辭退になつておいでになつた。しかしお心籠められた院のお勧めに、中宮も遂に御決心になつて參内遊ばされる事となつた。帥殿等も、「何故早く御參内にならないのです。皇子を御覽遊ばしたら、きつと一入御同情遊ばすでございます。」などと、入内の準備を急がせられた。

二月下旬に御參内になつた。御輿などは仰々しいので、一宮（敦康）のお迎へにと大殿の唐の御車が參つたので、それに中宮も姫宮（脩子）もお乗りになつた。大殿は然るべき人々を御供の數に加へられた。殿の御心遣ひの豫想外の有難さに、世間でも美しい事と評判してゐた。帥殿も、

「自分の心の何と愚かで殿の御心を測り得なかつたのであらう。藤壺の女御の御入内あつてからはよもやと思つてゐたのに、一宮の御迎の有様など見れば誠に類稀な立派な御心である。自分等の及ぶところではない。」と内々申された。

かくて參内遊ばされたが、姫宮が大相お美しうならせられた上に、又今度の皇子の何ともいへず輝かしい御有様を御覽になつて、主上はさぞ御目を拭はせられるであらう。皇女はもう四つ五つばかりにおなりになつたので、大相よく物も仰せられる。好い機會と女院も皇子に御對面になると、主上の御幼顔によく似ておいでになるので、しみじみと見とれておいでになつた。主上も、類なく大切に、打捨て難きものと思召されるのも、誠に道理であつた。日頃お過しになる中大殿も皇子を御覽になつて、抱き上げ參らせられた。そしてこんなにお歩きになる迄一度も御覽にならなかつた、主上の御心を深くお察し申上げられた。主上は、若宮が御笛を御手に取つてお遊びになるのを、大相可愛く思召された。夜晝、中宮とのどやかにお話し遊ばされて、お泣きになつたり、お笑ひになつたりしていらされたが、中宮はいつもの御様子とは違ひ、哀れな事ばかり仰せられた。そして、「今度は參るのも憚られ、氣も進まなかつたのでございますけれど、今一度お目にかゝりたく、又若宮のお行末も不安に思ひましたので、かうして参りましたでございます。」

などと、まことに哀れに仰せられると、主上は、「何故そんな心細い事ばかり仰せられるか。」と仰せられたが、宮は、「やはり何かにつけて心細い事ばかりで。」などと、いつもと違ふ御事ばかり仰せられた。主上は、「あゝ、不吉な事だ。」と仰せられれば、「私の身はどうなつてもかまひませんが、唯御幼少の人達の事が不安で……」などと、宮はしみじみお話しになるのであつた。

かくする中に、三月には藤壺立後の宣旨が下つた。中宮と申上げ、今迄の中宮は皇后宮と申上げる事になつた。間もなく三月下旬に、大饗を行はせられ、又宮中においてになる事になつた。今年御年十三におなりになつたのである。哀れにも、お若く、美しい后であつた。

皇后宮は直ぐにも御退出にならうと遊ばしたが、主上はしきりにもう暫く／＼とお留めになつた。二月においてになつたのだが、その月一日頃にお里であつたものが、三月の二十日過ぎてもないので、大相怪しく思召され、又もや御懐妊ではないかと心細く思召された。主上もどうしたのであらうとお氣遣はしげに仰せられたが、中宮は、「假令妊娠でも嬉しい事ではございません。今年は何年に當つて居りますし、宿曜師等も心細い事ばかり申して居りますから、なほこそ心配でございます。」等と、お話しになつていらせられた。

三月下旬に御退出になる時も、哀れな悲しい事などお話し遊ばされて、大相お泣きになつた。

里邸にお歸りになつてからは、本當に御懐妊かなど、お心細い事のみ思ひ續けていらせられた。

「それも不吉な事である、もう思ふまい、」と思ひ直させられるけれど、やはり、お物思ひはつるばかりであつた。そして御食事も少しも召上らなくなり、夜晝涙に溺れていらせられたので、帥殿も、中納言殿も、大相心配せられた。唯御祈禱の事ばかりを急がせられたが、世に少し名を知られた僧達は、このあたりに親しくなる事を煩しく思つて、お召しになつても、色々故障を申したて、容易に參らなかつた。一向名の知れてない僧達は、呼べば果報と思ふであらうが、効驗もない事であるし、かやうに思ふ様にお祈りも出来ない事を、殿達は残念に思つて居られた。賀茂祭等の騒ぎも、よそ事に思つてをられるのも哀れであつた。僧都の君（隆圓）清昭阿闍梨だけが、夜もすがらの護持に侍つてゐた。皇后は、宮達のお世話をなさりつつ、いつまでも生き長らへる命ではないと、「先づ知るもの」の涙にばかり溺れていらせられたのも哀れな事である。

中宮（彰子）は四月下旬に入内遊ばされた。その時の盛儀は思ひやられるであらう。御輿の有様を始めとし、總て新たに調へさせられた。御裳をつけ、御髪をお上げになつて、御輿にお乗りになる時の御有様は、自から後の品位が具はらせられる様に思はれた。かくお若くていらせられる時は、かはゆく、美しくお見えになるのは誰しもさうであるが、宮はその上に氣高きさへ具へて

いらせられた。今度の御局の御裝飾も、大床子、御几帳の前の獅子、狛犬等は后宮の御座所としては常の事であるが、それにしてもやはり目を留められた。若い女房達は誠にめでたい事と見られてゐた。火炬屋は、土御門殿の前にあつた時も繪に描いた様であつたが、この御前では又少し様子が變つた様な氣がするの、見た目の違ひなのであらう。前の入内の時は女房の唐衣も總て一樣であつたが、今度は身分々々によつてそれ／＼模様が違ふのも、悪い方に氣の毒な氣がした。前の時は目も引かなかつたが、今度は織物の文等が鮮かに目に立つのはめでたく見えた。人品等は悪くない人で、非常に手のこんだ唐衣を着てゐても、無文なのは身分の低い物とて一向榮えなかつた。女官達の人をないがしろに振舞つてゐるのも、却て見苦しくはなかつた。

主上渡御せられてこれを御覽になり、「以前は氣安い遊び相手と思つてゐたが、今度見ると、大相氣高い様子なので、尊さが多くなつて、無遠慮にはあしらひにくくなつた。始めて見た時に較べると大相大人びられたものだ。かりそめなことでもしたら、勘當でも受けさうだ。」と仰せられたので、お側の人々も忍びやかに笑ひ合つた。

はかなく過ぎて五月五日にもなると、人々の菖蒲、櫻の唐衣、上着等も時節にかなつて趣深かつた。御几帳にも菖蒲の三重がさねの薄物をかけさせられた。上の方を見れば、御簾の縁も大相

青みがかつてゐる上に、軒にかけたあやめも隙間なく青く葺かれて、誠に趣深い有様であつた。御

藥玉、菖蒲の御輿等を持つて來たのも珍らしくて、若い女房達は興じてゐた。

主上は承香殿（元子）の御事を人知れず戀ひしく思召していらせられたが、殊更の御使等は思ひもかけず、さりとて他に遣はさるべき人もないので、始めから恩顧をかけて置かれた右近の内侍に仰せになつて御文を秘かに通はせておいでになつた。この事が何時か洩れて來たので、大殿は別に何とも仰せられないのに、内侍はすっかり恐懼して、宮中へも參らなくなつてしまつた。殿は、「右近の内侍がこの頃參内しないのはをかきな事だ。自分に逢ふのがいやで參らないのだから。」と、戯言の様に言はれたが、人々は、「あんな風には仰せられるが、實際は無禮な事と思召すのだらう。」といつてゐた。

119
皇后宮（定子）は心細く御物思ひに耽つてばかりいらせられた。御妹の四の御方（御匣殿）に皇子の御後見をしつかり頼むと、泣きながら仰せられると、御匣殿も、「縁起の悪い事を。」と仰せられて、お泣きになつた。かくて月日ははかなく過ぎていつたが、主上は日増しに皇后宮の御事を戀ひしく思召され、懇なる御便りが始終あつた。皇子皇女の美しく御成長遊ばす様は譬へ様もなかつた。

七月七日に、中宮から院への御便りに

暮をまつ雲るのほどもおぼつかなふみ見まほしきかささぎのはし
女院からの御返事は

かささぎの橋のたえまは雲るにてゆきあひの空を猶ぞ羨む
月日の過ぎてゆくにつれて、皇后宮は一入御物思ひに沈ませられた。

鳥邊野

かくて八月頃になると、皇后宮(定子)には何かにつけてお心細く思召され、明暮御涙に濡れて
いらせられた。「萩の上風、萩の下露」も、一入御感深く聞かせられ、昔の事が一入戀ひしく思召
されて、御物思ひに耽つておいでになつた。女院(詮子)からは、度々お手紙を参らせられた。
主上も御懷妊の事を御心配遊ばされて、内藏寮から様々の物を奉らせられた。今年は厄年に當る
ので、その御慎しみをも思召して、御祈禱等も盛んには行はせられなかつた。御修法の壇も二壇
だけ設けられ、然るべき御讀經等はあつたが、僧達も權勢ある方々のを闕かさず勤めようと思ふ
ので、この宮にはつまらぬ代僧ばかり来て、はかしく讀經もせず、唯居眠りばかりしてゐる
様であつた。それにつけても后は、昔の時めき給うた時代に御懷妊遊ばしたら、如何に花々しか
つたであらうなどと思召されるのであつた。今は唯念佛を始終聞いてゐたいと思召しても、この

僧達のこの宮には落着かないのも、御腹だたく、却て罪障をお作りになる様なものと諦めさせられて、唯宮司等のするまゝに任せておいでになつた。

帥殿、中納言殿などの参られる時だけは御心を慰めらるれど、唯御涙ばかりこぼれるので、いよ／＼お心細い事ばかりお考へになつて、姫宮(脩子)、一宮(敦康)の御世話だけに御心をまぎらせておいでになつた。夜の御護持の僧としては、御弟の僧都の君(隆圓)が仕へられた。唯この御兄弟達だけをたよりに遊ばして、もしこの方々がいらせられなかつたら、どんなにお心細い事であらうと思召された。

東宮には、宣耀殿の女御(娥子)に多くの皇子達もおいでになつて、水も漏らさぬ御仲なので、淑景舎の召される事はめつたになかつた。

宮中では、五節、賀茂の臨時の祭等がうち續き、華やかな事であつた。それにつけても、昔この宮の榮え給うた時を忘れぬ公卿達は参つて、女房達に昔の思ひ出を語られ、五節の有様等が話に出ると、清少納言等が仲間に入つて、未熟な若輩には立勝つて、博識を得意とする様子を見捨て難くて、いつも二三人位は連れ立つて参つた。

皇后宮の御出産もこの月に當らせられた。御氣分も勝れさせられず、清昭法橋が常に参つて、

御立願、御受戒の事等があり、哀れな事のみ多かつた。又帥殿は御産の御支度の白い御調度等を急がしく調へてゐられた。間もなく宮中から持つて参りませうといふ人もあつたが、此處でも御準備なくてよいわけのものでもないので急がせられた。女房達にも白い衣を賜はつて用意させられた。宮御一人はその御支度に紛れ給ふ事もなく、何となく字などお書きになるにも、物哀れな事ばかりお書きつけ遊ばされた。帥殿はそのまゝ行ひすましてをらるれば、法師にも劣らぬ御精進ぶりであるのに、今は皇后宮の事のみ夢中になつてゐられた。中納言殿もお歸りにならず、つとこの宮にお泊りになつて居られた。若宮、姫宮の誠にお美しい御有様を御覽になるにつけて、この宮方の世になる迄生きながらへられるかどうかは分らぬが、后宮だけはその時まで必ず御長命あらせられる様にと考へられては一入宮方を大事にお思ひになるのも道理であつた。

その中に十二月になつた。宮は御心地惱ましく思召され、今日か／＼とお待ち受遊ばされた。今年は厄年に當らせられるので、どうかと日頃御心配になつていらせられた。いよ／＼御出産の日は、晝頃から御様子が大相御苦しげなので、御兄弟達はさてはと大騒ぎを始められた。御安産の御祓、御讀經等絶え間なく、効驗あらたかな僧達も召集められた。御物怪等の姦しい中に、長保二年十二月十五日の夜になつた。宮中からも、まだか／＼と御使がしきりに往復してゐた。さうかうし

てゐる中に、いよく御誕生あらせられたが、皇女であらせられたのは、口惜しい事であつた。それにしても御安産をこの上もなくお喜びになつた。御産後の事が御無事に済ませられる様にと、皆々額を地につけて神佛に祈り、諸寺には誦經の料をお遣はしになつたりした。宮は御湯など差上げて一向召上らないので、人々が心配してゐる中に、帥殿が燈火を近く寄せて御顔を見奉られると、たゞならぬ御様子であつた。あはてて御體を探られたが、そのまゝ冷たくなつておしまひになつた。召集められた僧達もうろくしてしきりに經文を誦し、宮の内外を問はず、一入心をこめて祈つたが、何のかひもなく薨御あらせられた。帥殿は御遺骸を抱き奉りて聲を惜しまず泣かれた。しかしさうしてばかりもられないので、若宮(嬖子)を、お離し申上げ、御遺骸をそつとお寢かし申上げて、「日頃、大相お心細げの御様子なのでどうかと御案じ申上げてゐるが、こんな事におなりにならうとは思ひもかけなかつた。誠に長生をするのはつらい事だ。」と申され、「どうか御供をしてゆきたい」とばかり、兄弟共に泣かれた。姫君(脩子)・若宮(敦康)を他所にお移し申上げるにつけても、一入哀れをおぼえた。

主上も聞召して、「あゝ、どんなにか物思ひに沈んでゐられたことであらう。誠に心細げな、はかない御様子であつたが。」と、悲しく思召された。殊にまだ幼い宮達の上を思ひやらせられて、

盡きせずお歎き遊ばされた。女院も悲歎にくわさせられたが、甲斐ない事である。女院はかねてこの度お産れになるみ子は、皇子でも皇女でも御自分の御手許にお引取りにならうと思召していらせられたので、早速中將の命婦をお遣はしになつた。命婦は御乳母を拜命して里邸に下つて、宮をお迎へ申した。女院は、「正月元日が過ぎてからと思つてゐるが……。こんなに急にしなければならぬ事になつてしまつた。よくよく、眞心をこめて仕へてくれよ。」と仰せられ、装束の料等を賜はつた。命婦が宮に参ると、帥殿は對面されて、色々事細かに話をしては泣かれた。命婦は宮をお抱き申して退出したが、まだ何もお分りにならぬ御様子がお可愛相で、涙もとゞめ難かつた。しかし不吉を忌んで堪へ忍ぶのも苦しかつた。それからはこの命婦が萬事お世話申上げて居た。主上は中宮(彰子)の御方に渡らせ給ふ事もなく、又お召しになる事があつても、中宮は御遠慮遊ばして、お上りにならなかつた。

后宮が御生前御書き遊ばして、御帳の帷の紐に結びつけてお置きになつた物を、帥殿始め其他の方々が取出して見られると、「此の度こそはこそ世の最後の旅でございます。亡き後の葬式の事は、」などお書きつけになつてゐた。主上が御覽になる時もあらうと思召してゐた様に拜察されて、

夜もすがらちぎりしことを忘れずば戀ひん涙のいろぞかなしき

又、

知る人もなきわかれ路に今はとて心細くも急ぎたつかな

又、

けぶりとも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとながめよ

等、哀れな事が多くお書きつけになつてゐた。この御歌によれば、御火葬でなくと思召されたのであらうとて、帥殿はその準備を急がれた。

鳥邊野の南の方二町ばかりの處に、殯殿を造らせられ、まわりに築土を築いて、此處に安置し申さうとした。皇后宮といふいひか厳しきによつて、何事も自然嚴重に行はせられた。かうした事をお痛はしくも宮々はまだ何ともお分りにならぬ御様子であつた。皇后宮は今年、御年二十五にならせられたのである。

愈々御葬送の夜になると、御遺骸は黄金造りの絲毛の車にお載せ申し、帥殿を始めとして、公卿殿上人等皆御供に加はつた。この夜は、雪が激しく降つて、殯殿も埋まつてしまつた。お着きになつて、その雪を拂はせられ、内部の御裝飾其他の準備をなされて、次に御車を昇ぎおろさせて、そのまゝに安置し申された。今は御退出にならうとして、さすがに御兄弟、明順、道順等の

人々も、大相泣かれた。しばしの間、雪に殯殿も見えなくなつてしまつたので、帥殿は、

誰もみな消えのこるべき身ならねどゆきかくれぬる君ぞかなしき

主上は、今夜こそ御葬送の夜だと思召されて、夜もすがら起きさせ給ひ、后の事を思召されていらせられたが、折からの寒さに御袖の涙もそのまゝ氷となつてゐた。世の常の火葬ならば、烟に霞む野邊に忍ばれる事も出来るが、これではみ心の慰む道もなく思召されて、

野邊までも心ばかりは通へどもわがみゆきとも知らずやあるらん

など思召されて、その夜を明かし給うた。

明方に人々は歸つて來られた。宮ではお仕へ申した人々がそれを待ち迎へた様子の哀れさ、誠にさもあるべき事と見えた。殯殿の上にしきりに雪の降つてゐる光景を、振返り見つゝ京の方へ歸つていらせられた時の御心地、誠に悲しい事であつた。

かくて春の來た事も知られず、悲しみの中に月日を過しておいでになつたが、世間では馬車の音も繁く、前を追ふ聲ものどかに美しく思はれ、同じ世の中の事とも思はれなかつた。

四十九日も過ぎたので、女院(詮子)は今日明日にも今宮(嬬子)を迎へ取り遊ばされようと、三條院(東三條殿)にお出でになつた。主上も御法事が終つたならば、姫宮・一宮を宮中にお迎

へにならうと思召していらせられた。さうなると帥殿達は、容易にお逢ひになれなくならうと、そのことを主上は察し給うて氣の毒に思召された。女院は吉日を選んで、若宮をお迎へ遊ばされた。帥殿、中納言殿はお送りにと思はれたが、未だ御忌の期も過ぎてゐないので差控へられた。お迎へには、藤三位、然るべき女房、院方の殿上人等多勢連れて出られた。皇后宮の御方では、さぞかし盡きせずお歎きになつた事であらう。お連れ申すと、女院はお待ちかねでお迎へになつた。お産れになつてまだ三十餘日にしかならないのに、大相お美しく、圓々とお肥りになつていらせられた。院はお抱き上げになつて、おかあいゝと御覽になつた。かく思ひがけなくも、院の御許でお養はれになるやうになつた御身の上は、思ひの外の哀れなことに申上げるもおろかである。

皇后宮では、御法事を急がせられるにつけて、帥殿は涙のとゞまる時もなかつた。せめて一宮、姫宮がおいで遊ばしたらば、さぞかし御心も慰むであらうと思はれる事であらう。

この頃、大殿（道長）は相方の君の家においでになつたが、重い病氣にかゝられて、世の騒ぎとなつた。御物怪の激しさは勿論、御自身も大相苦しく思はれたので、物狂ほしい程に世にありとあらゆる手段をお盡しになつた。中宮も御里邸にお出でになつたりして、大變騒がしかつた。女

院も一通りならず御心配であつた。多くの御祈願の効驗か、又佛神の加護によつてか、御所を替へさせられたら御病氣も御平癒にならうと、陰陽師共が申上げたので、適當な場所を卜はせられると、尙侍のお住みになつてゐた土御門殿が良いといふので、其處へ移られた。夏の事なので、健康な者でも堪へ難いのに、まして如何かと案じられたが、長々患はれて、漸くお癒りになつた。意外の事と誰もく喜び合はれた。世にもめでたき事である。

今年に女院（詮子）の四十の御賀を、朝廷にて行はせられる筈であつたので、春からその御準備をなさせられた。始めは春に行はせられる筈であつたが、殿（道長）の御病氣によつて、七月にといふことにお定めになつた。院も又御八講を遊ばさうと思召し、これを大事と萬の準備を急いでいらせられた。しかし七月は、疫病の流行等で世の中が騒がしく、そのまゝになつてしまつた。九月は例の如く石山詣いしやまきなので、色々とかちあひ物騒がしく思召して、まだ石山詣の後とも先とも定めかねていらせられた。

若宮は、日増しにお美しくおなりになり、這ひ歩かせられて、御念誦ねんずのお邪魔をなさるので、院は困つたものと思召しながらも、又おかはゆくてたまらなく思召して、宮中にお連れになると主上も大相お愛がりになり、お抱きになつてお歩き遊ばす中に、すっかりお慣れになつてしま

つて、主上が他所へおいで遊ばすと、お後をお慕ひになつてお泣きになるので、一入可愛く思召された。院は、「こんな世捨人の御身に、今更こんな子供を預けられて、自然この世に執着される事よ。」と仰せられると、主上は、「悪い事がございますか。御退屈が紛れまするから。」と仰せられながら、御涙を浮ばせられるのを、院も忝き御ことと御覽になるのであつた。

かくて院は宮中を御退出になつた。院の御所では、九月は石山御参詣といふので、女房達は支度に大童であつた。院は、佛前の御帳の帷、石山の僧に賜ふ法服等の用意を急がせながらも、不思議に心細い事ばかり思召していらせられた。その御様子を拜して、御側の人々も、忌々しい事まで考へて歎いてゐた。

さて京を御出立になつた。粟田口、關山のあたり、わざとならぬ木隠れの鹿の聲など、折から心細う聞かれた。何かにつけて、感深くおぼされて

あまたたびゆきあふ坂の關水に今はかぎりのかげぞかなしき
と仰せられると、御車に扈從した宣旨の君が

年を経て行きあふ坂のしるしありて千年の影をせきもとめなん
と申された。

さてお着きになつて、御堂に上つて参拜遊ばすと、色々哀れな事がお胸に浮んで、長年参り慣れさせられたこの御前も、これが最後かと思召されるのであつた。例の御祈、御修法などは行はせられず、滅罪生善の爲とて、護摩を行はせられた。後の世の菩提をのみ祈らせられるので、御寺の僧達も、何と思召してかうしたお祈を遊ばすのかと、不思議に思ひ、恐れもした。院は、「何うしても不思議な事があらう。これこそ最後の参詣で、かねてから志した佛への最後の御奉仕である。」と仰せられて、綾織物の御帳の帷子、白銀の鉢等を御寄進あり、又別當を始めとして僧共に、残りなく、法服を配らせられた。又同じく僧供養をせさせられ、御寺の封戸もお増しになり。御誦經等も、格別に行はせられた。又萬燈會等も行はせられてから、御退出あらせられる時も、大相お泣きになつたので、お側の人々も、悲しき事と見奉つた。御寺の僧達は、院の御萬歳を祈り奉つた。

石山寺から還御あつて後、程なく御八講を始めさせられた。萬事にいつもの御八講よりは盛大であつた有様は思ひやられよう。講師達は、現世來世に就いての説教を、尊くなさられた。殿も院のたゞならぬ御様子を御覽になつて、所々の山々、寺々で御祈をしきりに行はせられた。

十月に御賀を、土御門殿で行はせられた。行幸もあり、大相おめでたい事であつた。御屏風の

歌など名家の詠まれたものも多いが、いつもと同じ事であるから、こゝには書かないでおく。中で、八月十五夜に、妻戸の許で男女の物語してゐる繪に、辨の輔尹が

あまの原やどしちかくは見えねどもすみかよはせる秋の夜の月

神樂をしてゐる繪に、兼澄が、

かみ山にとるさかき葉のもとするに群れ居ていのる君がよろづ代

などよんだ。

舞樂の舞人にはこの御一家の公達が勤められた。終る頃に、殿の子息二人が、童舞をせられた。高松殿（明子）の御腹のいは君（頼宗）は納蘇利を、北の方の御腹のたづ君（頼通）は陵王を舞はれた。

土御門殿のお庭の景色は、目も遙かに廣々としてゐて、假山の紅葉は數限りもなく、中島の松にかゝつた蔦の色は、紅、赤の濃淡、青、黄など様々に光り輝いて、まるで裂いた帛きれの様に見えるのも面白かつた、それが池の面に紅葉の錦の映つて鮮かに輝いてゐる中を、色々の錦の中から現れて來た様な船の奏する樂を聞くと、身慄ひする程に心が躍つた。その面白さ、口でも、筆でも盡す事は出來ない。この世の出來る限りの事は、し盡くされた感があつた。

中宮は西の對においでになり、院は寢殿においでになつたので、主上も寢殿の東の南面みなみおもての間におはしました。北の方（倫子）は東の對においでになり、公卿達は渡殿に着座された。諸大夫、殿上人達はあげばりに着かれた。院方の女房達は、寢殿の西南の渡殿に並ばれた。御簾の下から女房達の衣のはみ出てる光景は、大相美しかつた。

總て終つて、主上は還御遊ばされたが、主上の賜り物、公卿への祿、殿上人へのかづけ物等、例の通り漏るゝところなかつた。この日もはかなく暮れて、翌日、院（詮子）は三條院に還らせられた。これまでの御賀の事などはよく存じないが、この度のは誠に立派な事であつた。入道殿（兼家）の六十の賀を、女院がまだ後の宮と申上げてゐた時行はれたが、これ程迄ではあるまいと思ひになつた。子息達の美しさを、誰もく涙を流して賞め稱へた。

十一月になると、五節は申すまでもなく、神事なども多いので、女院はこの月中に宮中へおいでになつた。主上はお喜び限りなく、早速に渡らせられた。若宮は大相お美しいので、他の事はさておいて御愛撫遊ばされるので、院も御戲談など仰せられた。やがて御物語のつひでに、院は、「この頃不思議に心細い氣が致しますので、どうした事になるのかと心配でございます。今は命も惜しくはございませんけれど、主上の御行末のお榮えをもう少し拜見してゆきたいと存じます事

だけが、心残りでございます。」などと仰せられて、ひどくお泣きになった。主上も心細く思召して、「もしもの事でもあつたらば、片時もこの世に残らうとは思ひません。御父みかどは、見知り奉らぬではございませんが、まだ幼い時でございましたので、御別れ申上げても、今日迄かうして長らへて参りましたが、御母上様には暫くの間でも御別れ申上げては。」と仰せられて、ひどくお泣き遊ばしたので、院は、「今直ぐにといふことでもございますまい。唯いつもに似ず心細い氣が致します。」とだけ仰せられて、後は若宮をおあやしになつていらせられた。

主上は御心も鬱々と思召されたので、直ぐに中宮(彰子)の御方に渡らせられた。こちらにいらせらるれば直ぐに他の事はお忘れ遊ばした様にならせられるので、渡らせられたかひある事に思召された。長閑に四方八方の御物語遊ばし、「院(詮子)の御方に参つたら、大相心細げな事を仰せられたので、すつかり憂鬱になつた。」など、しみじみ仰せられた。中宮は御恥づかしげに聞いていらせられたが、院は殿(道長)が何事につけても、この宮の事を前から格別に氣をつけ、目をかけてゐられるので、どうした事であらうと御胸騒ぎしていらせられた。主上は、悲しい事も、面白い事も色々仰せられてから、「日暮れたら早く上られよ。明日明後日は物忌ものいみで、こちらには参られまい。」と仰せられて、お歸り遊ばされた。誠に微笑ましくも、お睦まじき御仲であらせられる。

この月下旬に、院は宮中を出御せられた。主上はいつもよりもお名残を惜しませられて、夜の更ける迄、院の御方においてになるので、院が、「もうお歸り遊ばせ。夜も更けましてございます。私も退出致しますから。」と仰せ上げられたので、主上は澁々とお歸り遊ばされた。

十一月になると、神事のしきりに行はれる頃で、世の中も大相騒がしくなつていつた。十二月になれば、公私共に正月の支度で忙がしかつた。

その中に、女院は發熱遊ばして、御惱みになつた。殿も御心配になつて、色々迷うて居られた。女院はかりその事と思召していらせられたが、かう長びくにつれて、どうした事かと心細く思召された。主上も、院が常になく心細い事を仰せられてゐたので、もしもの事を考へさせられて、御食事も召上らずに、御思に沈んでいらせられるので、御乳母達も大相氣遣はしげであつた。中宮はまだごくお若いいらせられるが、この御事を色々御心配遊ばしておいでになつた。殿は、「今は醫師にお見せになる方が宜しうございます。このまゝにおいては、恐るべき事でございます。と度々申上げたが、院は「醫師に療治させる位ならば、生きてゐたとてかひもない。」と、お心強く仰せられて、お見せにならなかつた。殿が御容態を醫師に話されると、「すばくでございます。せう。」といつて、その方の療治をされたが、その後は重くなる御様子も見えなかつた。

日頃を経る中に、膿などが出たので、誰もほつと安心したが、唯御物怪がひどかつたので、御修法も數を盡くし、ありとあらゆる手段を、宮中、殿、院と三方に分れて行はせられた。主上は一日も早く院に行幸遊ばされたく思召されたが、日柄などを選ばせられる中に、日數は過ぎに過ぎて行つた。御物怪共を四五人の者にのり移らせて、僧達を御祈りをしきりに行つてゐるが、この三條院の角振神の祟りといふ様な事も出来てきて、中々調伏されなかつた。今は御住居をかへてさせられるがよいといふ事になつて、御占に合ふ、惟仲の帥中納言の持ち家にお渡りになる事になり、すぐその日に行幸あらせられるといふ事であつた。

女院はかやうに御苦しげにましますのに、若宮は、側で騒いで何といたしても御懷をお離れにならず、まつはつていらせられるのを、院は御乳母に、「抱き申せ。」とも仰せられず、つくづくと若宮を見守らせ給ふ御心持を拜察して、御側近い僧達も、涙を流して見奉つた。女院は長年の間、人々を憐み給ひ、御情をかけさせられたので、その御恩を蒙つた人々は、この事を心配するより他はなかつた。いづれも神佛に大願を立て、涙を拭ひながら、伺候してゐた。折から年の暮も近づいて、世の中も何かとあはたしい頃なのに、かやうに御恢復にならない事は、公私の安からぬ御歎きであつた。

今日行幸遊ばされるといふので、何時か／＼とお待ち受け遊ばしてゐる中にお午頃にお着きになつた。主上は御輿よりお下りになる間も遅しと、早速御對面遊ばした。院は大相御苦しげの御様子であらせられたが、若宮が御懷をお離れにならず、まつはりついていらせられるのを、主上は御心苦しく御覽遊ばされて、中將の乳母をお呼びになり、「これをお抱き申せよ。」と仰せられたが、若宮はいやがつて、御懷の中にお入りになつてしまはれた。主上は、院の別人の如くにおやつれにならせられたのを御覽になつて、御涙も止まらぬ程に悲しく思召され、今迄御見舞も遊ばさず、過ぎ給うた事を口惜しく思召された。院も何とも仰せられず、唯つくづくと主上を御覽遊ばされて、お泣きになつたが、御涙はお出にならなかつた。主上は、「これは忌まはしい事だ。」と、思召されるにつけて、一入御涙も止めかねさせられた。年末の行來とはすつかり御様子も變つて、忌ま／＼しい事ばかりであつた。多くの女房達も、涙に溺れてゐた。殿も御心ははつきり持つてゐられたが、何事につけても御直衣の袖も濕りがちで、色々指圖をして居られた。

やがて今宵他へお移りになるといふ事になつたので、そちらの御殿の御裝飾の事等も、總て殿一人で、泣きながらあれこれと指圖して居られた。行幸に供奉の公卿、殿上人、其の他多勢の人人も、どうなる事かと悲歎にくれて居られた。主上はさらに御聲も惜しませられず、子供の様に

しやくりあげてお泣きになつた。日もはかなく暮れかゝつたので、殿が「もはや還御遊ばします様。夜分の行幸では、夜も大分更けませう。」と、大相おせきたて申上げられると、主上は、「嗚呼、罪深く、心憂きものは、かゝる身である事よ。かゝる御有様を見捨て奉る事の悲しさよ。卑しい者でさへ、かういふ折にかういふ事はしないであらう。せめてお移りになる處まででも御供したい。」と仰せられたが、殿は「さやうあるべき事ではございません。」と奏上し、速く還御遊ばすやうお勧め申上げられた。院は、何とも仰せられなかつたが、お心ゆくまでいらせられない事を悲しく思召される様であつた。そして主上の御手をお取り遊ばし、龍顔近く御顔を近づけさせられてお泣きになる御様子に、多くの内外に侍した人々は聲を擧げて泣いた。老熟した公卿達は、「やかましい。」と制しながら、自らも堪へきれずに、顔をしかめてゐた。

主上は、「この若宮を何處へ渡し奉るか。」と仰せられたが、中將の命婦が、「それは御兄弟の宮達の處へと、殿（道長）は申して居られます。」と奏すると、主上は、「誠にそれがよからう。」と宣はせられた。その中に夜になつたので、御輿を寄せて、度々奏上したので、御心ならず、還御遊ばされた。親子の情愛を御存じなければともかく、皇位にましくても、その點は普通の人と御かはりない事であらせられるから、御悲しみも道理である。御輿に御乗り遊ばす時も、深く思ひに

沈ませられたが、御顔を隠していらせられた御袖の間から、御涙が流れ落ちてゐた。殿は還御の供奉をなされたが、御乳母達、女房達に、御前に伺候してゐる様に命じおかれた。供奉の間も、万一のこともあらせられぬかと、心も空なる御様子であつた。還御になつても、主上は何も仰せられず、そのまゝ御寢所に入らせられた。そして他の事はなく、唯御使のみしば／＼御遣はしになつた。殿は歸られてから、若宮を、御乳母や其他の人々をつけて、姫宮のいらせられる處へ御送り申された。

女院渡御の御様は、御車から牛を離し、御寢のまま、殿や彈正宮が昇き戴せ申上げられ、そのみ車には殿が御同乗申上げられた。御着きになつた時も同様にして御車からおろし申上げられた。帥宮・彈正宮は今迄も夜晝御看病申上げて居られたが、そのまゝ續けさせられた。この宮達は御甥に當らせられるので、かねてから院が主上に次いでお慈みになつた、その御志を忘れられず、かうして御涙ながらに御看病遊ばされたのである。御居所をお替へになつたならばと万一を頼ませられたかひもなく、二三日たつて、終に薨去遊ばされた。殿の御悲歎警へ様もない。主上も聞召されては、日頃さへ消え入らせられるばかりであつたので、一入御歎きであつて、今は御湯をさへ召上らせられなくなつてしまつた。誠に御道理な御有様なので、御慰め申上げやうもなかつ

た。これは長保三年閏十二月廿二日の事である。大相寒い時節で、雪等も深く積り、残りの日數も少くなつて、曆の軸もあらはになつた。それも哀れを添ふるのであつた。

三日たつて、鳥邊野で御葬送が行はれた。折から雪が激しく降つてゐたが、殿を始めとして、總ての公卿、殿上人達は、御供の列に加はらぬ者もなかつた。御葬儀の嚴肅な事は申すもおろかである。總て殿が心を入れて指圖された上に、主上の限りなき御志を添へさせられた事であるから、並々の事でなかつた事は當然である。

夜もすがら御火葬を行はせられて、曉に皆歸られた。雪の激しく降るにつけて、御在世の折の行啓の事を思ひ出しては、皆袖を濡らされた。殿は御骨を奉じて、木幡に葬り奉られて、朝日のさし出づる頃に歸られた。そして程なく喪服に着換へられた。主上も御愼しみの日々を過させ給うた。かくして天下は諒闇となつた。

年も明けた。元旦の朝賀以下の御儀はとゞめられた。忌まはしいなどといふのはまだよい時のことで、かねて女院の御恩顧を蒙つた人達は、皆闇路をたどる思ひがしてゐた。御念佛は勿論、不斷の御讀經その他然るべき事など、皆御一周忌迄は行はせられる事となつた。やがて、主上は御手づから御經を御書き遊ばされた。正月七日は子の日に當つたが、小松引き事も行はれないの

で、船岡の春の景色もつまらぬやうに思はれた。左衛門督公任の君は院の臺盤所に左の歌を送られた。

誰が爲に松をも引かん鶯の初音かひなき今日にもあるかな

人々はこれを御覽になつたが、誰も返歌する人はなかつた。四十九日の御忌の間も、色々痛ましい事が多かつた。

四十九日の御法事は、花山の慈徳寺で二月中旬に行はせられた。その時の有様は思ひやられよう。主上の御手づから書かせられた御經なども添へて、御供養があつた。院源僧都が講師をつとめられたが、尊い事であつた。

その年の賀茂祭は華やかに行はれさうもなかつたが、朝廷の公事であるから止めらるべき事でもなかつた。祭の使に立つ近衛司は見物であつたであらうが、それも立たなくなつたりして、大相寂しげな事であつた。

宣耀殿の女御(娥子)は一宮を御覽にならない事が久しかつたが、五六月頃に、御病氣が重らせられ、御危篤とあつて、東宮は大相御心配になつた。しかし昨今は御回復に向はせられた御様子である。このあまりにも慌しい世の中に、又もや突然淑景舎の女御薨去の事が聞えてきた。八

月の二十日頃であつた。人々は、「これは一體どうした事か。そんな事は虚であらう。日頃、御病氣といふ事も承らなかつたのに。」と不審に思つてゐたが、御鼻口から出血遊ばされて、俄におかぐれになつたといふ事であつた。無常は世の常であるが、これはまた世に珍しくも、悲しい事である。世人は口さがないものであるから、宣耀殿の重い御病氣がお癒りになつて、淑景舎がかく思ひもかけぬ事におなりになつたのを、「宣耀殿がたゞ事でない事をなさつたのだ。」などと、聞き苦しいこと迄お噂申してゐた。しかし、御自らそんな事を遊ばさう筈はない。「少納言の乳母が恐しい。」などと、人々は申してゐた様でもあつた。その事は如何であらうとも、こんなにお若くしてお隠れになつた事を、御兄の帥殿(伊周)中納言殿(隆家)は、非常に歎かれた。東宮は、格別深い御志あらせられたのではなかつたが、皇位におつきになつたら、華やかにして上げたいと、かねて思召していらせられたので、残り多く、又戀ひしくも思召され、「御衣の重なり具合、お袖口などの様子を、他の人を見るにつけ思ひ出す。」など仰せられた。世を憚り給うて、御兄弟達の謁見は御ゆるしになることは容易でなかつたが、御志は宣耀殿に劣りはしなかつたので、返すくも口惜しいと思召された。

は つ 花

殿(道長)の若君たづ君(頼通)は、今年十二歳ばかりになられたので、この冬枇杷殿で元服の式を擧げられた。加冠の役には閑院宮内大臣(公季)が當られた。其他の公卿・殿上人達も残る者もなく参邸された。贈物、引出物などの立派なことは思ひやられやう。さてその年も暮れて次の年となつた。司召に右近衛少將になられて、二月には春日の使に立たれた。殿はその子息の春日の使に立たれるのは始めてなので、その準備を大相急ぎ立てられた。それも尤なことであつた。若君の様子は總てにかひなく美しいものであつた。何となく肥えて美しいので、殿は限りなきものと御覽ぜられた。

春日の御供には、世に少し名望のある四位五位六位の人々は残りなく加はつた。殿が宮中で御覽になつた上に、又途中までも御車でお見送りになつた御様子は、感深く見受けられた。御出立

になつた翌日雪が大相降つたので、殿は

わか菜摘むかすがの野邊に雪ふれば心づかひをけふさへぞやる

と詠まれた。御かへしに四條の大納言（公任）が、

身をつみておぼつかなきはゆきやまぬ春日の野邊の若菜なりけり

と詠まれたのは、公任卿の子息も御供に参られたからであらう。これを御聞き遊ばされて花山上皇は

我すらにおもひこそやれ春日野の雪間をいかでたづのわくらん

などとお詠みになつた。

次の日には、待遠しく思つてゐた殿の御靈宴が大相立派に催された。近衛の舍人どもが若君を大切に思ひかしづき、早くも長官として仰ぐ様子も亦をかしく見えた。

中納言（隆家）は大殿（道長）の邸へ常に参られ、又大殿の方でも中納言の見えられぬ時は、度々呼びにやられて、憎からぬものに思つてゐられた。そして「この君は悪氣のある人ではない。帥殿（伊周）の才ばしり過ぎたのに引きずられてをられるのだ。」などと思召してゐられた。

東宮では、宣耀殿の御腹に數多の皇子女のあらせられるのも、並々ならぬ前世からの御果報と

見奉られた。又世人は、大殿の尙侍殿（嬉子）は必ず入内されるだらう等と、御噂申してゐた。けれど大殿の御性質は、従來の數多の殿のやうに、他人をおとしめるやうな方ではないから、さういふ機會も自然來るであらうと、強ひて参らせられる御様子は見えなかつた。

中宮の御方には、この頃殿の上（道長の室倫子）の御兄弟で、藏人の辨（時通）と呼ばれた方の大勢の女君の中の、中の君が宮仕へしてをられた。以前に帥殿（伊周）の北の方の御兄弟の明理といふ人を婿としてをられたが、思ひがけないことがあつて離縁されたので宮仕されたのであつた。御容姿も美しく、ふるまひもゆかしくてゐられたので、大殿（道長）の御目にとまられて御話など交されてゐる中に、いつしか深く思はれる様になつた。殿の上も、餘人でもないで、そのまゝにしてをられた。人々は皆、「則理の君は呆れる程目のきかぬ人である。この様な姫君を粗略に思つたりなさつて」などと噂し合つた。この君には大納言の君と名をつけられた。

かくて過す中に、かの御匣殿は御心地常ならず、何となく惱ましげにいらせられた。主上も大相御心配遊ばされて、御内心どうした事かと案じていらせられた。その中に御懷妊四五ヶ月許りになつたので、表向きには奏上されずに、宮中を退出せられた。主上も哀れなこと、思召しておいでになつたが、御容態も大相惱ましげな御様子なので、ひどく御心配になつていらせられた。

帥殿等は、皇子の産れ給うた方が一層おめでたい事と思はれて、しきりに御安産の御祈りなどせられた。御匣殿は御里方にいらせられながら、宮中の御小さい宮達の御ことを不安にも、戀ひしくも思召されるにつけて、御心地一入お苦しげで、起臥もたゞならぬ御様子であつた。帥殿は御自分の許に御迎へ申して、何事にも心をつくして御介抱申上げられたが、そのかひなく俄に御病氣が悪化して、五六日して薨去になつた。御齡は十七八歳であらせられたと思はれる。

この御匣殿は御容姿も御心も大相御美しく、御姉君故皇后（定子）の御有様にも劣らせられず、静かな、奥床しい御方であつた。その上に折角御懷妊になつた御身でお亡くなりになつたので、帥殿、中納言殿が盡きせず思ひ歎かれたのもお氣の毒な事であつた。それにしても世間の噂を恥づかしく思ひ、隠してゐられたが、この様な御不幸につけても世間ではこの殿の事を何かと取沙汰してゐた。主上の人知れずうちしほれていらせられるので、御匣殿への御志の深かつた事を思ふにつけても、帥殿等は口惜しく思はれるのであつた。かくして御葬儀等もはかなく執行はれ、四十九日も過ぎてから、帥殿も、中納言殿も參内され、宮達（御母定子）の御有様を盡きぬ思ひに御覽になつた。一宮（敦康）が御匣殿の御事をとり分け戀ひ慕つていらせられるのも、殊にあはれにかなしく思召された。

その中に寛弘二年となつた。正月の司召には殿（道長）の公達の中、北の方の御腹の弟君（教道能信）、高松殿（明子）の御腹のいは君（頼宗）など皆加冠せられて、それ〴〵相當な官に上られ、少將兵衛佐等になられた様である。春日の使の少將（頼通）は中將になられて、今年の賀茂の祭の使に立たれることゝなつた。殿は一條に棧敷の屋を長々と造られ、檜皮葺、高欄など、大相立派にせられた。この年頃、御禊をはじめとして、殿も北の方も御いでになつて御覽になる例であつたが、今年は特に使の君の御事に世を擧げて準備を急がせられた。さてその日になると皆御棧敷にお出ましになつた。殿は使の君の御出立を御覽になつてから、多くの殿ばらや殿上人を引具して御棧敷に姿を現された。大した家柄でなくても、この使に立たれる公達を持たれた親達は大ききわぎをするのであるから、まして殿が斯様に盛大な準備をなされたのも道理であらう。御供の侍、雑色、小舎人、御馬副まで、總て善美を盡くされた有様は、到底筆紙に述べる事は出来まい。

今年はこの祭の評判が高かつたので、帥宮、花山上皇など、特に御車を仕立てて、御覽遊ばされ、殿の御棧敷の前を幾度も御通りになつた。花山上皇の御車は金漆などにお塗らせになつたもので、御供には大童子として大きく年長な者を四十人、中童子を二十人、召次どもは俗體のまま

で引きつれられた。御車の後には殿上人を引きつれられ、めい／＼様々な装ひで、赤い扇をひらひらさせながら、御棧敷の前を幾度も通らせられる御有様に、例年ならばこんなことをなさらないでもなどと殿も思はれるのであらうが、これも使の君の榮えになることと思はれ、お喜びになつた。公卿達も微笑して見奉つたが、殿は、「やはり上皇は風流なお方でいらせられる。かねて上皇が、この子の使に立つ時には、行列の様子を見物して賞翫してやらうと仰せられたが、その御言葉に違はず、はからずもお出まし下さつたことよ。」と仰せられ、皆も興じて、御噂申し上げた。

準備總て整つて、使の君は何となく小さく、ふくよかに、美しい御様子で通られるのを、殿は餘りの嬉しさに唯涙をしきりにこぼしてをられた。我が子の可愛さには變りない人情とて、外の方々も皆しみ／＼と同感された事であらう。宮方、殿ばら、其の他の家々の幼い娘達に、世間普通のことゝはいひながら、狂人じみて衣物を幾重も着せて、十人廿人、三十人と押し合うて通れば、殿は、「いづくの家の方か」と一々前に召しよせて御尋ねになつた。その宮、かの殿、何の守等と答へるのを、立派なのは面白く見られ、さうでもない者は笑つて見過される御様子も面白く、當世風な華やかな事であつた。

かうして月日は過ぎていつたが、帥殿が無位でをられるのを殿は氣の毒に思はれて、准大臣の

位につけ、御封なども賜はる様になされた。中納言は一年程前から中納言で、兵部卿と申して居た世人はこれを穩當なお處置と噂してゐた。今年の十一月に内裏炎上のことがあつたので、五節も行はれぬことになつた。かう度々の内裏炎上を、主上は御心憂きことゝ思召され、猶この上度重なる様ならば、これこそ何かの前兆で、もあらうから、早く御退位遊ばしたいと思召される様にならせられた。

その中に寛弘三年となつた。その五月には例の三十講を初の十五日間勤められ、後の十日餘りは競馬を催される事になり、土御門殿の馬場屋、埒などを大相立派に準備された。殿は行幸行啓を奏請しようかと思はれたが、この頃は雨が降り續いて、準備も十分出来さうにもなかつたので斷念された。しかし、それでもと花山上皇に、「恐れ入りますけれど、當日の馬の様子など御覽願ひたうございますが、いかゞでいらせられませう」などと申し上げられた。上皇は人の心を拒み給はぬ御性格なので、「この頃の心憂さも晴れさうな氣がする。では當日は必ず。」と仰せられたので、その用意を整へてお待ち申上げられた。「當日は御供に仕へる僧達、殿上人などに祿を與へねばなるまい。又御獻上物には何がよからう。」などとさま／＼に氣を配られた。さて當日ともなれば、今日の臨御を光榮として、様々心を盡して御歡待申上げられた。上皇も大相お喜び遊ばされた様

であつた。競馬が始まると、左右の勝負の亂聲は、聞き苦しい迄賑やかなことであつた。

總て終つて、上皇は還御あらせられた。殿ばらの献上物の數々の中にも、世に珍しい月毛の御馬に、何ともいはれぬ見事な御鞍など置かれたのや、又立派な御車に牛を添へて奉られた。上皇は夜に入つて還御遊ばされたので、殿の方の藏人等が御送り申上げた。上皇は、佛門に入らせられてもなほ俗を離れさせられぬ御惱みが拜されて、畏れ多く見奉られた。この事以來、殿は上皇に大相親しみ奉られるやうであつた。

上皇は皇子方の御事に就いて少からず御心を痛めていらせられたので、第一皇子（昭登親王）第二皇子（清仁親王）をば冷泉天皇の御養子とするやう、度々殿の許へ御消息を以て仰せられた。殿は、この尋常ならぬ御親心を御察し申上げられて、「承知いたしました。後日この由を奏上いたしました。」と御答へ申上げられた。上皇は冷泉天皇の第一皇子で、只今の東宮が第二皇子、故彈正宮が第三皇子、今の帥宮が第四皇子であらせられる。殿は參内して委細奏上し、吉日を以て宣旨を下された。第五皇子、第六皇子と定めさせられて、夫々に御封を賜はせられた。さてこの事を上皇に申上げられると、この上もなくお喜び遊ばして、殿の御使には、あれこれと多くの祿を賜はつた。御使が歸ると、殿は、「さて／＼今日はよい客人となつたことだ。そのやうに澤山の品

品を頂戴して。」などと笑はれた。

内裏も炎上したので、この頃主上は一條院におはし、東宮は枇杷殿にいらせられた。東宮の宣耀殿の女御は、女宮御二方、男宮御四方の御母とならせられた。この頃の齋宮は、式部卿の宮（爲平）のまだお小さい皇女であらせられた。この頃世間に疫病が流行して、人心騒然として、人死にも多かつた。主上は御聖徳も高く、輔佐し奉られる殿の御政治も悪くないが、世が末になつたので、かゝることも起るのであらう。かくて冬になつたが、五節臨時の祭といふこの季の大事も行はれず、寛弘四年となつた。

正月は一日から色々の御儀で忙はしく過ぎていつた。二月になつて殿は御嶽精進を始めようとなされたが、四五月頃よりも秋の方が山はよいと人々が申したので、繰延べて謹慎してをられた。精進の家として仰ぎの中納言といはれた人の家に行かれた。かく殿が引籠つてゐられるので、世間も大變のんびりと、靜かであつた。しかし此の間も政治の事だけは引籠りながらも執行つてをられた。八月に金峯山に行かれた。支度など萬事親しく指圖せられ、心を用ひられたのであるから、その行装、行列の華やかさも推し量られよう。然るべき僧俗競うて御供された。子息達も多く、一族も廣いので、一同不在になられた後、京に事など起りはせぬかと、怖ろしく思はれたが、

事もなくて、一行は無事に着かれた。殿は年來の念願これより他無い様に思はれ、世人も亦これを朝廷の公事のやうに思つてゐた。かくて十二月にもなると、何かと慌しい世間の有様につけても、誰もく年が改まれば又のどかな日が来るであらうと待ち望んでゐる様で、はかない身を知らぬ様なのも哀れであつた。

かくて寛弘五年となれば、一夜の中に峰の霞も立ちかはり、空の様子も行末遙かに、のどかに見えるのである。この頃京極殿では、かんの殿（妍子）と申上げた中姫君がおいでになつた。その方の女房達や、又小姫君（威子）の方の女房などと、それく當世風な華やかさであつた。殿がかんの殿の方にいらして御覽なさると、姫は丁度十四五許りになられて、大相美しい御様子であつた。多くの色の夜衣裳を召して、御髪の紅梅の織物の召しもの、裾にかゝつた有様は、柳の枝が隙間もなく垂れ下つてゐる様で、その長さは御裾から七八寸も餘つて居た。御容貌も美しく、氣高く、愛敬があつて、さながら匂ふ花のやうであつた。しかし餘り美しすぎて、忌はしい様に迄思はれた。若い女房七八人ばかり御仕へしてゐるが、如何にも心地よささう、誇らしげな様子であつた。

又小姫君は九つか十ばかりで、大相美しく、雛のやうな御様子で、あちこち走り歩いてゐられ

る御様子は、譬へ様もなく、紅梅の織物の御衣に萌黄の小桂こきを召してをられて、御顔の色は丁度雁の子の羽立のやうであつたが、それは唯白いばかりであるのに、この姫は匂ふやうに輝かしく見えさせられた。小納言の乳母がお可愛くてたまらないやうに大事に御仕へして居るのも、傍目には羨ましく感ぜられた。下の姫君は二つか三つ位で、殿が戴餅いたゞきもちをさせようとなされたが、「御装束がまだ調べてございせんから、もう暫くお待ち下さいませ。」と傍からおとめした。殿はこのやうに美しい姫君達の御様子に、直ぐにも歸らうとはなさらなかつた。宮中からは新年の拜賀が遅いのでしきりに御使があつた。又殿内には多くの公卿・殿上人が参内の御供をしようと参り集つてゐられた。

いよくお出ましになつた。殿は端麗な御装束で、下の一番年若な若君（長家）に戴餅の事をなされた。乳母の小式部の君が、若やかな様子で若君を抱いて行く様子は、この上もなくめでたく見えた。母北の方はこの様に御子達を數多御持ちになつてゐるが、今日のあたり御見受けしたところ、二十歳位に思はれた。小作りで、小太りで、大相美しい方で、髪かみの毛は細かに清らかで、桂の裾のあたりで末が細くなつてゐた。白い御衣を數も分らぬ程澤山召して、脇息にもたれてゐられる御様子は、大相めでたく、姫君達と又とりくの美しさであつた。侍ふ人々も微笑ましく

お見受けしてゐた。紫壇の數珠の小ぶりなのを手にまさぐられて、何げなく御念誦しつゝ、帯もしどけなく脇息に倚つてをられる御様子が、譬へ様もなく美しいので、殿は若君を抱いて居る乳母に、「ごらん、あの様子はどうか。あの姫達の様子にもなかく劣らず、若く見えるではないか。殊にあの髪の様子などは。」と、如何にも御満足げに見やられつゝ申されるのも、おもしろく思はれた。小姫君があちこちを走り廻られるのを、「あゝ、騒がしい。」とお止めになつたりなさつた。やがて漸くお立ちになり、「ひどく日が高くなつてしまつた。」と御車を急がせられ、多くの殿ばらのもこの後に續いた。

中宮(彰子)は藤壺の上の御局にいらせられた。何かお書き物を遊ばしていらせられるのは、お歌でもあらうか。御齡は二十程でいらせられるけれど、大相お若く見えさせられるのも、元來が小柄でいらせられる爲であらう。しかし餘り小さいので、御一人でお置きするのも不安な位であつた。御髪は前の方々と同様であるが、何ともいへず細やかにめでたくて、御丈に二尺ばかり餘つてゐた。御色は白く美しく、ほゞづきを吹いて圓めた様にふつくりしていらせられた。御装束は並々ならぬ紅の御衣の上に、白い浮文の御衣を召していらせられた。御手習ひの爲にうつむき加減に坐つていらせられるので、御髪がこぼれかゝつて來るのが、大相めでたく見えさせ

られた。女房が所々に七八人づゝうち群れて、押し合つて坐つて居た。色聽いろきされた人々は、誇らかに平綾唐衣、無文の唐衣など、様々美しく着て居た。昔は后は童はお使ひにならなかつたが、當今は御好みでいろくお使ひになつてゐる。やどりき、やすらひなどといふ童が、小さくはないが、髪かみの長い、可愛らしい様子で、かきみ衾かきみを着て、上の袴はつけずにゐる有様は、繪に描いたやうになまめかしく、趣深かつた。殿は中宮に何かと然るべき御物語などせられてから、殿上の間に參られた。例の如く御儀式が行はれたが、總て當世風に華やかであつた。殿はかうした中宮の御有様を御覽になるにつけても、京極殿の姫君達もこのやうになられたらと先づ思ひ出でられるのであつた。中宮はこの頃、御心地が常ならず、御懷妊の御様子で、御食事も召上らなかつたが、仰々しくお騒ぎにもならず、御一人御慎しみになつて、十二月も過させられた。正月も同じ様で、大變御睡さうであつたので、主上はわたらせられて、「十二月にも例のことがなかつたし、この月も二十日にもなるのにな」といふのは、普通の事ではあるまい。父にも母にもその由をいはれたらよからう。」と仰せられた。中宮は仰山すぎると御恥づかしげな御様子であつたが、殿が參内された折に、主上が「あれは知つてゐるか。」と仰せられたので、殿は「何事でございます。」と伺はれると、「實は宮がたゞならぬ様子なのであるが、知らないか。いつもは大變寢いざといのに、この

餘程の事でなければ目が覺めぬ程、睡いらしい。」と仰せられた。殿は驚かれて「さう仰せられれば、この頃はひどく面やつれがしてゐられる様に存じて居りましたが、何とも伺つて居りませんでございました。それでは本當に御懷妊かも知れません。」と申し上げられて、大輔命婦にひそかに御様子をお聞きになつた處、「十二月と十一月の間に例のものは御ありになりましたが、十二月はなくて、この月もまだおありにならないのでございますが、まだ二十日位ですからもう少し御様子を見てから、殿にも申し上げようと存じて居た處でございます。この頃は一向に物も召上らずひどく御惱ましげな御様子でございます。殿にお知らせ申しませうと申し上げますと、そのやうなことをすれば、加持祈禱などとすぐにも大騒ぎになるであらう。もう少しだまつて居て、いよいよ苦しくなつてからお知らせしてくれと仰せられたものでございますから。」と申上ぐれば、殿は何となく涙を御目に浮ばせられ、御心の中ではこれも御嶽精進の効験かと、嬉しく思はれたであらう。司召なども濟んで、この月の終りになつたので、この御事も眞實と決つてきた。北の方もその日にその由を聞かれて、早速參内せられて、色々御慰さめなどなされた。その中に二月にもなつて、花山上皇が重い御病の床におつきになつた。どうした事かと心配してゐるが、御瘡の熱だといふ事であつた。お痛はしくも御最期も近いやうな事を、醫師などたよりなげに申して居た。

とう／＼八日に崩御あらせられた。御年四十一でいらせられた。年末親しくお仕へしてゐた僧も俗も限りなく悼み悲しんだ。殿も、「さすがに風流な御方であられたのに、殘念にも、淋しいことだ。」と仰せられた。御葬送の夜、怖ろしい喪服の當色とうじまを着ることになつて、命婦は

こそぞの春さくら色にといそぎしを今年は藤の衣をぞ着る

と詠んだ。其の他いろ／＼哀れなことが多かつた。

二月には、中宮御懷妊の爲里邸に御退出遊ばされる由を奏聞しなければならぬのであつたが、朔日には御燈御供のことがあるので、それが濟んでから申上げられることになつた。殿のお喜びはこの上もないと思はれた。早くも山々寺々に御安産の御祈り懇に始められた。今は里邸へ御退出になるべきであるけれど、四月にと御留め遊ばすので、そのまゝ御過しになつていらせられた。御噂はいつの間にか世上に漏れ聞えたので、帥殿は胸もつぶれるばかり心を痛められた。世人も若し皇子が御誕生あらせられるならば立太子は疑ひもない事と思つてゐるが、この事ばかりは今から何とも知り難い。しかし殿のこの御幸運から見ると、皇女とは思はれないなどと、噂してゐた。その中に女二宮(嬖子)が御重病で、里邸に御出ましになつて、宮中でも様々の御祈、御修法、御讀經など行はせられたが、相も變らず御重態であつたので、主上は安き御心地もなく、ど

うしたものとおぼし亂れさせられた。

かくて四月朔日に、中宮は宮中御退出になつた。京極殿の松の木立も時知りかほなるを、行末頼もしと御覽するのであつた。様々の御祈は數を盡し、御修法は今から三壇を常とせさせられ、その上に又不斷の御讀經を行はせられ、何ともいひ様もないことであつた。殿は落着いて安眠もなさらず、御嶽にも御安産のみ願つてゐられた。

四月の賀茂の祭は、今年は早く終つたので、二十日過ぎ頃から例の三十講を行はせられる事になつた。五月五日は五卷の日に當つたので、格別に趣あり、捧げものも一入入念に用意せられた。御堂には中宮もおでましになつたので、廻廊まで御簾が青く懸けわたされ、御几帳の裾には川風が涼しげに吹きかよひ、綾は波のやうに鮮かに見えてゐた。さて五卷の時ともなれば、先年は始めての事ゆゑ丁寧になさせられたが、この度はもう萬事簡略に行はれた。しかし今日の捧物は並々ならぬ、趣深いもの、やうに見受けられた。かうしたことは、これといふ制限もない事であるから、好事の方達が競つて贅を盡された。さつぱりとした六位、衛府等の薪を負ひ、水桶荷つて行道する様も面白く、殿ばら、僧俗などが續いて行かれる様は、それ〴〵立派に尊く見えた。薪こりの歌の讚嘆の聲は、苦空無我の聲とも聞え、遣水の音さへ稱應して、物皆總て御法を説く

かと思はれた。法華經を説かれるにつけても、ありがたさに涙もとゞめ難かつた。御簾の端、柱の下から、何気なくこぼれ出た、袖口や、衣のつまなどの、菖蒲ききよ、あふちの花、なでしこ、藤などの種類が見えた。屋根に、ぎつしり葺かれたあやめも、常ならず趣あるものに思はれた。

かねてより用意されて居た捧物をつける枝のさまもそれ〴〵面白かつたが、中でも權中納言(隆家)が銀の菖蒲に藥玉を附けられたのに、若い女房達は目を留めた。普通の別盤わけざらを由ありげな枝につけたのも面白かつた。殿内の有様は常々でも一方ならぬ立派さであるのに、ましてかうした折には光り輝いて見えた。宮の御捧物は殿上人が持つて參つたが、皆別盤わけざらしかつた。諸大夫やその下の役人達迄、それ相應に華やかにしたと見えて、薄様などに包んだ心をこめた捧物を隠しもせず捧げ持つて來るが、別に目をとめて見る人もないのに、やはり御簾の内の高貴な方々に氣をとめてゐる様子なのも面白かつた。主上の御使には式部藏人定輔が參られた。行事が終つてから御返しの品を賜はつたが、祿は菖蒲がさねの織物の袷、紫の袴などであつた。夜になつてから、宮は又御殿に御渡りになつた、尙侍殿(妍子)などと御物語の爲であらう。池の篝火に御燈明の光が照り映えて、一入光り輝き、菖蒲の香も華やかに香るやうであつた。曉には御堂から局に退出する女房達が、廊、渡殿、西の對の簀子、寢殿などを渡つて北の方の御讀經、中宮

の御方の不斷の御讀經などの前を通つていつたが、若い女房達は私の物詣の時等こそ、相應の身分のある人の様に行人を拂はせて得意になつて歩いてゐるが、かうした處をはる／＼と渡つてゆくには、物恥づかしくも、われを哀れとおもふ者も多かつた。

かやうにして三十講も終つたので殿は御心長閑におぼされ、又人々も同じ心で居たが、一方かの女二宮（嬢子）は、一時御重態であらせられたのを石藏の律師が辛うじて御癒し申して、佛の靈驗もあらたかに見えたが、この頃又俄かに御重態になられて、終に御かくれになつた。御齡は今年九歳でいらせられた。主上はかぎりなく哀れに悲しく思召された。御悲しさに變りはないものの、殊に故女院（詮子）が大相おかあいがられた事を思召されるにつけて、お歎きも深かつた。これにつけても帥殿や中納言などは、驚くべき不運な御宿世であると思はれた。御姉一品宮（脩子）は今少し物心づかせられた頃なので、かへす／＼もお悲しみになつた。かやうに帥殿、權中納言等の御縁者が次から次へと御かくれになるのを、どうしたことかと思議に思ふ人も多かつたであらう。中將命婦が、故院（詮子）がこの宮を御養育遊ばされた頃を思ひ出して泣くのを見て、別段のゆかりのない人も涙を止め難かつた。

その中にはかなく月日は経つて、七月となつた。中宮の御様子、今は殊更に御腹も苦しげに、

御見受け申されるので、お傍の人々も大相御心配申上げてゐた。宮中からは御使ばかりがしきりに參つた。主上は格別に承香殿の女御に御志深くあらせられるなどいふ事が自然世間に洩れ聞えて來たが、實際はめつたに、何れの御方へも御渡りになることはむづかしかつた。唯一品宮が宮中にいらせられるので、この方へ渡りになつては、御心を慰めていらせられた。しかし主上はそれにつけても、亡き二宮の御事を様々に御偲び遊ばされるのであつた。

秋の氣色になるに従つて土御門殿の有様はいひやうもなく趣深くなつて來た。池のあたりの木の梢、さては遣水のほとりの草むらもそれ／＼色づき渡つて、一體の空のけしきの面白さに、不斷の御讀經の聲々も趣まさつて聞えて來る。やう／＼涼しくなつた風のけはひに例の絶えせぬ遣水の音が、夜もすがら御讀經の聲に入り交つて聞えてゐた。一日までは法興院の御八講と騒いで居たので、七夕の日も過ぎてしまつた。かうした屠所の羊の歩みを、多くの歲月過して來たことかと思はれた。

かの中宮の御産は九月に御當りになつて居たが、八月にと御祈りをされる向もあつた。しかしこの事は、御懷妊から幾月と月日がきまつてゐるもので、その時にならねばお産はあるものではないと申上げる人があつたので、殿も道理と思はれた。やがてその月も迫つて來たので、御祈り

數を盡して行はれた。五大尊の御修法も行はれ、それごとくその法に従つてなされる御祈は、いかにもこれなればこそと尊く思はれた。觀音院僧正が二十人の伴僧を率ゐて御加持をなされた。馬場殿、文殿等のあたりまで一杯に満ちて、こなたかなたと往來してゐた。御前の唐橋などを老いた、醜い僧が渡つて行かれたりするのには、氣になるけれど、やはり尊く思はれた。その僧がやがて唐橋を渡つて木の間をわけて歸つて行かれる迄も遙かに見やられて、何となく哀れな心持がした。心譽阿闍梨は軍隨利の法なのであらう、赤い法服を着て居られる、齋祇阿闍梨は大威徳を拜んで、腰をかゞめてゐられた。仁和寺の僧正は孔雀經の御修法を行はれ、かやうに次ぎ／＼に代りあつて御修法を行つてゐられる間に、夜も明けはなれた。御祈りの様子は非常にかまびすしく、怖ろしい位で、何に較べやうもなかつた。氣の弱い人などはどきまぎして、あやまちでも仕出かしはせぬかと思はれた。

八月二十日すぎ頃からは、公卿、殿上人など然るべき人々は皆宿直がちで、階の上、對の簀子等にうたゝねしながら夜を明かした。何處に宿直するといふきまりも無く泊つて居られる公達は讀經あらそひをしたり、今様歌など聲を合せて口誦さんで居られるのも面白かつた。殿は時には中宮大夫、左宰相の中將、左衛督、美濃少將などと管絃の遊びをせられた。それが餘りに面白い

ので、僧達の或者などは本分を忘れて遊びに夢中になつたりしたのは、さすがに心苦しく思はれた。この頃焚物合せたきものあひせをなされて御知り合ひの人々にも配られた。中宮の御前でも御香爐を取出して、色々たき試みられたりされた。

その中に九月になつた。九日の重陽の節供も暮れ、籬の菊は千代をことほぐかと、行末おめでたく見えたが、その宵から御心地惱ましげに見受けさせられたので、夜中から慌しく騒ぎ立つた。十日のほの／＼と明ける頃、白い御帳に御移りになり、御装束等も總てかへられた。殿をはじめとして、公達・四位五位の人達は忙がしく立ち歩かれ、御几帳の帷子を掛けかへ、御疊を持つてくるなど非常な騒ぎであつた。この日は一日中苦しげに御暮しになつた。御物怪をさまざまにかり移し、僧達がそれ／＼に分擔して加持せられた。日頃御殿の内に御仕へして居た僧は申すに及ばず、山々寺々の僧で少しでも靈驗あらたかな評判のある者は残らず召集められた。主上は大相御心配になり、どうした事であらうかと思召されて、年頃かやうなことに馴れた女房達を一つ車で土御門殿にお遣はしになつた。僧達は相變らず御物怪をそれ／＼の屏風の中に入れて、一心不亂に大聲をあげて加持してゐた。この程のさうさうしさは推し量られよう。今宵もかうして過ぎて行つた。北の方はこんなに御産の長びくのを異しみ恐ろしいことに思はれて、物にまぎらはして

は落ちる涙を拂ひつゝ、さりげなく隠して居られた。少し物の哀れを知る年齢たった女房達は、皆泣き合つて居た。「同じ御殿の中でも場所を變へると、効果のある事もあるといひます。」などと申し出づる人もあつて、俄に北の廂に御移りになつた。年頃御仕へして物馴れた女房達は皆御傍に着ききつて居た。今はもう誰も彼も氣も轉倒し、堪へかねて泣いて居る女房達も多かつた。法性寺の院源僧都は御願書を読まれ、法華經がこの國に弘まつた次第などを泣く／＼讀み續けられた。哀れにかなしいものながら、又この上もなく尊く、頼もしい事であつた。陰陽師と名のつくものは皆御集めになつて、祈禱を行はせられ、八百萬の神さへ耳を貸されぬ事はなからうと思はれる位であつた。諸寺に御誦經の布施を運ぶ御使が出たり入つたりして、騒がしくその夜も明けた。

その中に遂に御受戒を御受けになることになつた。それと同時に殿が法華經を念じて御安産を祈られた。他の御祈願よりも頼もしく思はれた。やがて大騒ぎの中に漸くの事でめでたく御安産になつた。後産の事をもう一しきりと、廣い御殿の内の僧も俗も、一心に額をすりつけてゐる有様は察せられよう。やがて總てとゞこほりなくお済みになり、宮もおやすみになつたので、やつと殿をはじめとして、一同限りなく喜びあつた。み子は皇子でいらせられたので、その御喜びの

様子も亦並大抵ではなかつた。今は殿も北の方もそれ／＼御部屋にお歸りになり、僧や陰陽師などにも皆祿をお下しになつた。中宮の御前には物馴れた女房達許りがお附きして、若い女達は遠くの部屋で休んで居た。

次いで御湯殿の御儀式の準備が立派にとゞのへられた。御臍緒はらひづなの役は北の方がおつとめになることになつた。これは罪障になる事だとかね／＼思つて居られたが、只今の嬉しさに何事も忘れられたやうである。御乳付けには有國の宰相の妻、主上の御乳母の橘三位が參られた、御湯殿の御儀の盛大だつた事はいふもおろかである。宮中から早速御劔の御使として、頼定中將が參られた。その祿等も大相盛大になされた事であらう。伊勢の奉幣使もまだ歸られない頃なので、宮中よりの御使はあらには見えなかつた。女房達は白装束で、包、袋、唐櫃などを持ち歩いて騒いでゐた。

この御湯殿の御儀は酉の時に始まることとなつた。火をともし、宮の下部どもが緑の衣の上に白い當色たうじきを着た姿で、御湯をくみ込んだ。器物には總て白い覆フクレひがしてあつた。中宮の侍の長仲信が御簾の下にかしこまつた。女房が二人立派な装束を着て、御厨子を持つて來、御湯をうめては十六の御ほとぎに分けられた。女房の湯巻を始め、その装束は總て白一色である。御湯を浴

みせ奉つた者は讃岐宰相の君、御迎湯は大納言君である。若宮は殿がお抱き申上げられた。御護
 劔は小宰相の君、虎の頭は宮の内侍が捧持して御先に立たれた。御鳴絃の役には、五位十人、六
 位十人、御讀書の博士は藏人辨廣業で、高欄の下に立つて史記の第一巻を讀んだ。護身には淨土
 寺の僧都が参られた。稚通少將が僧都に散米の米をかけられたので、僧都が大騒ぎされたのも面
 白かつた。

三日目の夜には、宮司大夫(齊信)をはじめとして、御産養が行はれた。左衛門督(公任)は
 中宮の御膳に奉仕された。沈の懸盤、銀の御皿など、精しくは存じない。源中納言(俊賢)、藤宰
 相(實成)は御衣に奉仕された。御襦袢、衣笥の折立、入帷子、包、覆ひした机など、皆同様に
 眞白なのであるが、それ／＼人の心を盡した跡が見えてゐた。

五日の夜には殿が御産養をなされた。十五夜の月は曇りなく照り、秋深い露に光り輝やいた、
 めでたい宵であつた。公卿や殿上人皆参り集られた。公卿は東の對に、西向に、北を上にして着
 かれた。白い綾の御屏風が御屋の御簾に添へて立て渡してあつた。月のさわやかにさす處、池の
 汀に近く、篝火をともされた邊には、勸學院の衆がござつて参賀に参つてをり、見参の文を奉り、
 祿など賜はつて退出した。今宵の有様は殊に盛大な様に見受けられた。物の數にも入らぬ殿上

人・公卿の御供の下人達や、隨身、宮の下部などがこゝかしこに打群れて嬉しげにさゞめいて居
 た。中には忙しげに歩き廻つて居る者もあつたが、一體皇子御誕生といふことが彼等にどれだけ
 直接に喜びになるのだらうと思はれもするが、それでもかうした新しい御光の御蔭をゆく／＼は
 蒙るやうになることが何となく嬉しいのであらう。所々の篝火、松明、さては月の光等、それぞ
 れに美しいこの宵を、殿の内の人々數にもあらぬ五位などまでも腰をかゞめ、我世に會ひ顔に、
 歩き廻つて居るのも感深かつた。若い、心だてのよい女房が八人ばかりで御膳を捧げて参つた。
 皆同じ様に髪を上げ、白いもとゆひで束ねて居た。白い御盤などをひき續いて捧げた。今宵の御
 まかなひは宮の内侍で、もの／＼しくやんごとない様子をして居た。女房達は皆それ／＼に若く、
 美しいから、見るかひあるやうに思はれた。

殿をはじめとして公卿達が雙六の遊びを始められたが、賭けられた紙の争ひは聞きにくい程の
 大騒ぎであつた。歌などを詠まれた方もあつたやうであるが、物騒がしさにまぎれて書き取るこ
 とも出来なかつた。公卿達が女房達に盃をさして歌詠めといはれたら、何といひ出さうと女房達
 は心配して居た。

珍しき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代をめぐらめ

と紫式部は前もつて歌を考へてゐたが、四條大納言(公任)が御簾の下に居られたので、歌そのものよりも詠み出す時の聲づかひなどを恥づかしく思ひめぐらして居たやうである。かうして總てのことが済んで後に、公卿には女の装束に大袿などを、殿上の四位には袷一襲と袴、五位には袿一襲、六位には袴一具を賜はつたが、前例の通りであつたらう。夜更けるまで、内にも外にも様々のめでたさが満ち／＼してその夜は明けた。十六日には明日の御七夜にそなへて、女房達は装束を換へる用意をして居た。この夜は何の御儀もないので女房達はのどやかに船に乗つて遊び、左宰相中將(經房)、殿の少將の君(教通)なども一緒になつて遊ばれた。いろ／＼心ゆくやうな面白いことが多かつた。

愈々七日の夜は朝廷からの御産養が行はれた。藏人少將道雅が御使として參られた。この方は幼名を松君といはれた方である。目録を書いた文を柳筥やないばこに入れて來られた。やがてそれを奉られ御供に連れられた出納や小舎人に至るまでそれ／＼祿を賜はつて歸られた。又勸學院の衆等がこぞつて參賀に參つて、見參の文を奉り、祿を賜はつて歸つていつた。今宵の有様は、又一段と優つて盛大に行はれた。中宮が御帳のうちに、少し面やつれさせられておふせりになつていらせられるのも、常よりも一入かよはげに拜された。大方の儀式は先日中の事と同じである。

八日には、人々常の装束に着換へた。九日の夜は、春宮權大夫が産養をされた。格別立派に行はれた。今宵は公卿は御簾の際に居られた。御儀式は格別に當世風に行はれた。白い御厨子が一具、白金の御衣箱には海賦、蓬萊などの蒔繪も例の通りではあるが、一段と細かく立派にせられて、一々語り得ぬ程であつた。今宵は御几帳も皆例の有様で、人々は紫の袿を着てゐた。珍らしくもなまめいて、火影に透いた唐衣が艶やかに輝いて並んで見えてゐた。

かうして日は經つて行つたが、中宮はなほ御謹慎遊ばして、十月の十日過ぎても御帳を御出にならなかつた。殿は晝夜を分たず中宮の方に參られて、若宮を御乳母の懷から御抱き取りになり、何ともいへず御嬉しげな御様子も御尤なことと見えさせられた。御尿などがかゝつても、嬉しうになされた。

その中行幸が近く行はれる事になつたので、土御門殿の内を念入りに修理された。丁度法華經の經文のやうに、見れば「老は遠ざかり命は延びる」とさへ思はれるほど輝かしい御殿の有様である。この度の行幸は、若宮を早く御覽遊ばしたい爲であるので、殿は是迄よりも一層用意を急がれて、夜もおち／＼やすまれない位にこの事ばかり心にかけていらせられるのも、誠に尤もなことであつた。行幸は十月の下旬といふことであつた。殿は今度の行幸の爲にわざ／＼造られ

た船を見分せられたが、龍頭鷁首の様はまるで生きて居るやうに思はれる位見事な出来栄であつた。

行幸は寅の時（午前四時頃）といふことであつたので、女房達は夜のうちから化粧などして騒いでゐた。公卿の御座は西の對なので、この度は東の對の女房達は少し心のどかに思つたが、かんの殿の御方の女房達は一層忙しくしてゐたらしかつた。中宮のいらせられる寢殿の御裝飾なども模様をかへられ、御帳の西の方に、御椅子を立てさせられた。それより東の方のきはに、南北の端に御簾をかけ渡して、女房達の座とした。その南の柱の下に簾があり、それを少し引き上げて内侍が二人出て來たが、髪をあげて、正装した姿は、たゞく唐繪か、天人が天降つたのかと思はれた。これは辨の内侍、左衛門の内侍で、とりくの美しさであつた。衣のほひ其の他總て珍らしくも美しく見えた。近衛府の官人がそれく似つかはしい姿でいろくの雜務をとり行つてゐた。頭中將頼定が御劔を取つて内侍に渡された。

御簾の内を見渡すと、例の色を聽きされた人は、赤色、青色の唐衣に地摺の裳を着、上着はおしなべて蘇枋の織物であつた。打物は濃き薄き紅葉をこきまぜたやうで、又例の青や黄色なども交つて居た。色を聽きされない人は、無紋平絹などで、下着も又さまざまである。大海の摺裳に水の色

あざやかに出してゐるのも、大相面白く見えた。宮中の女房達も中宮附きを兼ねた人は四五人づつ集つて居た。内侍二人、命婦二人、御陪膳が一人、御膳を差上げるとて、皆髪あげして、内侍が出られた御簾の際から出入してゐた。御陪膳は藤三位で、赤色の唐衣に黄の唐の綾の衣、菊の袿、上着を着てゐた。筑前、左京などもさまざまに装うて居たが、柱に隠れてよくも見えなかつた。

殿は若宮を御抱きになつて、主上の御前に御つれ申上げられたが、若宮の御聲が大相御可愛らしかつた。辨宰相の君が御劔を持つて續かれた。やがて母屋の中の戸の西の、北の方の居られる方に若宮をお置き申し上げられた。主上が始めて若宮を御覽遊ばした御心地は、如何許り御嬉しい事かと拜察される。これにつけても主上は、「一の皇子（敦康）御誕生の時はすぐ見る事の出来なかつたのもせん方ないことであつたが、かういふ事はしつかりした後見あつてこそ萬事好都合に運ぶものであらう。假令國王の尊き位でも、後見輔佐の人がなくては何事も思ふやうには行かぬものだ。」と思召され、それにしてもこの若宮には確とした後見があられる事であるから、行末の御榮えを思召されて、人知れずかの一宮の御事を、あはれと思召されるのであつた。

主上は中宮と御物語を心のどかに遊ばされる中に、いつか夜となつたので、万歳樂、太平樂、

賀殿などの舞が始まつた。その樂の聲、笛、鼓の音のおもしろきに松風も聲を合せて吹きすまし、池の浪も唱和した。万歳樂の聲に合つて若宮の御聲の聞えてくるのを、右大臣（顯光）はめでたいことともてはやされた。左衛門督（公任）、右衛門督（齊信）が、万歳千秋などと聲を合せて誦された。主人役の大殿は、「今までの行幸をどうして立派とは思つたのであらう、世にはこれ程の事もあるのに。」と、嬉し泣きをせられたのも、誠に尤な事と、殿ばら達も御目をぬぐはれた。かくて殿は御前を退出なされた。主上は便殿に入御あらせられて、右大臣を御前に召し、今日の賞の叙位について筆を執つて記された。官司や殿の家司の然るべき人々は皆加階した。頭辨（道方）がこの次第を執り行つた模様である。次いで藤原氏の公卿達は打揃つて、若宮御降誕の御悦びを奏上した。同じ藤原氏であつても、別流の方々はこの列に加はられなかつた。次に別當になられた宮大夫右衛門督（齊信）、權大夫中納言（俊賢）、權亮侍從宰相（實成）等皆加階して、御禮の舞踏をした。主上は中宮の御座所の方に入御遊ばされて、間もなく夜も大相更けたので、還御の御輿を寄せる騒ぎに、殿も御送りに出でられた。

翌早朝、朝霧のまだ晴れやらぬ中に宮中から御使が参つた。この様に速く御便りのあるのも、若宮の御戀ひしさ故と拜察された。その日、若宮の御髪を始めて剃り奉つた。そして、若宮の家

司、侍者、別當、職事等を任命になつた。北の方は、年來待ち設けて居られた事が成就したので、大相御満足の様子で朝夕若宮の御世話に日を暮してをられるのも、誠に美しい情景であつた。

その中に若宮の御五十日いそひが十一月一日に行はれたが、例の女房達が様々に着飾つて参り集つた様はまるで物合せの競争の様であつた。御帳の東の方の御座の際には、北より南の柱まで隙間もなく御几帳を立てわたし、南面には御饗饌を据ゑてあつた。西の方によつて、中宮の御饗饌が置かれたが、これには例の沈せんの折敷せしきやその他の御道具があつた事であらう。若宮の御前に小さい御壺が六つ、御皿を始めとして總て美しく、御箸の臺の洲濱等大相趣があつた。中宮の御陪膳には、辨の宰相君が奉仕し、女房は皆髪をあげて、釵さし子を挿してゐた。若宮の御陪膳には大納言の君が奉仕した。東の御簾を少しおし上げて、辨内侍、中務命婦、大輔の命婦、中將君など、然るべき人々が相續いて出て來た。讃岐守大江のきよみちの女、左衛門佐源爲善の妻等、日頃参つてゐた女房達に今宵禁色を聽ゆるされた。

北の方が御帳の内から、若宮を抱いてゐざり出でられた。赤色の唐の御衣に、地摺の御裳を美しく召されたのも、立派で畏れ多い事であつた。中宮は葡萄染ぶどうぞめの五重の御衣、蘇枋すけの御小袿等を召させられた。殿が御餅を参らせられ、公卿達は簀子のあたりに並んで拜觀された。その座席達

は例の東の對であつたが、この近くまでも来て、公卿は酔ひ亂れられた。右大臣（顯光）、内大臣（公季）も參られた。大殿の方より折櫃物等、然るべき公卿達が後から／＼と續いて持つて參られ、高欄に並べられた。炬火が暗いので、四位の少將（雅通）や、然るべき人達は脂燭を點してこれを御覽になりながら、明日は御物忌だといふので、今宵の内に内の臺盤所に持つて參られた。中宮大夫が御簾のもとに參つて、公卿達を御前に召さるべき事を奏上した。御勅許があつたので、やがて殿を始め皆參られて、柱の東の間を上にして、東の妻戸の前まで並べられた。女房達も押並んで數知れぬ程大勢居た。大納言の君、宰相の君、宮の内侍が居られる處に、右大臣が寄つて來られ、御几帳のほころびを引きちぎつたりしてお戯れになつた。こんな迄ひどい悪戯をなさらずとも思はれるが、しかし今宵はかうした事すら面白く思はれた。中宮大夫が盃を手持つて、此方に出て來られたが、「三輪の山本」と、催馬樂を口誦んで居られるのも、いつもの御遊びの時は様子が違つて面白く思はれた。その次の間の東の柱の許に、右大將が寄られて、御簾の間から出てゐる衣のつまや袖口等を數へてゐられるのも、又一風變つて面白かつた。酒を召上られぬ方なので、盃の廻つて來るのを怖れて、「千年萬年」などと歌を歌つてはごまかしてをられた。大將が三位のすけ（實成）に盃を賜はると仰せられると、侍從宰相（實成）はこの席に父君内大

臣（公季）がをられるので、殊更に下座を廻つてこれをお受けになつた。内大臣はこれを御覽になつて、酔ひ泣きせられた。御簾の内の女房達も同様に哀れを催した様である。

人々のあまりに酔はれた有様が、何となく恐ろしいので、儀式の終るのを待つて、紫式部と宰相の君はいひ合せて隠れようとしてゐた。折から東面に、殿の御子息達や宰相の中將（經房）がどや／＼と入つて來られたので、二人は慌て、御几帳の後に隠れると、その御几帳を掃ひのけて、二人ながら捕へてしまはれた。そして、「歌を一首お詠みになれば、許してあげる。」と、言はれたので、式部は

いかにいかゞ數へやるべき八千年のあまり久しき君が御代をば
と詠むと、「あゝ見事な出來榮えだ」と、二度程口誦まれて、直ぐにかう返歌をされた。

あしたづの齡しあらば君が代は千歳の數も數へとりてん

大變に酔つてはゐられたが、かね／＼心に掛けてゐられた事故、この様に早速詠まれたものに見える。例の如く祿など賜はつた後に、殿はしどけない御姿でよろ／＼と出て來られ、「宮を娘として持つた自分の幸は勿論の事、自分の様な父を持つた宮もお悪くはなからう。又宮の母もかうしたよい夫を持つたりして、誠に幸な事である。」などと戯れていはれた。北の方は聞き苦しく思

はれて、彼方にはいつてしまはれた。

その中に十七日には、いよく、宮中入御の事になつたので、女房達はそのお支度を急いでゐた。やがてその夜になると、里に歸つてゐた女房達も皆集つて來た。或者は髪上げなどして、美しく裝つてゐた。全部で四十人あまりである。夜も更けて來たので、慌しく入御になつたが、この時女房達が車の順を争つたりなどしたので、殿が出て「きまりがある事だから、そんな事申しても無益だ。」と制せられたので、漸くこの騒ぎも鎮まつた。御輿には、宣旨の君が陪乗せられ、絲毛の御車には、北の方、少將の乳母が若宮をお抱き申して乗られた。さてその夜が明けてから、數々の御贈物等をゆつくり御覽になつた。御櫛の篋が一對あり、その中の細々した御道具等は見盡す事も出來ぬ程であつた。又御手篋が一對あり、片方には、白い色紙で作つた草紙、古今、後撰、拾遺等五帖ほど入つてゐた。その草紙は各四卷づつ、侍從中納言行成と、延幹とに書かせられたのであつた。懸子かたごの下には、元輔、能宣等の古の歌人の家集等が入れてあつた。

その中に十二月になつた。今年も残りの月日も僅かになつてしまつた。思へば、花に宿る蝶の夢の如く、はかなく月日を過してきた事である。若宮は、此の頃は益々御健やかに御成長遊ばされ、恰も山の端からさし出た満月の如くに光り輝いていらせられた。帥殿の方では、それにつけ

ても胸も潰れるばかりに落膽せられ、人知れず心の中に願つてゐられた事もすつかり敗れてしまつた事と思はれて、「やはり自分は、一生涯物笑ひの種となつて終るべき運命なのであらう。たまに珍らしい夢を卜はせてみると、一宮の御將來を見届けない中に、死ぬ様な事があつてはならないといふので、それでもと少しは希望を持つて、齋戒・精進をして日を過し、又神佛にもお祈りをしてゐたのに、今かうなつてしまつた上は、もう死ぬより他はない。」と思はれて、叔父君の明順、道順等に、「空しい望をかけて、世を過しゆくのも、却つて人の物笑ひとなる様な事が出てくるばかりですから、如何したら宜しいでせう。」等と言はれた。叔父君達も、「誠に世間の趨勢はさやうな有様でございますが、それを如何ともする事は出來ますまい。唯御命さへあれば、又何とかよい御運の廻つて來る日もあるかもしれません。」等と、哀れな事を泣きながらいはれた。帥殿も、「かうして唯罪障ばかり作つて過すのも、味氣ない事でございます。物の因果の理を知らぬ私でもございませぬものを、かうして何事かを待つ様な有様で過してゐるのは、我ながらはかない様な氣がします。やはり今は出家して、暫くの間修行し、後生安樂を願はうかと思ひますが、本心から起つた道心ではなしにこの世を捨て、山林に籠つて經を讀んでゐても、この世の事を忘れ去る事も出來まいと思ふと、又決心も鈍るのです。」などといひ續けられた。誠に哀れな事であ

る。中納言(隆家)、僧都の君(隆圓)方は同じく不遇な身ではあるが、深く考へる事もなさらず、却て心安げな様子であつた。この殿ばかりがかくお歎きになつてをられるのだが、これも時代の流れでどうする事も出来ない事と思へば、なほ更に痛はしい思ひがするのである。

やがて寛弘六年となつた。若宮は益々御麗しく御成長遊ばした。主上は御側で遊んでいらせられるのを御覽になつては、中宮に、「昔は宮中には幼いものを置かないきまりで、こんなにも可愛い、宮達に五つか七つで始めて對面する事が出来るといふのであつたが、今にして思へばどんなにか堪へ難い事であつたらう。こんなに近く遊んでゐられるのを見てゐても、まだ飽き足りぬのに、唯思ひやるだけで明暮を過してゐたならば、戀ひしいどころではあるまい。一の宮(敦康)の時は大相長い間見る事が出来ずに、人傳に様子を聞いては、淺ましい程に見たいといふ氣がした事であつたのに……」など仰せられるのであつた。

その中に正月も過ぎた。中宮はまだお産後日も淺くいらせられ、月のものもあらせられなかつたが、十二月の二十日頃にしろしばかりあらせられ、今年になつて正月の終りになつてもその御様子がないので、まだお産の名残かと思つて、御懷妊とは思ひもかけなかつたが、去年の此の頃と同じ様な御氣分にならせられたので、側近の人々も、「又御懷妊であらう。」とさゝやきあふやう

になつたが、又「まだそんな筈はあるまい。」と否定する者もあり、又、「かやうに引續いて御妊娠になる事もある事である。さてもおめでたい事である。」などと申す者もあつた。殿も北の方もこの由を聞かれ、大相喜ばれた様であつた。その中に三月にもなると、はつきり事實となつてきた。殿の御喜びは何とも形容の出来ぬ程であつた。

その中に自然この事が世間にも洩れ聞えてきた。年來お仕へしてゐる女御達は、この事によつて一入恥づかしく思はれた事であらう。女御方の御父、右大臣、内大臣は、「我等も同じ藤氏であるのに、中宮にのみかゝる御寵幸のあるのは、誠に恥づかしい前世の因縁である。」と、思はれた事であらう。中宮は三月下旬に宮中を御退出なさらうと遊ばされたが、主上が一向お許しにならないので、暫くはそのまゝにいらせられた。

この頃、殿の三位殿(頼通)が左衛門督に任せられた。一方、中宮御安産の御祈はやはり里邸で行はれる事になり、四月中頃に御退出になつた。主上には此の度は若宮の御戀ひしささへ添へて、さぞかし御心も晴れやらぬ事であらう。京極殿にお入りになると、尙侍殿(かしのかんの)(妍子)は若宮を大相待ち焦れておいでになり、その後は御乳母達は御乳を參らせるばかりで、この方が始終抱いてお守りを遊ばした。御乳母達も大相喜んでゐた。中宮の御祈は、前年の如く、残る所なく行

はれた。

かの花山上皇の御寵愛になつていらせられた四の御方（爲光女）は、上皇崩御の後は鷹司殿にお渡りになつていらせられた。殿はこの方に思召す事があつたが、北の方が何かと常に世話をし上げてをられるので、さすがに躊躇してをられたが、どういふ宿世か思ひ断ち難い様子であつた。

この頃、殿の左衛門督（頼通）を婿にと望まれる方々も多かつたが、まだ何れともきまつてゐなかつた。その中に六條の中務の宮具平親王から姫宮（隆姫）の御婿にとの御望みであつたので、大殿も畏れ多い事と恐懼して、「男は妻が大切なのだ。かういふ尊いあたりに参るこそ願つてもない事である。」と言はれた。この宮は村上天皇の御七宮で、麗景殿の御腹の皇子である。御息所は村上天皇の四宮爲平の式部卿宮の御中姫君で、又その母君は故源帥の大臣の御女の腹であつた。この御仲には女宮三所、男宮二所おいでになつたが、中でもこの隆姫を特に大切にしていられられた。この様に總てに不足のない御家庭である上に、御夫婦仲も極めて美しかつた。又この宮の御心ばへも一通りならず勝れさせられ、學問も非常にお深い上に陰陽道・醫術の事にも驚くべき造詣を持つていらせられた。又漢文和歌等の方面にも人並勝れていらせられ、奥床しくも亦人目

恥づかしい様なお方であつた。

かくて内々御支度も調へられて、やがてその日になつた。この姫宮はかねては宮中へとの御望みもあらせられたが、これも前世の因縁であらうか。さて御附きの女房二十人、童・下仕四人づつ、總て奥深い、床しい御有様であつた。御香も當世のものとは違つて、これが昔くのエ香といつて世にもてはやされた物かと、非常に珍しく思はれた。姫宮は御年十五六ばかりで、御髪はかんの殿に大相よく似ていらせられるといふ事であるが、御容貌の美しさも推し量られよう。中務宮は御婿を大相大切に御待遇させられた。やがて數日経つてから、廣く一般への御披露を行はれた。この日の御供に参る人々は、大殿自ら選ばれた。その夜の御儀の有様は、少しの不足もなく、めでたく行はれた。婿君の御氣だて、御容貌は必ずしもその妻の身分によつてめでたく見えるばかりではないが、佳きが上にもましてこの御仲は一層めでたく見えるのであつた。宮もかひある事と思召された。この六條殿への明暮の御通ひにも途中百鬼夜行にお逢ひになる事もあらうと不安に思はれて、殿は京の北方この六條殿の近くに新たに御殿を造營されようと計畫して居られた。

一方、中務宮は今御安心になられたので、かねてよりの御出家の御本意を遂げようと思召し